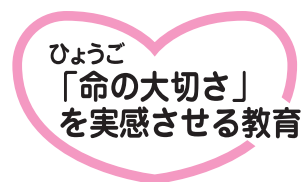


改訂版



「命の大切さ」

を実感させる教育への提言

平成 19 年 3 月

「命の大切さ」を実感させる教育プログラム構想委員会

改訂版刊行にあたって

昨年度、兵庫県教育委員会は、命の大切さを実感させる教育プログラムを研究・開発することを目的に、プログラム構想委員、意見聴取委員、プロジェクト・チームからなる『「命の大切さ」を実感させる教育プログラム策定委員会」を設置した。我々プログラム構想委員は、命の大切さを実感させる教育の在り方について慎重に検討を重ね、その成果を『「命の大切さ」を実感させる教育への提言（第1版）』としてとりまとめた。

この提言を、広く、そしてより多くの教員に浸透させるべく、ホームページを開設し Web 上で公開したところ、兵庫県のみならず、全国各地から問い合わせが多く寄せられ、「命の大切さ」を実感させる教育に対する関心の高さがうかがえた。これも、子どもの命に関わる重大な事件や事故が後を絶たないことと関連が深いものと思われる。

特に最近、相次いで起こっている「いじめ」の問題は、一段と陰湿さを増し、時には被害者の子どもの自殺という悲劇的状況を招くところまで至っている。当然のことであるが、「いじめ」の問題は、子どもたちだけの問題ではない。子どもは大人の生き方を、親や教師の姿を見て育つことを我々は強く自覚する必要がある。すべての大人は自らの生き方を見つめ直し、「生きる」ことの意味を一人ひとりが考えるとともに、「生きる」ことの意味を子どもたちに教えていかなければならないのである。

『「命の大切さ」を実感させる教育への提言（第1版）』は、日々子どもたちと向き合う学校現場の教師はもとより、「命の大切さ」を実感させる教育に取り組む多くの教育関係者に活用されてきたところであるが、このたび、更に内容を充実させた改訂版を刊行する運びとなった。これまでの第1版の内容に加え、月刊『兵庫教育』の連載講座 - 命の大切さを実感させる教育プログラム - と教員研修例「テレビゲームとのかかわり」を新たに収録している。月刊『兵庫教育』の連載講座は、子どもと関わるすべての大人に求められている、命に対する豊かでしなやかな感性や深い感覚を磨くきっかけとなるものばかりである。折りにふれ、手に取り、何度も読み返し、そして心に刻んでいただきたい。また、教員研修例「テレビゲームとのかかわり」は、高度情報化社会を生きる我々に欠かすことのできない視点であり、情報社会の影の部分への一つの対応となるだろう。

教育の究極的な目標は人間のあり方そのものの成長である。子どもたちが命を大切にしたい生き方ができるよう、教師各自があらゆる学習指導の機会を通じて、子どもたちの生き方に影響を与える教育実践をしていかなければならない。命の教育の実践をめざすすべての人々にとって、この『「命の大切さ」を実感させる教育への提言（改訂版）』が、有効に活用されることを心から願っている。

平成19年3月

兵 庫 教 育 大 学
学 長 梶 田 勲一

は じ め に

兵庫県では、阪神・淡路大震災を一つのきっかけとして、子どもたちの心の成長や心の教育の在り方について様々な角度から議論し、子どもたちの生きる力を育むために、全国に先駆けて様々な取組や教育実践を重ねてきた。

しかし、近年自分だけの狭い世界から出ようとしなかったり、自分勝手な思いで行動したりする子どもが増え、命に関わる事件等を引き起こす子どもまで現れている。その背景として、規範意識の低下や社会性の不足等も指摘されている。これらの問題を解決するためにも、子どもたちに「命の大切さ」を実感させることが求められる。そして、子どもたちが自分の中でうごめく不定形の強い力に気づき、それを自分で統制し、うまくつき合っていけるよう支援していくことが必要となる。

子どもたちは、世の中（我々の世界）で生きていく力と同時に、自らの独自固有の内面世界（我的世界）を大切にし、内的な充実感のある生を生きていく力を身につけなければならないのである。そのためには、自らの心を揺り動かすものとの出会いを大切にし、折にふれ自分自身を振り返り、自分自身と対話することにより、自分の人生を自分の責任で生きていくことができる力を育てていくことが必要なのである。大事なはその「我的世界」において、自分が存在しているという意識を持つことであり、生きていることの素晴らしさや喜びを感じることである。子ども自身の中にそれが実感として湧き起こり、心の底から大事だと思える、そういう世界がまず土台になくなくてはならない。つまり、発達段階に応じて、「命の大切さ」を概念としてではなく実感として深く心に刻み込むことが、未来を担う子どもたちに生きる力を培うことにつながるのである。

そこで、我々は、子どもたちに「命の大切さ」を実感させるための具体的な方策について検討を重ね、子どもたちに生きる喜びを実感させ、自他の命を大切にすることができる教育プログラムを作成した。第 部理論編には子どもたちに「命の大切さ」を実感させる教育を推進していくための基盤となる考え方を、第 部実践編には「命の大切さ」を実感させる教育を実践していく上でのモデルとなる教育プログラムモデル及び授業用指導案、そして子どもたちに命の大切さを実感させる教育におけるもう一つの基盤となる教員研修を示している。

心の教育の一層の充実に向けて、この「命の大切さ」を実感させる教育プログラムが、子どもたちの実態や発達段階、また学校の実情に応じて、教育活動の中のあらゆる機会をとらえて活用されることを願うものである。

平成18年3月7日

「命の大切さ」を実感させる教育プログラム構想委員会
委員長 梶田 勲一

提言のまとめ

「命の大切さ」を実感させる教育の推進 なぜ今「命の大切さ」なのか

核家族化の進行によって、家での出産や親族の死等、命に関わる大事な場面にふれる機会が少なくなる一方、子どもたちの遊びの形態も変化し、仮想の世界の中で作り上げられた死に頻繁に接する中で、現実感覚が麻痺している側面がある。また、子どもたちの命の重みに対する感受性が弱まっていることも指摘されている。

「生きる喜び」と「命の大切さ」を実感させる

子どもたちの生き方に影響を与える心の奥底の実感的基盤は、感動をはじめとした様々な体験から得られるものである。そこで、子どもたちに、命のかけがえのなさ、命がつながりあっていること等に気づかせ、生きることの素晴らしさや生きる喜びを実感させることが必要である。

「命の大切さ」を実感させる教育プログラムへの視点 自尊感情を育む

成就感・達成感や周囲からの愛情等を実感させることをとおして、自分自身をかけがえのない大切な存在だと思える自尊感情を育む。ただし、それが独りよがりにならないように自省自戒の習慣を身につけることも必要である。

体験活動を充実させる

自然にふれる体験活動や人とのつながりを実感できる社会体験活動、誕生・成長等の喜びにふれる体験や老いにふれる体験、死の悲しみにふれる体験等をおして、子どもたちに感動を味わわせ、感性や想像力を豊かにする。

情報社会の影の部分に対応する

仮想現実と現実との違いを認識させ、有害情報から身を守る力を身につけさせる等、子どもたちが適切に情報を活用できる力や情報社会での基本的なモラルを身につけさせ、情報社会の影の部分への対応ができるようにする。

命を守るための知恵と態度を育成する

子どもたちの身近にある命をおびやかす行為に対して、未然に防いだり、被害を最小限にいとめる知恵を学ばせるとともに自他の命を守っていこうとする態度を育てる。

教員自身が命の意味を問いかける

教員自身が自らも一人の人間として与えられた命を生きていることを自覚するための研修を充実させ、対面する子どもたちに命について深い感覚を伝えられるようにする。

教育プログラムモデルと教員研修

授業用指導案の作成と実践

子どもたちの発達段階を考慮して、実際の学習・体験内容をテーマごとに整理した教育プログラムモデルを作成した。この教育プログラムモデルに基づいて、人間としての喜びや悲しみ等にふれる体験をバランスよく組み合わせることにより、授業用指導案が作成できる。

実践に当たっては、ねらいを明確にし、事前の準備を注意深く行うとともに、事後の振り返りをおして、子どもたちの日常生活につながるように配慮しなければならない。また、子どもたち一人ひとりの多様多彩な状況を把握し、家庭や地域の環境条件の違いなどにも十分に配慮することが必要である。

実践を支える教員研修の充実

各学校、各教室で実践していく上では、教員自身の不断の研修が不可欠である。そのために、自己研修や校内研修、地域での研修等多様な形での教員研修の充実を図らなければならない。

委員会の経緯

子どもたちを取り巻く今日の状況は、核家族化の進行等に伴い大きく変化し、子どもたちが家族の死に直面し、生や死について考える機会がほとんどなくなっている。また、以前と比較すると、動物と直接ふれあう機会も減少し、日常の生活の中で命あるものを身近に感じることも少なくなっている。そのため、現実と非現実、生と死の境が非常に見えにくくなってきており、命の大切さを実感としてとらえきれない子どもが増えてきている。

こうした子どもたちを取り巻く社会環境の急激な変化の中にあっても、自他の命を大切にすることは、時代を超えても変わらないものであることを理解させるため、兵庫県教育委員会は、小学校、中学校、高等学校の発達段階に応じた、命の大切さを実感させる教育プログラムを研究・開発することを目的に、プログラム構想委員、意見聴取委員、プロジェクト・チームからなる「命の大切さ」を実感させる教育プログラム策定委員会を設置した。

以下、委員会の経緯を記す。

プログラム構想委員会

第1回構想委員会

日時：平成17年6月21日（火）14:30～16:30

場所：六甲荘

第2回構想委員会

日時：平成17年11月29日（火）14:30～16:30

場所：六甲荘

意見聴取

平成17年7月～8月

プロジェクト・チーム

第1回プロジェクト・チーム会議

日時：平成17年6月14日（火）15:00～17:00

場所：県立教育研修所

第2回プロジェクト・チーム会議

日時：平成17年8月18日（木）14:00～16:00

場所：県立教育研修所

プロジェクト・チーム会議ワーキング

日時：平成17年9月13日（火）15:00～17:00

場所：県立教育研修所

第3回プロジェクト・チーム会議

日時：平成17年12月12日（月）14:00～16:00

場所：県立教育研修所

目 次

改訂版刊行にあたって	i
はじめに	ii
提言のまとめ	iii
委員会の経緯	iv

第 部 理論編

1 「なぜ今「命の大切さ」なのか	1
（1）命をめぐる危機的状況	
（2）本県における取組	
2 「命の大切さ」を実感させる教育の推進にむけて	2
（1）実感するということ	
（2）大人たちに求められること	
（3）「命の大切さ」を実感させること	
ア 生きる喜び	
イ かけがえのない命	
ウ 命のつながり	
3 「命の大切さ」を実感させる教育プログラムへの視点	4
（1）自尊感情を育む	
（2）体験活動を充実させる	
ア 自然・社会・人との豊かな関わり	
イ 心が動く感動との出会い	
ウ 感性や想像力への働きかけ	
（3）情報社会の影の部分に対応する	
（4）命を守るための知恵と態度を育成する	
（5）教員自身が命の意味を問いかける	
4 「命の大切さ」を実感させる教育の実践のために	7
（1）教育プログラムモデルの準備	
ア 子どもたちの発達段階に応じて準備する	
イ 喜びと悲しみを組み合わせて準備する	
ウ 様々な体験を準備する	
（2）実践を支える研修	
（3）授業実践の在り方	
ア 準備から振り返りまで	
イ 家庭・地域との連携	
「命の大切さ」を実感させる教育についての有識者からの意見	11
河合 隼雄 「つながり」を実感できる体験活動を	12
高木 慶子 感性を豊かにする体験学習の大切さ	13
日野原 重明 「命の使い方」について共に考える	14
養老 孟司 「命の大切さ」は人としての生き方そのもの	15

第 部 実践編

実践編の構成と活用方法	16
1 教育プログラムモデル	17
(1) 生きる喜びの実体験	17
(2) 教育プログラムモデルと発達段階	17
(3) 教育プログラムモデル例	19
誕生の喜びと感動	20
成長の支援への感謝	26
限りある命の尊さ	32
理解し合う心に支えられた命	38
尊い命を守るために	44
2 授業用指導案	49
(1) 授業用指導案の作成	49
(2) 授業用指導案例	50
命を守るために（小学校高学年）	51
自分を大切にすること（中学校）	55
命の大切さを実感させること（高等学校）	59
3 教員研修	63
(1) 求められる研修内容について	63
(2) 教員研修例	63
自尊感情を高める	64
< >ここがあなたのいいところ	64
自己再発見	68
< >私の人生の振り返り	68
< >私のかげがえのない人	72
コミュニケーション能力を高める	76
< >自他を大切に自己表現能力を高める	76
< >日常のコミュニケーション能力を高める	79
情報モラル指導力を高める	82
< >インターネット上の有害情報等への対応	82
< >ノーテレビデー体験	89
< >テレビゲームとのかかわり	92
死と向き合う人々や犯罪被害者・遺族から学ぶ	96
< >ターミナルケアに携わる人々の話を聞いて	96
< >犯罪被害者・遺族の声を聞いて	98

第 部 月刊『兵庫教育』連載 編

平成 18 年度 月刊『兵庫教育』連載講座 「命の大切さ」を実感させる教育プログラム…	101
4月号 梶田 叡一 「命の大切さ」の教育を ……………	102
5月号 藤井 美和 教育にかかわる側に問われるもの ……………	104
6月号 上地 安昭 教育の核心として「命の大切さ」の実感を育む ……………	106
8月号 富永 良喜 尊い命を守るために ……………	108
9月号 加藤 寛 「人が傷つくということ」 ……………	110
10月号 井本 智勢子 生きるってすばらしい ……………	112
11月号 高木 慶子 親友をなくした悲しさから ……………	114
12月号 皆藤 章 「生きる」在りようから考える ……………	116
1月号 養老 孟司 いのちの大切さ ……………	118
2月号 日野原 重明 いのちの大切さ ……………	120
3月号 柳田 邦男 バーチャル映像より現実体験を ……………	122

第 部 資料編

兵庫県教育委員会 命に関する教育のこれまでの取組 ……………	124
「命の大切さ」を実感させる教育プログラム策定委員会設置要項 ……………	131
プログラム構想委員名簿	
プロジェクト・チーム名簿	
事務局名簿	

第 部 理論編

1 なぜ今「命の大切さ」なのか

(1) 命をめぐる危機的状況

近年、子どもの命に関わる重大な事件が多発している。その中に見られる突発的な攻撃性、反社会的行動等は心の問題ということができるが、とりわけ、事件を起こした大人や子どもたちが命をどのように認識していたかが問い直されている。

少子化、都市化、情報化等の社会の急激な変化は、子どもたちに様々な影響を与えている。かつては日常生活の中で、家での出産や親族の死等命にふれる機会が多かったが、核家族化の進行によって、そうした命に関わる大事な場面にもふれる機会が少なくなっている。多くの子どもたちにとっても、生や死のもつ意味について考える機会や、人の命の有限さやかけがえのなさを理解する機会が失われ、命を実感としてとらえる場が失われてきているのである。

また、都市化に伴う連帯感の希薄化や地域の教育力の低下、子どもたちの遊びの形態の変化等を背景に、子どもたちの倫理観や社会性が不足していることが指摘されるようになった。人とのふれあいは安心感ややすらぎを生む一方で、摩擦やわずらわしさの原因にもなるが、そうした人間関係を忌避し、人とうまく関わることができない子どもたちが増えてきている。

さらに、情報化の進展は、創造的な活動の展開を容易にした一方で、人間関係の希薄化や直接体験の不足等深刻な問題も生み出している。特に、ゲーム機を中心とした遊びが増え、仮想現実の世界に容易に入り込むことができるようになり、虚構の世界の中で作り上げられた死に頻繁に接する中で、子どもたちの現実感覚が麻痺している側面がある。この実感を伴わない死の感覚が命の軽視につながっているのではないかとされている。また、人間は死んでも生き返ると思っている子どもやリセットすれば簡単にやり直しがきくと考えている子どもの存在等、子どもたちの命の重みに対する感受性が弱まっていることも指摘されている。

(2) 本県における取組

本県では、阪神・淡路大震災や神戸市須磨区の児童殺傷事件から、心の教育に関わる多大な教訓を得た。その教訓から、生と死を考え生命の大切さを考える教育の充実、家庭における基本的な生活習慣や倫理観等の育成、情報社会の光と影に対応した教育の充実等を推進してきた。そして、心の教育総合センターを設置し、心の教育に関する実践研究を進めるとともに、子どもたちの内面に自己肯定感や成就感、規範意識等を育むことをねらいとした「自然学校」、「トライやる・ウィーク」、「高校生地域貢献事業」、「高校生就業体験事業」等の体験的な学習を推進してきた。また、家庭教育の充実や地域全体で子どもを育てるという機運を高めるための取組や、子どもたちの情報リテラシーの育成と情報社会の影の部分についての指導の充実を図るための実践的研究を推進してきた。さらに、人間の誕生の喜びや死の重さ、生きることの尊さを知り、自他の生命を尊重して生き抜こうとする心を育てることを目指した「生き方を学ぶ性教育」指導資料の作成、「生と死を考える」教職員研修等に取り組んできた。

このような取組の上に、子どもたちに自他の命を大切にすることは時代を超えても変わらな

いものであることをより深く理解させるとともに、命を尊ぶことのできる豊かな人間性を育むために、今、改めて求められているのは子どもたちが「命の大切さ」を心から実感することなのである。そして、その実感を現実の行動に反映することができ、子どもたちに行動規範として身につけさせることが必要なのである。

2 「命の大切さ」を実感させる教育の推進にむけて

日ごろの行動に反映され、子どもたちの生き方に影響を与える心の奥底の実感的基盤は、感動をはじめとした様々な体験から得られるものである。その感動は、豊かな感性と深い想像力によりもたらされ、生活の中で生きる喜びを味わうことがきっかけとなって湧き上がるものである。子どもたちは他者との関わりの中で豊かな感情を身につけ、生きる意味を見いだすのである。つまり、子どもたちが生きる喜びを味わうのはすべからず他者との関わり合いにおいてであり、そのためにも相互に理解し支え合う気持ちやその思いを伝え合う力を養っていかなければならない。

(1) 実感すること

「命は大切であるか？」と尋ねられれば、「大切である」と子どもたちは答えるだろう。しかし大事なのは「命は大切である」と言葉の上で理解することではなく、一人ひとりが心から実感することである。実感は体験する中で得られるものであるが、ただ体験さえすれば実感できるものではない。子どもたちの生育過程をとおして形成される心の奥底の実感的基盤があってこそ得られるものなのである。そのためには、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうといった経験そのままの感覚、つまり自分の身体をとおして感じるものを出発点としなければならない。そして、経験そのままの状態、いわば言葉になる以前の感覚を大切にすることが必要である。なぜならこの言葉以前の感覚が価値あるものに「ハッ！」と気づくきっかけになり、気づくことが全身の共感を呼び起こし、それが実感へとつながるからである。

そして、実感がそれだけで終わるのではなく、その実感が具体的な行動となって現れることが大切なのである。体験の中でどのような気づきを得られたか、どのような感じ方をしたのか、どのようなものの見方、考え方を身につけたのか、そしてそれらをもとにどのような行動をとれるかが重要なのである。

(2) 大人たちに求められること

様々な環境から子どもは学んでいくものであるが、とりわけ周囲の大人の存在は其中でも重要な学習環境である。したがって、大人が豊かでしなやかな感性を持ち、実生活において他者との関わりを深め、その中で喜びや悲しみ、楽しみや苦しみ等の豊かな体験をし、命と向き合うことが大切である。大人たちの生や死に対する真摯なまなざしが、子どもたちに命の大切さと向き合う力を与えるのである。

特に、直接子どもたちと接する親や教員にとっては、与えられた命を生きていることを自覚し、子どもたちと一緒に命の大切さを考えようとするのが大切なのである。

(3)「命の大切さ」を実感させること

子どもたちは、自分自身を肯定し、自分自身をかけがえのないものとしてとらえることで、今生きているその喜びを感じることができるようになる。また、命には限りがあるが、祖先から子孫へと伝えられることや、他の生き物を食物としていただいて自らが生きていること等から、命はつながりそして互いに支え合っていると感じる事ができ、生きているということに感謝の気持ちを持つことができるのである。そして、それらの喜びや感謝の気持ちが自分の命をはじめ、すべての命を大切に作る心につながるのである。

ア 生きる喜び

「生きていてよかった!」「生きるって素晴らしい!」と子どもたちが感じるのは、様々な活動の中でほめられたり認められたりする体験、自分のよさを見つけたり自分の存在を認めなおす体験等をとおして「自分もいいところがあるんだ」「今のままの自分でいいんだ」と感じる時である。また、学校行事等でクラスの仲間や友だちと心が一つになるような連帯感が味わえる体験、何かの課題に一生懸命に取り組んで「できた!」という声を思わずあげてしまうような感激の体験、人の役に立てたという満足感を味わえる体験、読書や音楽等への没頭体験等も喜びの体験となる。

そして、唯一無二の存在である自分自身が限りある命を生きていることで、様々な喜びの体験や他者と共に支え合っていることへの感謝の気持ち等が、生きることの喜びをより深めるのである。

イ かけがえのない命

あらゆる命には限りがあり、生あるものは必ず死を迎える。そして命は一度失うと取り返すことができない。だからこそ命はかけがえのないものなのである。祖父母や家族等の身近な人の死を経験した子どもたちや、学校や家庭で飼っていた動物の死を経験した子どもたちは、こうした命の有限性や死の不可逆性に向き合わざるを得なくなる。大切な人やものを失うことによって、その存在やかけがえのなさを実感するのである。

今生きている自分は、世界中にたった一人しかいない唯一無二の存在である。その自分を見つめることは、自分をよく知り、自分のよさを認めることから始まる。今生きている自分の存在を認め、今生きている自分のかけがえのなさを理解することにより、他の命、他者の存在を尊重するようになるのである。

ウ 命のつながり

私たちは様々な人々、あるいは自然や動物等との関わりの中で生活している。今自分自身

が生きているのは、直接あるいは間接を問わず、様々な人々や自然の営みのおかげである。私たちが日々食べているものはすべて命あるものであり、その命によって生かされているということ、それをいただいて生きているということをしかりと受けとめる必要がある。また、今の自分の命は、遠い祖先から祖父母、父母、自分へと脈々と受け継がれてきたものであり、そうして受け継いだ命は未来に向かってもつながっていくものであること等、命というものが決して自分だけのものではなく、つながっているものであるということを感じとる必要がある。自分はたった一人で生きているのではなく、他者と共に生きている存在であるという思いを持てることが大切なのである。

3 「命の大切さ」を実感させる教育プログラムへの視点

「命の大切さ」を実感させるための教育プログラムにおいては、自然や社会や人と豊かに関わる体験活動をとおして、まず子どもたちが自分自身を価値ある存在と認め、自分を大切に思う自尊感情を持てるようにしなければならない。自尊感情を高めることによって感性が活性化し、いきいきとした感動が生み出されるのである。そして心の中に生まれた感動や思いを、周りの人と分かち合い共有することで、実感が一層深まる。また、他者の存在に思いをはせたり共感したりする体験をとおして想像力が養われ、限りある命を生きていることの素晴らしさを感じることができるようになる。

また、教育プログラムの実施に当たっては、教員自身が自分の生と向き合い、自分の生き方を自分自身に問いかけることとともに、学校と家庭、学校と地域が確かな信頼関係を築き、連携して取り組むことが不可欠である。

さらに、命をおびやかす行為に対しては未然に防ぐ対策を、また自然災害に対してはその被害を最小限に食い止める知恵を学ばせるとともに、情報社会の影への対応として、仮想現実と現実との違いを十分に認識できる能力を身につけさせる必要もある。

(1) 自尊感情を育む

自分の存在そのものを価値あるものとして自分自身が認めることができなければ、生きていることの素晴らしさを感じることはできない。つまり、教育プログラムを実践するに当たっては、前もって子どもたちの自尊感情を高めておかなければならないのである。

兵庫県教育委員会が実施した「児童生徒の理解に基づく指導の推進に関するアンケート調査」で、自分や他者のよさを認めることができる子どもほど、他者から認められる体験をしているという結果が得られている。自分の存在を認めてくれる他者が身近にいる子どもは、自分が大切にされているという実感を持つことができ、自分の存在が価値のあるものだという自信を持つことができるのである。

また、他者から認められないときでも、自分自身を肯定し、自分の短所や弱さも含めてある

がままの自己を受容できる強さを培う側面も必要である。そのためにも、日常の様々な活動をとおして、自分の存在が価値のあるものだとして認識し、自尊感情の高まりを体験しておくことが必要である。

さらに、自己を尊重するとともに他者を尊重することも大切であり、自己を肯定するだけの独りよがりにならないように自省自戒の習慣を身につけることにも留意する必要がある。

(2) 体験活動を充実させる

ア 自然・社会・人との豊かな関わり

子どもたちに言葉だけで「命は大切である」といくら説明しても実感は伴わない。命が大切であるという思いは、体験をとおして心に刻まれる。感性に働きかける体験、感動の体験、想像力を刺激される体験をとおして、子どもたちは生きている喜びを感じるのである。そこで、動植物の飼育栽培活動に心を込めて取り組む中で命が生まれる喜びや死の悲しみを味わったり、精一杯生きようとする人々とのふれあいをとおして生きることについて深く考えたりする等、命と直接関わり合う場を設定することが必要となる。

また、「トライやる・ウィーク」で中学生たちが地域の人々とふれあう中で自己理解を深めたり、認められることにより自己肯定感を高める体験をしているように、様々な体験の中で人と人がつながるといふことを実感することも大切である。

イ 心が動く感動との出会い

感動が入り口となり、心をいきいきと動かす体験によって実感が生まれる。自然の雄大さや美しさ等にふれることで「自然ってすごいな！」と心が動く。また、動植物の誕生や死の体験、弟や妹の誕生の体験等から、「不思議だな!」「素晴らしい!」と自然や生命への畏敬の念が培われるのである。

また、「やった、わかった!」という達成感、最後までやり遂げた成就感、「自分もやればできるんだ」といった自己有能感を様々な活動の中で子どもたちが味わえるようにしておくことが大切である。修学旅行や文化祭等で、クラスがまとまり一つのことをやりとげた体験は、仲間とのつながりを深めていく。こうした魂に響くような体験を積み重ねることによって、子どもたちは「命の大切さ」の実感を深めていくのである。

ウ 感性や想像力への働きかけ

体験をとおして生まれてくる実感は、視覚、聴覚、触覚等といった感覚が入り口となる。大切なのは単に感じるだけではなく、より深く感性を働かせ想像をめぐらせることなのである。

豊かな感性や想像力は、自然や社会や人との相互作用の中で発達するものであり、それらを育むためには、まず環境としての自然や社会や人としっかり関わりを持つことが大切である。子どもたちの感性や想像力に働きかける体験活動の場や機会を積極的に提供するととも

に、保護者や教員が自らの感性を子どもたちと共に磨き、その素晴らしさや感動を分かち合い認め合うことが重要である。

子どもたちの感性や想像力に働きかける機会は、日々の関わりの中に無数にある。例えば、本物の芸術に直接ふれることが子どもたちの芸術性を育てるように、「命の大切さ」を実感する感性も、「自然なもの」「本物・具体的なもの」等子どもたちの五感を揺さぶるものと直接ふれることによって育まれる。また、学習や体験の中で子どもたちが示す「おやっ！」といった思いを大切にしたり、立場を変えて他者の感情に思いをめぐらせる等の活動をとおし、子どもたちの感性や想像力に働きかけることが必要なのである。

(3) 情報社会の影の部分に対応する

高度情報通信ネットワークの進展や電子メディアの発達により、時間や空間にとらわれないコミュニケーションが可能となり、日常生活がより便利になる一方で、子どもたちが有害情報に容易にふれてしまうことや仮想現実と現実を混同してしまう恐れがあること等が指摘されている。電子メディア等とおしたコミュニケーションは、様々な立場や考え方を持った人々と交流を可能にし、子どもたちの人間関係の幅を広げそれを豊かなものにできるが、一方で、好悪の感情の過剰な増幅をもたらしやすい。また、何度でもリセット可能なゲームの世界に入り込み過ぎると、実体験が豊富でない子どもたちに過剰な刺激を与えることになり、子どもたちが現実の物事をゲーム感覚でとらえてしまう恐れがあることも指摘されている。

このような情報社会の影の部分への対応として、仮想現実と現実との違いを認識させ、多種多様な情報のあふれるインターネット社会において、子どもたちが惑わされることなく、必要な情報を適切に活用できる力や情報社会での基本的なモラルやマナーを身につけさせることが求められている。自分の考えや気持ちを伝えること、また相手の言葉や態度から気持ちを汲み取ることのできる力を培い、現実世界での人と人とのつながりの大切さを子どもたちに理解させる必要がある。

(4) 命を守るための知恵と態度を育成する

命はかけがえのないものであり奪われると決してよみがえることはない。しかし、子どもたちの身近にいじめ・暴力・犯罪・虐待・DV等の命をおびやかす行為が存在する。これらに対して、未然に防ぐ方法を考えたり、対策を講じる必要がある。また、地震や水害等の自然災害に対しても、その被害を最小限に食い止める知恵を学ばせる必要がある。

命をおびやかす行為に対しては、単にそれを避けるだけでなく、毅然と立ち向かい克服していこうとする態度を養い、そのことをとおして、子どもたちがかけがえのない命を実感し、自他の命を守っていこうとする態度を育てる必要がある。

(5) 教員自身が命の意味を問いかける

教員自身が命や死に真摯に向き合う姿勢こそが、子どもたちの命への感性や想像力を育む大

切な環境となることを忘れてはならない。

子どもたちの体験活動の中で、子どもたちの豊かな学びを引き出すためには、教員が子どもたちに寄り添い、子どもたちの心がいきいきと動くように働きかけるとともに、子どもたちに理屈で教えるのではなく、子どもたちと共に感じ、考え、学ぶことが大切なのである。

また、対面する子どもたちに命についての深い感覚を伝えるには、教員自身も一人の人間として与えられた命を生きているということを自覚し、しなやかな感性や豊かな想像力を身につけておくことが必要なのである。

4 「命の大切さ」を実感させる教育の実践のために

子どもたちに学習や体験をさせる時、教育課程上の位置づけを考え、年間計画を立てる必要がある。その上で、子どもたちや家庭の実態、各学校の実情、地域の状況等を踏まえた十分な準備や子どもたちの発達段階に応じたプログラムが必要である。

教員の十分な準備によって、子どもたちの学習・体験がより豊かになるようにしなければならない。また、用意されたプログラムの中から、子どもたちの発達段階や実態に応じて、どのようなテーマ・内容・学習方法で行うのが効果的であるかを検討し、指導案を作成しなければならない。さらに、事前の準備、学習・体験、事後の振り返りのプロセスから新たな課題を発見し、テーマや内容・教材・学習方法を検討し、指導案を改善していくことも必要である。

また、生き方についての価値観や考え方は多様であり、子どもたち一人ひとりの家庭環境も様々であるので、実践に当たっては個々の状況を十分に考慮した上で、家庭・地域からの理解や協力を得る必要がある。

(1) 教育プログラムモデルの準備

ア 子どもたちの発達段階に応じて準備する

子どもたちの命についての認識は個人差が非常に大きい。そのため命の大切さを実感させる教育を行う際は、子どもたち個々の発達段階に配慮して準備し、体験させていくことが大切である。

まず、身近な生活の中から命あるものの存在に気づかせ、自然や人々とふれあうことで、自分が生きている喜びをしっかりと味わわせることが必要である。

次に、身近な生活の中で動植物や自身の成長を、生きている喜びとして実感させるとともに、老いにふれる体験や死の悲しみにふれる体験をとおして、命には限りがあることを感じとり、命あるものすべてを大切にすることを育てる。

成長が進むにつれ、人間の命だけでなく身近な動植物をはじめ生きとし生けるものの生命の尊厳に気づかせ、互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の念を持たせる。自我意識の芽生えとともに、自己を深く見つめたり、自己の存在の意味を問い直すことで自己

の存在価値を確かめ、与えられた生を精一杯生きることの大切さに気づかせるように配慮する。

そして、すべての生命に対する畏敬の念を培うとともに、社会の中での自己の確かな存在価値を知り、自分が生かされていることへの認識や自分が社会に貢献する喜びや達成感をとおして社会とのつながりを実感させていくことを目指すのである。

イ 喜びと悲しみを組み合わせて準備する

発達段階に応じて多様な側面を組み合わせることが重要である。年少の段階においては、生きていることの喜びを実感させることを中心にプログラムを構成し、老いや病にふれる体験や死をはじめとした悲しみにふれる体験は慎重に扱うよう配慮する。そして次の段階では、生きる喜びを実感させるとともに、老いや病にふれる体験や死の悲しみにふれる体験もプログラムの中に少しずつ組み入れ、命の有限性に気づかせるようにする。成長が進むにつれ命の誕生から死に至るまでの過程を理解できるようになるので、喜びの体験と悲しみにふれる体験をプログラムの中にバランスよく配置する。

特に、死の存在については小さな時から気づかせなくてはならないが、死そのものについてはそれを受けとめられる子どもたち個々の発達段階に応じて向き合わせるようにする等、慎重に行うことが肝要である。

ウ 様々な体験を準備する

「命の大切さ」を実感させるには、生老病死等いくつかの入り口がある。それぞれについて、発達段階に応じたねらいを設定し、効果的な学習方法や体験方法を検討していく必要がある。また、豊かな人間関係を築くためのコミュニケーション能力を育てることやインターネットやメディアの適切な活用法を身につけさせ、仮想現実と現実の違いを理解させることも必要である。

プログラムを準備する場合、ねらいとともに子どもたちの具体的な心の動きを想定することが大切であり、子どもたちに対して事前の準備を注意深く検討するとともに、指導する教員自身も十分な準備をしておく必要がある。また、学習や体験の後は、子どもたち自身が学習や体験を振り返り、その成果を日常生活での実践につなげられるように配慮するとともに、家庭や地域と連携することも必要である。

学習や体験を計画・準備・実施する際には、感動を味わう場面を設定し、子どもたちの感性や想像力を育む必要がある。感動、感性、想像力は指導の視点として、欠かすことのできないものである。

(2) 実践を支える研修

学習や体験をとおして子どもたちの心がいきいきと動き、生きる喜びを深く感じとれるよう導くためには教員の心の準備が欠かせない。教員自身が自分も他者も大切な命を持つ存在であ

ることを実感し、自己の命や生き方を見つめ直すために人生を振り返り、新たな視点から自己をとらえ直す体験をすることが必要である。

死と向き合う人々からの話を聞き、その生き方にふれることにより、命のかけがえのなさを感じ、生きることの意義を考えることができる。また、犯罪被害者・遺族の声を聞くなどして、かけがえのない人を失った悲しみや怒りに教員自身がふれることは、命のかけがえのなさを真摯に受けとめる貴重な体験となる。

他者を思いやることや自他の命を大切にしようという思いは、具体的なコミュニケーションを重ねる中で培われる。自分の考えや気持ちを相手に伝え、相手の気持ちを汲み取ったり思いを重ねるといった伝え合う力を高めることをとおして、教員自身が豊かな人間関係を築く力を身につけることが必要である。

さらに、電子メールやチャット、掲示板等の新しいコミュニケーション手段の問題点を把握するために、教員自身がその仕組みを理解することも大切である。有害情報が子どもたちの行動や考え方、そして時には死生観にまで強い影響を及ぼしていることを考えると、インターネット等の利用に当たっての基本的なルール、モラルやマナーを理解するとともに、指導力の向上を図ることも必要である。

(3) 授業実践の在り方

ア 準備から振り返りまで

実践に当たっては、特に、事前の準備と事後の振り返りを充実させることが必要である。事前の準備では、学習や体験の内容について子どもたちに多方面から興味を持たせるとともに、子ども自身が活動にどう関わるかを明確にし、主体的に取り組めるように工夫する必要がある。また、学習や体験の中だけでなく、その後の生活においても「命は大切である」という実感を持ち続け、そうした思いを行動に反映できるようにしなければならない。

また、学習のねらいやテーマに合った学習形態を工夫することが必要であり、例えば自尊感情を高めるためには構成的グループ・エンカウンター技法を用いたり、死や老いにふれるためには絵本や手記等を用いたりすることが考えられる。グループ学習をとおして、集団で一つの目標に向かって協力する体験も有効である。このような体験をとおして子どもたちは自然や社会、人々との関わり方を学ぶとともに、感動したり、葛藤したり、模索したりするのである。

学習や体験後の子どもたち自身による振り返りは、学びによる変化や成長をとらえる作業となる。振り返ることで、学習や体験による変化や成長が、子どもの中に内面化され、その後の実践・行動へとつながるのである。

イ 家庭・地域との連携

子どもたちの学習や体験をより豊かなものとするためには家庭や地域との連携が不可欠である。そのためには、学校だより等を通じて、家庭・地域に学習や体験の趣旨及び目的、内

容等を知らせて理解や協力を得ることが必要である。子どもたちは、家族と共同作業をする中で、家族の思いや家族から見た自分を知り、自己認識を深めることができる。また、地域にはよき生き方のモデルが必ず存在するはずである。そうしたモデルとの出会いは子どもたちの人生を豊かにしてくれるのである。

生や死の現実から子どもを遠ざけ過ぎるのではなく、直接向き合わせることも必要である。身近な人の死という現実をとおして、また、その死を悲しみ故人を懐かしむ大人たちの姿をとおして、子どもは死を理解していくのである。このように日常生活の中で、大人と子どもが死や命について共に体験し同じ思いを分かち合っていくことが求められるのである。家庭や地域の中で、子どもの発達段階に十分配慮しながら、命の様々な側面、つまり生老病死の現実、自然なかたちで立ち合わせる体験をさせることも大切である。

「命の大切さ」を実感させる教育についての

有識者からの意見

【聴取目的】 子どもたちに「命の大切さ」を実感させる教育の在り方について、幅広い分野の有識者にご意見をお聞きした。

【聴取時期】平成 17 年 7 月、8 月

意見聴取者一覧

(50 音順)

氏 名	ご意見の主旨	所 属 等
河合 隼雄	「つながり」を実感できる体験活動を	文化庁長官
高木 慶子	感性を豊かにする体験学習の大切さ	英知大学教授
日野原 重明	「命の使い方」について共に考える	聖路加国際病院理事長
養老 孟司	「命の大切さ」は人としての生き方そのもの	東京大学名誉教授

(注) 意見の主旨及びそのまとめは、事務局において作成した。

「つながり」を実感できる体験活動を

文化庁長官 河合 隼雄

1 「命の大切さ」を教える難しさ

昔の日本は、「命の大切さ」をとりたてて教えることを考えなくてもうまくいっていた。ものがないと分け合う等、いろいろ教えなくても自然に心と心はつながっていた。ところが今はものは豊かになったが、心と心の「つながり」は疎かになっている。こうした社会状況の変化の中で、命を教えることは難しい。親子の間にしっかりした心の「つながり」があれば、「命の大切さ」は実感できる。一番の根本は親子関係にある。この根本的なことを抜きにして学校教育で「命の大切さ」を教えていくことは、大変難しいことである。なぜなら命が大切であるという思いは、子どもたち自身の実感や体感から生まれてくるもので、頭から頭に働きかけても意味がないからである。こうした命の大切さを「教える」ことの難しさを、教える側はわきまえておかなければならない。

2 豊かな自然体験活動をととして

例えばいろいろ端に人が自然に集まっていた昔の生活に戻るような体験をすることが必要ではないか。キャンプや合宿等寝食を共にする体験や飯盒炊さんのような「生(なま)の命」と接触する生活を体験させ、心の交流を図っていく。その際には青年の家のような施設とタイアップして行う等の工夫が必要である。指導者や費用面の問題等越えなければならぬものはいろいろあるが、兵庫県内の豊かな自然を利用した体験活動を行う必要がある。

3 映画を教材に

映画は映像で体感できるのでよい教材になる。大事なのは映画館に入り映画の世界に入って観ることである。ビデオは同じ映像であっても、自分で止めたり速めたりとコントロールできるため、映画館に入って観るのは違う。命というものは我々がコントロールできるものではない。子どもたちを取り巻いているバーチャルリアリティの恐さは、自分にコントロールできると思わせてしまうこと、極端になると人間を殺しても生き返ると機械と同じように思わせてしまうことである。そういうことを防ぐためにも自分の方から映画の世界に入るといった体験をしなければならない。

小・中学生を主人公にした「命の大切さ」に関わる映画を観て話し合い、そこで出た感想等を記録・研究する。そうして積み重ねていったものを授業に活用することもできる。

4 子どもと関わる大人同士がつながる

体験活動を生かしていくには、子どもと関わる大人の存在が重要である。子ども一人ひとりを大事にし、孤立したり皆から嫌われるようなこともする難しい子どもも取り込んで、皆が『一緒にやってよかったなあ』と思えるようにできる指導者が必要である。

子どもというのは、こっちが心を開いていたら面白いことを言う。子どもの本当の声を引き出せる力を持った聞き役が大切である。映画を観た後の子どもの感想が、教員を喜ばせる「命は大切である」と答えるような通り一遍のものにならないように留意しなければならない。そのためには聞き役の人を工夫する。スクールカウンセラー等を活用するのもよい。

学校の行う体験活動にボランティアを積極的に活用したり、家庭や地域の人が連携して参加してもらおう等して、学校の教員にとって負担にならないように工夫する必要がある。

5 「つながる」実感と教材をつなぐ

人と人とがつながるといふことを実感することが大切で、一緒に焚き火を囲んだり飯盒炊さんをして、『人と人は心がつながるんやなあ』と思いかけた時に、命を大切に作る絵本や教材を使って教える。教室で命を大切に作る絵本を見せられるのとはかなり違う。

感性を豊かにする体験学習の大切さ

英知大学教授 高木 慶子

1 子どもは大人社会の結晶

子どもはすでに大人が作り上げてきている社会に生まれてくるのである。受け皿としての大人が変わらない限り子どもは変わることができない。誰が誰に教えているのかを知るべきである。例えば日常生活の中で、飼っていた金魚の死を子どもたちが大人と共にどのように体験するか、これも一つの環境となる。子どもは大人社会の結晶であり、環境から子どもは学んでいく。家族に高齢者や病気の人がいなくても、お見舞いに行ったり通夜や葬式に連れて行く機会をつくる必要がある。

2 大人の感性を磨く

命の有限性が分らないと、命の大切さは分らない。命は大切にしないと限界があるもので、その時その時を大切に生きる。こうした命に対する感性を大人が磨いていかなければならない。そして生きているということは本当にありがたいことなのだ、子どもに機会あるごとに大人が伝えていくことが大事である。

感性は自分で鍛えなければ豊かにならない。毎日の生活の中には感性を磨く機会はたくさんある。一つの映画を観ることをとおしても感性を磨くことはできるし、人を観察する能力を養うことで感性を育てることもできる。

3 教員研修の重要性

子どもの周りにいる親や教員等の大人が、豊かな感性を持っていれば子どもに伝わるものである。しかしどんなに豊かな感性や知識も、それをどう伝えるかという教育方法が大事で、相手に分かるように伝えることが求められる。そして分からない時には人から学ぼうとする感性が必要である。

豊かな人間性を持った教員こそが、子どもの人間性を育むことができる。教員がゆとりを持って子どもに接し、信頼関係を結ぶことで、子どもへの関わりは違ってくる。教員と子どもがお互いに愛しみ合って過ごせるようになるにはどうすればいいか、心豊かに生きるとはどういうことかを考える研修が必須である。

4 「子どもの死生観についての発達段階に関する意識調査」結果より

「兵庫・生と死を考える会」の調査では、子どもの死生観つまり死の絶対性と死の普遍性が何歳で分かるのかを調べたが、今の日本の子どもは7歳で90%、9歳で100%は分かる。7歳でも死の教育はできることが分かった。そして11歳~12歳で15~20%近くの子どもの死んで生き返れると思っている。またそんな子はテレビやゲームの暴力シーンを好むとかお墓や通夜、葬式に行った経験がない、祖父母と暮らしていない等、特徴的なものが見えてきた。こうした結果を子どもの問題を防ぐという観点で生かしたい。

5 豊かな体験学習に様々な工夫を

命の教育はすべての教科でできるということを、すべての先生が理解しているようなアイデアを出して取り組む必要がある。一つの観点として「命の循環」にふれることを提案したい。鶏の卵の孵化といった命の誕生の体験と、栽培した野菜や飼育した鶏等の動植物を食するという体験をとおして、私たちが生かされているのは他の動植物の命をいただいて食べているからだということを考えさせたい。命の尊さはきれい事だけでは伝わらないということを忘れてはならない。

他にも子どもを亡くした親や、親を亡くして悲しい思いをした人の生の声を聴く体験、産婦人科を訪問して生まれたばかりの赤ちゃんと嬉しそうな母親と接する体験、絵本や童話を用いたの授業等、豊かな体験学習は命の大切さについて多くのことを伝えてくれる。

「命の大切さ」を実感させる教育でアクセントを置くべきなのは「命」と「実感」である。実感は心が動く「感動」が糸口となる。実感することで初めて自分のものとなるのである。

「命の使い方」について共に考える

聖路加国際病院理事長 日野原 重明

1 豊かな感性を育む「人との出会い」

子どもの感性や想像力は、一部は遺伝子や生まれながらの素質が影響するが、環境の因子の影響が大きい。環境の因子は子どもが小さい時ほど強く作用する。子どもの時の「人との出会い」は豊かな感性を育む。

大人が「今の子どもは・・・」と言うのは間違っている。どの子どもも可能性を秘めた存在である。スポイルしているのは大人の方で、スポイルしないようにしていけば子どもは必ず伸びていく。大人は子どもにとっての重要な環境であるということを自覚しなければならない。

2 感性を育む人的環境をつくる

兵庫県の素晴らしい自然環境が今日ある私の感性のもとを育ててくれたが、人間の環境も子どもたちの教育には不可欠なものである。自分より年下の子どもたちとの環境、自分より年上の人との環境、2、3世代離れた老人との環境において様々な関係を持つことによって将来子どもが大きく伸びていくかどうかが決まってくる。例えば戦争や貧しい日本の状態を体験した老人が子どもたちと接することで、一人っ子では体験できないような環境を伝えることができる。そうして老人の話聞くことによって子どもの中に他者を配慮するような感性や愛情が育まれるのである。どういう人間関係を子どもたちのためにつくるかということが非常に大切である。

3 子どもと共に考える

今、子どもを育てている親の世代は子どもと十分にふれあう時間をもてないほど忙しい。しかし、老人世代は自分の時間を自分らしくどのようにでも使うことができる。時間を子どもに提供するということが非常に大切である。忙しく働いている親も子どもと密なコンタクトをとり、子どもとしっかり向かい合う努力をする必要がある。子どもが「これ何？」とたずねたら、「ちょっと待って。百科事典で調べよう。」と親と子どもがお互いに問題解決をしようとする。その姿勢こそが教育である。結果ではなく同じ方向に向かって行くことこそが教育である。

子どもたちへの教育は教員がひたすら「教え込む」よりも、子どもたち自身が様々な生身の体験を積み重ねる中から命のかけがえのなさを感じ取ることができるよう「手を貸す」スタンスを取ることが大切である。

4 命を大切に使っているモデルとの出会い

小学校に行って授業をすることがよくあるのだが、その時「命というものは目に見えない。目に見えないものだけれど、君たちが使える時間こそが君たちの命なんだよ。若くして死んでも本当に自分らしくその時間を使っていたら、その人は長生きしているんだよ。」と「命の使い方」について話をする。命を大切にするという事は、ただ病気をせずに長生きすることではなく、どう自分らしく命を使うかなのだということを伝える。『星の王子様』の中に「本当に大切なものは目には見えない」という一節があるが、目には見えない命の大切さを実感させるには、目に見える形でのモデル、つまり命を大切に使っているモデルを見せることも大事である。いつの世も、人は人から学ぶのである。

「命の大切さ」は人としての生き方そのもの

東京大学名誉教授 養老 孟司

1 「命の大切さ」と都市社会

「命の大切さ」といった問題は、現代社会と深い関係がある。現代社会は都市社会、つまり人間の作ったものしかない、意識による世界である。人間の意識はものを同じにしていく働きを持つので、都市化が進めば単調化し多様性を認めない社会となる。

「命の大切さ」といった時に、それによって子どもの行動が影響を受けるかどうかが一番大きな問題となるが、多様性を認めない「都会」の人の考え方では、「かけがえのない命」「命の大切さ」という言葉は、空（カラ）の言葉にしか聞こえない。

2 「命の大切さ」の難しさ

根本的には、「命を大切にする」というのは言葉にするときれいだけれど、結構難しいことである。なぜなら死は人間が一番見たがらないものだからである。例えばインドのガンジス川では死体が流れているが、人は死んだら必ず死体になるということ、自分もいずれそうなることをしっかりと目を背けずにみること、つまり自分自身を直視しなければならない。

3 一つひとつがかけがえのない存在

解剖学をやっていたが、死体という言葉は一度も使ったことがない。多い時には50人並んでいることもあるが、それらを死体として一括することにもものすごい違和感がある。死んでいてもかけがえがない。全員が別々の人で、名前があって、一人ひとりみんな状況が違う。一人ひとり違うことに気がつくのは、言葉ではなくて感覚である。感覚の世界は一元化できないのに一括してまとめてしまう考え方が、命を大切にすることによって最も反する。

4 多様性との出会いを大切に

「命の大切さ」ということを子どもに直接説くよりは、例えば虫捕りを子どもに勝手にやらせてみる。だんだんいろんな虫がいることに子どもたちは気づいてくる。いろんな虫がいるという「生物の多様性」に気づかせるようにする。感覚でとらえられるものはみんな違うものであるということを、子どもたちに「教える」というより、どのように「身につけさせる」かを考える必要がある。

5 死の不可逆性を教える

カッターナイフを用いた殺人事件を考えると人が人を殺すのではなく、カッターナイフが人を殺すのである。我々が教えないといけないのは「カッターナイフに人を殺す権利なんてない」ということ。カッターナイフは単純なつくりで簡単につくことも壊すこともできる。人間はそうはいかない。生きている人を殺したら二度とつくることはできない。壊してしまったら取り返しがつかない。その不可逆性を教えることが必要である。命の大切さはそこにある。

6 生きている者にとっての死の意味

人が死ぬということがどういうことかと考えた時に、ほとんどの人は自分が死ぬことばかり考えているが、実は死んだ人ではなく生きている人に非常に大きな影響がある。これは「命の大切さ」を教えていく時に留意すべき点である。

幼い頃の私は挨拶が苦手な子どもだった。四歳の時に父親の死を経験したが、その時誰かに「お父さんにさようならって言いなさい」と言われた私は声が出せず何も言えなかった。その時のことと人に挨拶できないことが関係があるのではないかと気づいた途端、私の中で「父親が死んだ」ことを受け入れることができた。普通人は自分が死ぬのは、たった一つのできごとだと思っているが、実はそうではない。ある人の行為がいろんな影響を及ぼすように、死ぬことも人によっていろんな受け取り方をされる。死の話や命の大切さというのは人生そのものである。

7 「命の大切さ」は人としての生き方そのもの

教員自身が「命の大切さ」をどう思うかということが一番大事である。「命の大切さ」というのは、人としての生き方そのものである。教員自身が日頃どう生きているか、自分がどう生きているかを問いかけること、そのこと自体が命の大切さである。命の大切さの教育は、教員自身がいきいきと生きていないと意味がない。

第 部 実践編

実践編の構成と活用方法

実践編は、教育プログラムモデル、授業用指導案、教員研修により構成されている。

教育プログラムモデルは、次のテーマごとに子どもたちの発達段階に応じて、学習・体験を整理し、その学習・体験のための事前の準備と事後の振り返りで構成した。

- ・誕生の喜びと感動
- ・成長の支援への感謝
- ・限りある命の尊さ
- ・理解し合う心に支えられた命
- ・尊い命を守るために

具体的な授業用指導案の作成に当たっては、発達段階に応じて、これらの教育プログラムモデルから学習・体験を取り出し、子どもたちの実態に応じて様々な学習・体験をバランスよく組み合わせる必要がある。授業用指導案の作成手順は、以下の～である。この手順に沿って、今回は小学校高学年、中学校、高等学校における授業用指導案を一例ずつ作成した。

子どもたちの発達段階等を踏まえ、授業のねらいと目的を決める。

子どもたちの実態や地域の実情を踏まえ、ねらいと目的に応じた学習・体験活動を、教育プログラムモデルから選択する。

中心となる学習・体験の事前の準備（教員、子ども、家庭・地域との連携等）を確認する。学習・体験をもとにして授業用指導案を作成する。

- ・目標分析表を作成する。
- ・目標構造図を作成する。
- ・学習指導案を作成する。
- ・振り返りカードを作成する。

授業実施後、学習・体験の中で子どもたちの心の動きはどうだったか、振り返り（子どもたちの振り返りカードへの記入、教員の振り返り）をする。

また、教員自身の事前の準備のために教員研修例を作成した。その内容は次のとおりである。

- ・自尊感情を高める研修
- ・自己再発見のための研修
- ・コミュニケーション能力を高める研修
- ・情報モラル指導力を高める研修
- ・死と向き合う人々や犯罪被害者・遺族から学ぶ研修

（印は子どもたちに対しても用いることができる）

この実践編における指導例の蓄積は、下記のWebサイトで行う。

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/>

1 教育プログラムモデル

1 教育プログラムモデル

命の大切さを実感させる教育には、生老病死等いくつかの入り口がある。その中から、生きる喜びを実感させる「誕生」と「成長」の観点、限りある命を実感させる「老、病、死」の観点、コミュニケーションや仮想現実との関わりを学ぶ「理解し合う心に支えられた命」の観点、命をおびやかす様々なものから自他の命を守る「尊い命を守るために」の観点からテーマを設定した。そのテーマごとに、発達段階に応じたねらいを明確にし、実際の活動や学習・体験内容を整理し、教育プログラムモデルを作成した。

子どもたちの実態や学校の実情に対応できる教育プログラムモデルにするために、指導のポイントや事前の準備、学習・体験、事後の振り返りまでの流れを明示するとともに、教員や子どもたちの実際の活動を体系的に整理した。また、それぞれのねらいを達成するために、「感動の体験」「感性を育む」「想像力の育成」の3点を指導のポイントとし、具体的な目標として「子どもたちの予想される心の動き」を示した。事前の準備については、テーマに関連した資料や情報を収集することや、子どもたちの状況を一人ひとり把握すること等の「先生の準備」、テーマに関して予備的な知識を持つこと等の「子どもたちの準備」、「教育課程上の位置づけ」、「家庭・地域との連携」の各項目について、どのような活動が必要となるかを整理した。

「学習・体験」については、命の大切さの実感につながると考えられる内容例を列挙しているので、子どもたちの状況やその学校での指導計画に配慮して組み合わせたり選択するなどして、具体的な計画をたてることができる。事後の振り返りについては、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせたり、命の大切さの実感をどのように日常生活での実践へとつなげるか、それらを家庭との連携の観点から示した。また、予想される子どもたちの心の動きを子どもたちの言葉で表現し、ねらいどおりの指導ができたかななどを教員の振り返りの指標とすることにより、次の学習・体験へと発展していくよう工夫した。

(1) 生きる喜びの実体験

子どもたちに命の大切さを心から感じさせるためには、今生きていることそれ自体が素晴らしいことであり喜びであると感じさせることを大切にしなければならない。生きる喜びの体験は、子どもたちが夢や希望を持って前向きに人生を生きていく力を培う礎となる。

次頁の表は、子どもたちが様々な体験をする中で実感する生きる喜びを縦に配列し、発達段階において想定される具体的な体験をした時に、子どもたちの生きる喜びの表れであるいきいきとした子どもたち自身の言葉を横に並べて、体系的に整理したものである。子どもたちが実感する生きる喜びには、自己肯定感、自己有用感、成就感・達成感、連帯感、自然や生命への畏敬の念、人を愛する喜び・人に愛される喜び、五感で感じる喜び、芸術に対する感動などがあり、そうした生きる喜びの実感を発達段階ごとに子どもたち自身の言葉の形で表現した。教育プログラムモデルにおいては、「子どもたちの予想される心の動き」に示し、振り返りの指標とした。

なお、個々の子どもたちの状況によっては、その体験がふさわしくない場合もある。子どもたち一人ひとりをよく把握し、適切な体験となるよう留意する必要がある。

(2) 教育プログラムモデルと発達段階

子どもたちの命についての認識は個人差が非常に大きいので、命の大切さを実感させる教育を行う際には、子どもたち個々の発達段階を配慮し、体験させていくことが必要となる。そこで、子どもたちの発達の様子を5つの段階に分け、教育プログラムモデルを整理した。

小学校低学年段階では、身近な生活の中で命あるものの存在に気づかせ、自然や人々とふれあうことで、自分が生きていることの素晴らしさや喜びを実感させることが大切である。死への理解が不十分なこの時期に死の現実をつきつけることは、子どもにとってつらい体験となる可能性もあるので、生きていることの喜びを実感させることを中心に構成し、老いや病にふれる体験や死をはじめとした悲しみにふれる体験は少なくなるよう配慮する。

表 子どもたちが実感する「生きる喜び」

	具体的な体験			
	小学校低・中学年	小学校高学年	中学校	高等学校
1 自己肯定感	「ほめられた！」 学習・お手伝い等様々な活動の中で認められ、ほめられる体験	「自分もいいところがあるんだ！」 学習・お手伝い等様々な活動の中で認められ、ほめられる体験	「我ながらなかなかやるじゃない！」 教科学習・委員会活動・部活動等様々な活動の中で自分のよさを発見する体験	「自分もまんざらすてたもんじゃない！」 「今のままの自分でいいんだ！」 教科学習・委員会活動・部活動・学校行事等様々な活動の中で自分の存在を認めなおす体験
2 自己有用感	「自分も役に立った！」 お手伝い・当番活動	「自分も役に立てた！」 お手伝い・委員会活動・縦割り活動・集団登下校・子ども会活動	「私のことを待ってる人がいる！」 お手伝い・委員会活動・係活動・異年齢活動・奉仕活動	「誰かの役に立ちたい！」 お手伝い・委員会活動・ボランティア活動・奉仕体験活動
3 成就感・達成感	「やった！できた！」 教科学習・スポーツ・習い事・友だちとの遊び	「やればできるんだ！」 教科学習・スポーツ・習い事・友だちとの遊び	「とうとうやったぞ！」 教科学習・部活動・特別活動・スポーツ・習い事・友だちとの遊び	「最後までやり遂げたぞ！」 教科学習・部活動・特別活動・スポーツ・習い事・友だちとの遊び
4 連帯感	「一緒にやったね！」 学級活動・友だちとの遊び・子ども会活動・地域行事への参加	「心がひとつになれた！」 「自分もクラスの一員なんだ！」 学級活動・学校行事（運動会・自然学校等）・友だちとの遊び・子ども会活動・地域行事への参加	「みんなと心がひとつになった！」 学校行事（体育祭・文化祭・修学旅行・転地学習等）・友だちとのふれあい・地域行事への参加	「自分ひとりじゃなかった！」 学校行事（体育祭・文化祭・修学旅行・転地学習等）・レクリエーション活動・友だちとのふれあい・地域行事への参加
5 自然や生命への畏敬の念	「不思議だなあ！」 動物の飼育・植物の栽培・野外での活動・台風や雷等の自然現象・弟や妹の誕生	「自然ってすごい！」 「命ってすばらしい！」 動物の飼育・植物の栽培・野外での活動・台風や雷等の自然現象・弟や妹の誕生	「宇宙ってすごい！」 「命って不思議だ！」 動物の飼育・植物の栽培・野外での活動・台風や雷等の自然現象・弟や妹の誕生・死と向き合う人との出会い	「人間ってなんてちっぽけなんだ！」 「人間の力を超えたものがあるんだ！」 動物の飼育・植物の栽培・野外での活動・農業体験・教科学習・修学旅行・研修旅行・弟や妹の誕生・死と向き合う人との出会い
6 人を愛する喜び・人に愛される喜び	「この人のこと大好き！」 「一緒にいると安心できる！」 「お母さん、お父さん大好き！」 「赤ちゃんかわいいな！」 家族や信頼する人との団欒	「あのが好きだな！」 「私のこと大切にしてくれる！」 家族や信頼する人との団欒・友だちとのふれあい	「自分を支えてくれる人がいる！」 「好きな人がいる！」 家族や信頼する人との団欒・友だちとの支え合い・恋愛体験・ボランティア活動	「あの人のことが好きでたまらない！」 「お母さんこんなに私のこと思ってくれてたんだ！」 「おじいちゃんいつまでも長生きしてね！」 家族や信頼する人との団欒・友だちとの支え合い・恋愛体験・ボランティア活動
7 五感で感じる喜び	「気持ちいい！」 「おにぎり、おいしい！」 砂遊び・水遊び・豊かな食生活	「気持ちいい！」 「この花、いいかおり！」 自然にふれる遊びや活動・豊かな食生活	「風が冷たくて気持ちいい！」 「赤ちゃんのほっぺ柔らかい！」 自然にふれる遊びや活動・豊かな食生活	「この汗、気持ちいい！」 自然にひたる体験・体を動かす体験・豊かな食生活
8 芸術に対する感動	「この歌大好き！」 「この絵きれい！」 音楽や図工の授業・日常生活の中で	「この歌大好き！」 「この映画涙が出たよ！」 芸術（映画、音楽、絵画等）鑑賞・日常生活の中で	「なんてきれいな絵！」 「このリズム、最高！」 芸術（映画、音楽、絵画等）鑑賞・創作活動・日常生活の中で	「あんな映画を自分も撮ってみたい！」 人を感動させる仕事をしてみたい！」 芸術（映画、音楽、絵画等）鑑賞・創作活動・日常生活の中で

小学校中学年段階では、自分の成長を生きている喜びとして実感させるとともに、喜びや悲しみにふれる体験から自他の命の尊さを実感させる。老いにふれる体験や悲しみにふれる体験を少しずつ組み入れていくことにより、命には限りがあることを感じとらせ、命あるものすべてを大切にすることを育てる。

小学校高学年段階、中学校段階、高等学校段階では、人の命だけでなく、生きとし生けるものの生命の尊厳に気づかせ、互いに支え合って生き、生かされていることに感謝の念を持たせる。成長が進むにつれ、命の誕生から死に至るまでの過程を理解できるようになるので、老いや病にふれる体験や死をはじめとした悲しみにふれる体験をとおして、命をかけがえないもの、他と代えることができないものとして理解し行動できるようにさせる。

そのため、喜びの体験と悲しみにふれる体験をバランスよく配置するとともに、子ども自身が社会の中での自己の確かな存在価値を知り、自分が生かされていることや自分が社会に貢献する喜びや達成感をとおして社会とのつながりを実感できるようにすることが必要となる。

(3) 教育プログラムモデル例

教育プログラムモデルでは、命の大切さを実感するための入り口となる生老病死、愛情、喜び等から次の5つのテーマを設定した。

教育プログラムモデル 誕生の喜びと感動

様々な生命の誕生にふれるとともに、自分の命が自分を取り巻く多くの人々の愛情に支えられて生かされていることの実感を持つ。また、生命の誕生の過程について学ぶこと等とおして、生命の尊厳を体感し、過去から未来へとつながる命を感じ、自分の命のみならず、他者や小さな命を慈しみ大切にしようとする心情や態度を培う。

教育プログラムモデル 成長の支援への感謝

自分の成長を振り返り、成長を実感することで自分が存在することへの喜びを感じるとともに、赤ちゃんを見守る母親等の姿や保育体験学習をとおして、自分の成長を支えてくれた周りの人たちへの感謝の気持ちを持つ。

親世代や高齢者とのふれあいをとおして、将来の自分に思いをはせ、過去から未来へとつながる命を感じる。さらには、地域や社会への貢献をとおして、社会の一員としての自分を感じ、人に支えられて成長してきたことを自覚し、人を支えることの喜びを感じる。

教育プログラムモデル 限りある命の尊さ

身近な人との関わりをとおして、老いや病にふれる体験や、死の悲しみにふれる体験などから、命の有限性や死の普遍性・絶対性に気づき、自他の命のかけがえのなさに思いをはせる。さらに、死の悲しみや苦しみに向き合う人々の思いに接し、人とのつながりを感じ、強く生きようとする心について考える。

教育プログラムモデル 理解し合う心に支えられた命

家族や親しい人たちとのコミュニケーションやスキップを基本にして、心の通い合う適切なコミュニケーションの手段を学ぶ。また、仮想現実と現実の区別をはっきり認識し、社会の中でのマナーや望ましい人間関係についても考える。

教育プログラムモデル 尊い命を守るために

人による命をおびやかす行為に対しては未然に防ぐ対策を、また自然災害に対しては、その被害を最小限にいとめる知恵を学ぶ。そして、命をおびやかす様々な行為に対して、毅然と立ち向かい、克服していこうとする態度を養う。さらに、このことをとおして、子どもたちと大人が共にかけがえのない命を実感し、自他の命を守っていこうとする姿勢を持つ。

教育プログラムモデル 誕生の喜びと感動

【テーマ】

誕生の喜びと感動

【ねらい】

様々な生命の誕生にふれるとともに、自分の命が自分を取り巻く多くの人々の愛情に支えられて生かされていることの実感を持つ。また、生命の誕生の過程について学ぶこと等をとおして、生命の尊厳を体感し、過去から未来へとつなげる命を感じ、自分の命のみならず、他者や小さな命を慈しみ大切にしようとする心情や態度を培う。

【発達段階についての認識】

小学校段階では、動植物の誕生や生育をとおして、生命の誕生に関心を持ったり、感動したりする体験を持ち、自らの誕生を振り返って、かけがえない自他の命を実感する。

中・高等学校段階では、小さな命のいとおいさを感じたり、自他の命を慈しみ育もうとする心情や態度を培う。

	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校	高等学校
テーマ	命の芽生え	命への感動とつながる命	かけがえない自らの命	命のいとおいさ	命を育む心と態度
ねらい	身のまわりの小さな命に気づき、自らの命の誕生について関心を持つ。	動植物の飼育栽培をとおして、命の誕生の感動を体験する。	生命が誕生する瞬間の神秘性を感じとり、その感動をとおして自他の命のかけがえのなさに気づく。	乳児とふれあう体験などをとおして、命をいとおいしく思う気持ちを持つ。	妊婦等の協力を得て、妊娠、出産、育児について学び、かけがえない命の存在を実感し、自他の命を慈しみ育もうとする意欲や態度を持つ。

テーマ	命の芽生え		
ねらい	身のまわりの小さな命に気づき、自らの命の誕生について関心を持つ。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動物や植物にも「いのち」があることを体験をとおして実感させる。 発芽や卵の孵化、昆虫の羽化する様子を詳しく観察し、命の誕生とつながりの不思議さを感じとらせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 体験をとおして、小さな「いのち」に気づかせる。 家族の話聞き、自分の誕生時の家族の喜びに気づかせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動植物の「いのち」にふれさせ、生きているすべてのものへの思いやりの心を育てる。 自分が誕生したときの家族の喜びを実感させる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 散策場所の選択、事前散策、安全確認をしておく。 「自分が生まれたときの話」「自分の名前の由来」等について、保護者へ依頼する。 教員自身の「生まれたときの話」をまとめておく。 子どもの家庭環境を把握し、個々の子どもへの配慮など事前事後の指導を充実させる。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 国語 生活 道徳 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 身近な動植物とのふれあいの経験を持つ。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「生まれたときのエピソード」について事前に依頼しておく（学級通信等）。 おんぶや抱っこなどのスキンシップを多くしてもらう。 	<p>フィールドワーク「いのち発見」</p> <ul style="list-style-type: none"> 自然散策しながら小動物や植物の小さな命の芽生えを発見する。 うさぎを抱っこし、体の温かさを感じとる。 聴診器を木の幹にあて、木が水を吸い上げる音を聞く。 <p>動植物の飼育栽培・観察</p> <p>友だちや先生とのふれあい</p> <ul style="list-style-type: none"> 友だちや先生と握手をしたり、自分の体を触ってみて、体の温かさや心臓の鼓動を感じる。 <p>『心のノート』の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> 「いのちにふれよう」 <p>絵本の読み聞かせ</p> <ul style="list-style-type: none"> 『ふゆめがっしょうだん』 『たんぼぼ』 『ざりがに』 『赤ちゃんのはなし』 <p>(以上、福音館書店)</p> <p>家族の話</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が生まれたときの話 自分の名前の由来 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> うさぎやにわとり、あさがおもみんな生きているんだ。 うさぎってあったかいんだなあ。 ぼくのしんぞうがドキドキしてるよ。 わたしが生まれたときにそんなことがあったんだ。 わたしが生まれたとき家族はこんなに喜んだんだ。 ふれあって、気持ちいい。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の感想も書き入れた動植物の観察日記を書く。 授業後の感想や家族からの話を聞いて自分が思ったことを手紙などで家族に伝える。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 体験内容や活動場所は適切であったか。 身近な「いのち」に気づかせることができたか。 子どもが、自分の誕生について関心を持ち家族の喜びを感じることができたか。 子どもの家庭状況に応じた個別支援ができたか。

テーマ	命への感動とつながる命		
ねらい	動植物の飼育栽培をとおして、命の誕生の感動を体験する。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 植物の芽生えや動物の誕生に出会うとともに、その成長を共に喜ぶ。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の命の誕生は多くの人々の喜びであったことを実感させる。 命はひと続きであり、様々な助けや支えを受けてきたことを感じとらせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動植物の誕生や生育について調べることにより、命の誕生や生命の営みの不思議さを感じとらせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 栽培や飼育に適切な素材を選定する。 栽培や飼育計画を作成し、準備する。 「自分が生まれたときの話」等について、保護者へ依頼する。 子どもの家庭環境を把握し、個々の子どもへの配慮など事前事後の指導を充実させる。 子どもの誕生について授業で扱ってもいいことを家庭に確認しておく。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 理科 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動植物の飼育栽培について図鑑等で調べ知識を持つ。 家庭で自分が生まれたときの話を聞いてくる。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもが生まれたときの様子を説明してもらおう。特に両親や家族がどんな気持ちであったかを強調してもらおう（手紙を書いてもらうことを依頼する）。 おんぶや抱っこ等のスキンシップを多くしてもらおう。 家庭での動植物の飼育や栽培の手助けや観察を依頼する。 	<p>動植物の飼育栽培体験</p> <ul style="list-style-type: none"> 金魚やハムスター等小動物の飼育 ヘチマやアブラナ等の栽培 <p>家族からの手紙</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が生まれたときの喜びについて手紙をもらう。 家族に手紙の返事を書く。 <p>調べ学習</p> <ul style="list-style-type: none"> 栽培や飼育しようとする動植物について事典や図鑑等で調べる。 <p>テレビ・ビデオ学習</p> <ul style="list-style-type: none"> 植物の栽培や動物の誕生・飼育に関するテレビ番組やビデオの視聴 植物の栽培に関するビデオ 『小学校NEW理科観察ビデオ 3年 草花のそだちと体のつくり』（啓林館・NHKエンタープライズ）等 小動物の飼育に関するビデオ 『小学校NEW理科観察ビデオ 3年 こん虫のそだち方』（啓林館・NHKエンタープライズ）等 <p>保護者の話</p> <ul style="list-style-type: none"> 我が子の誕生の喜びを語ってもらう。 母親が生まれたときの話を祖父母から聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ぼくのまいた種が芽を出した。 犬の赤ちゃんが生まれた。 お母さんは、わたしが生まれたのがほんとにうれしかったんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動植物の命の誕生や成長への思いと、自分や人の命の誕生や成長をつなげて考えられるようになる。 授業後の感想や家族からの話を聞いて自分が思ったことを手紙等で家族に伝える。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 動植物の命の誕生や成長への思いと、自分や人の命の誕生や成長をつなげて考えさせられたか。 自分の誕生が、家族の愛情に包まれたものであることを実感させられたか。

小 学 校 高 学 年	テーマ	かけがえのない自らの命		
	ねらい	生命が誕生する瞬間の神秘性を感じとり、その感動をとおして自他の命のかけがえのなさに気づく。		
	指導のポイント	事前	学習・体験	事後
	<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命が誕生する瞬間の感動を味わわせる。 ・「誕生エピソード」の作成をとおして、家族の愛情を確認させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命誕生の神秘性や偶然性を感じとらせる。 ・自分の生命が様々なつながりのなかで生まれ、育まれ支えられてきたことを知らせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命誕生の仕組みを知ることによって、命のかけがえのなさに気づかせる。 ・自己の誕生を喜ぶ家族の姿から、自己と同様にかけがえのない他者の命に気づかせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員自身が自分の誕生を含めた人生の振り返りをする。 ・子どもの家庭環境を把握し、個々の子どもへの配慮など事前事後の指導を充実させる。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語 ・理科 ・体育 ・道徳 ・総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の生まれたときを振り返ることのできる品を整理し、自分が生まれたときの話聞いてくる。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭で母子手帳やへその緒、胎児の心音等が準備できる場合は、資料提供を依頼する。 ・誕生から成長までを家族等で話し合う機会を持ってもらう。 ・おんぶや抱っこ等のスキンシップを多くしてもらう。 	<p>メダカの飼育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メダカの産卵・孵化の様子等を観察する。 <p>人の誕生について学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卵子、精子、受精について知る。 ・受精卵が母親の子宮の中で育ち、誕生する様子について調べる。 <p>ビデオ学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NHKスペシャル『驚異の小宇宙・人体・生命誕生』(NHKエンタープライズ21) <p>「誕生エピソード」の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真、ベビー服、玩具等、自分の生まれたときを振り返ることのできる品を整理し、お互いに紹介する。 <p>ゲストティーチャーによる話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・妊婦・保護者の話 「出産・育児に関して」 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メダカが卵から生まれたよ。 ・私の命もこうやって生まれたんだ。 ・私が生まれたときはこんなだったんだ。 ・自然ってすごい。 ・命ってすばらしい。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「誕生エピソード」をもとに、家族で話し合う機会を持ってもらう。 ・自分を大切にするとともに、友だちや周りの人も一人ひとりがかけがえのない存在であると認め、大切にすること。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の誕生を喜びを持って実感させられたか。 ・自分の存在が周囲の人々の愛情に包まれたかけがえのないものであることに気づかせることができたか。 ・他者の命も、自分と同じかけがえのないものであることに気づかせることができたか。

テーマ	命のいとおしさ		
ねらい	乳児とふれあう体験などをとおして、命をいとおしく思う気持ちを持つ。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 出産、育児についての体験談話をとおして、生命誕生の神秘や親子の愛情の深さを感じさせる。 ・ 実際に乳児とふれあう体験をとおして、小さな命をいとおしく思う気持ちを持たせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 乳児の肌の柔らかさから命のぬくもりを感じさせる。 ・ 小さな命をいとおしく思う気持ちから、親子の情愛を感じさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ゲストティーチャーの話から出産や育児に関する喜びや不安・苦労を感じとらせる。 ・ 家族やゲストティーチャーの話をおして、自分の誕生や生育について思いをはせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの誕生時の話などを家族に依頼する。 ・ 育児体験に協力してもらえる親子に依頼し、連絡する。 ・ 子どもの家庭環境を把握し、個々の子どもへの配慮など事前事後の指導を充実させる。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 技術・家庭 ・ 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 乳児とのふれあい体験を整理しておく。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家族から自分の誕生や乳児期に関する話を聞く。 ・ 乳児との接し方について家族から教わる。 	<p>育児体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 乳児にふれたり、抱いたり、あやしたりする。 ・ 赤ちゃん人形・妊婦シミュレーターを使った体験をする。 <p>調べ学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 妊娠や出産、育児について調べる。 ・ 乳児の抱き方やあやし方について調べる。 <p>ビデオ学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 『出産』（アーニー出版） <p>ゲストティーチャーによる話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 出産・育児経験のある教員から妊娠、出産、育児に関する体験を聞く。 ・ 乳児とその母親を招き、出産にまつわるエピソードや我が子に対する思いを聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分は幼い頃、大切にされていたんだなあ。 ・ 赤ちゃん、柔らかいなあ。 ・ 赤ちゃん、かわいいなあ。 ・ 命って不思議だ。 ・ 赤ちゃんを産むって大変だなあ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 母子手帳・へその緒・その他の記録等をみながら、子どもが生まれた当時のことを話し合ってもらおう。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生命誕生の不思議さや、自己の命の誕生に思いをはせ、乳児に接することで、小さな命を慈しむ態度が育成できたか。 ・ 自分は一人で生まれて育ってきたのではなく、周囲の人々のたくさんの愛情に支えられていることを理解させることができたか。

テーマ	命を育む心と態度		
ねらい	妊婦等の協力を得て、妊娠、出産、育児について学び、かけがえのない命の存在を実感し、自他の命を慈しみ育もうとする意欲や態度を持つ。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 妊婦の出産・育児の過程にふれることで、かけがえのない命の誕生を実感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 命を育む妊婦の喜びや苦労等を感じとらせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 親になることの喜びや不安を感じとらせ、親としての生き方について考えさせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 協力してもらう妊婦や保健所、産婦人科医院等を選び、依頼する。 子どもの家庭環境を把握し、個々の子どもへの配慮など事前事後の指導を充実させる。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭 保健体育 特別活動 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 妊娠、出産、育児について学んでおく。 自分の誕生についての資料を整理する。 妊娠出産に関する討議やディベートの課題について整理する。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家族の妊娠出産に関する話や自分の誕生についての話を聞く。 	<p>妊娠・出産・育児の体験にふれる</p> <ul style="list-style-type: none"> 妊婦の協力を得て、実際の経過を定期的に報告してもらうことをとおして、妊娠、育児の場面にふれる。 妊娠出産に伴う喜びや不安・苦労等、生命誕生の過程にふれる。 <p>産婦人科医院の訪問見学</p> <ul style="list-style-type: none"> 産婦人科医院を訪問して、医師や看護師の話を聞いたり、新生児の様子を見学する。 <p>グループ学習・ディベート</p> <ul style="list-style-type: none"> 羊水検査や中絶の問題についてのグループ学習や議論をする。 <p>ビデオ学習</p> <p>出産や胎児と母体の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> NHKスペシャル『驚異の小宇宙・人体・生命誕生』(NHKエンタープライズ21) 『出産』(アーニー出版) <p>ゲストティーチャーの話</p> <ul style="list-style-type: none"> 産婦人科の医師や看護師、保健師や助産師を招いて生命誕生や出産・育児に関する講話を聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> 命の誕生ってすごいなあ。 親はこんな苦労をして自分を産んでくれたんだ。 親は赤ちゃんをこんなに大切に思うんだ。 お母さん、こんなに私のことを思ってくれていたんだ。 親になることは大変だなあ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 親子関係や人間関係を妊娠・出産・育児という事象からとらえ直す。 自分やきょうだいが誕生したときの喜びを家庭で確かめる。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 命の誕生を自分のこととして実感させられたか。 かけがえのない命の誕生の重さを実感させるとともに、自分が親になることについても主体的に考えさせることができたか。

教育プログラムモデル 成長の支援への感謝

【テーマ】

成長の支援への感謝

【ねらい】

自分の成長を振り返り、成長を実感することで自分が存在することへの喜びを感じるとともに、赤ちゃんを見守る母親等の姿や保育体験学習をとおして、自分の成長を支えてくれた周りの人たちへの感謝の気持ちを持つ。

親世代や高齢者とのふれあいをとおして、将来の自分に思いをはせ、過去から未来へとつながる命を感じる。さらには、地域や社会への貢献をとおして、社会の一員としての自分を感じ、人に支えられて成長してきたことを自覚し、人を支えることの喜びを感じる。

【発達段階についての認識】

小学校段階では、愛情によって成長してきた自分の命のかけがえのなさに気づくとともに、親世代や高齢者とのふれあいをとおして命のつながりや命の受け渡しを実感する。中学校段階では周囲の人に対して感謝の気持ちを持つ。さらに自分自身のライフプランを設計し、受け継いだ命をどう未来へつないでいくかを考える。高等学校段階では、社会貢献をとおして他者との関係の中から支え合うことの喜びを感じる。

	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校	高等学校
テーマ	命への気づき	成長の実感	成長を支えるもの	成長への感謝と未来の自分	支え合う喜び
ねらい	身近な生き物の誕生や成長の様子をやさしく見つけ、命あるものを大切にしようとする心を持つ。	自分の成長を実感することによって、成長を支えてくれた周囲の人たちへの感謝の気持ちを持つ。また、親世代や高齢者とのふれあいをとおして命のつながりを感じる。	赤ちゃんを見守る母親等の姿をとおして、かけがえのない命を感じるとともに、自分や他者の生き方や命を尊重しようとする心を持つ。	自分史づくりなどをとおして、自分の成長を振り返り、自分が存在することに感謝と喜びを感じる。また、かけがえのない命を未来へつないでいこうとする思いを育む。	地域社会への貢献をとおして、社会の一員としての自分を感じ、人に支えられて成長してきたことを自覚し、人を支えることの喜びを感じる。

テーマ	命への気づき		
ねらい	身近な生き物の誕生や成長の様子をやさしく見つけ、命あるものを大切にしようとする心を持つ。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 飼育体験活動等とおして、小さな命の成長に気づかせる。 アルバムづくりをおして自分の成長を実感させる。 高齢者の人生経験の豊かさなどにも気づかせ、尊敬の念を持たせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> あさがおの種取りをしながら「命」のつながりの不思議さに気づかせる。 高齢者の豊かな知恵や経験に気づかせる。 誕生日をみんなで祝うことによって、一人ひとりのかけがえのなさに気づかせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生き物の世話をとおして命を育てることの喜びに気づかせる。 生き物の生と死にふれることによって、命には限りがあることに気づかせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員自身の飼育栽培体験をまとめておく。 教員自身が自尊感情を高める体験をしたり、自己再発見の体験をしておく。 子どもの家庭環境等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 家庭や地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 国語 生活 道徳 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども自身が動植物の飼育栽培体験を振り返る。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> おんぶや抱っこ等のスキンシップを多くしてもらおう。 保護者自身の飼育体験を語ってもらおう。 家族に「あなたが生まれたとき」の話を依頼しておく。 動植物を飼育栽培している様子を見学させてもらおう。(酪農農家・野菜の栽培農家等) 地域の老人会等との交流活動をする。 	<p>植物の栽培</p> <ul style="list-style-type: none"> あさがおの栽培・観察(種まき・水やり等の世話、種取り、種をプレゼントする、花や葉を使つての遊び等) <p>作物の栽培</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の協力を得て野菜の苗の植え付け等を行う。 収穫祭をしながら、その作物の成長の様子を振り返り、命のつながりについて考える。 <p>動物の飼育</p> <ul style="list-style-type: none"> 昆虫や金魚等の小動物を飼育する。 『心のノート』の活用 「いのちにふれよう」 <p>成長アルバムの作成</p> <ul style="list-style-type: none"> 成長のアルバムづくりをしながら自分の成長の様子を知る。 ぼく、わたしのいいところ発見 友だちのいいところ、がんばっているところを認め合う。 みんなで祝う誕生日 <p>絵本の読み聞かせ</p> <p>動物の子育てや成長</p> <ul style="list-style-type: none"> 『どうぶつのおかあさん』 『なにのこどもかな』 <p>(以上、福音館書店)</p> <p>ゲストティーチャーによる話</p> <ul style="list-style-type: none"> 動植物を飼育栽培している人の話を聞く。(獣医・農家の人の喜びや苦労等) <p>高齢者とのふれあい体験</p> <ul style="list-style-type: none"> 一緒に栽培体験をしたり昔の遊びをする。 行事に招いたり、手紙を書いたりする等の活動を行う。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> うさぎさん、またあそぼうね。 一粒の種からこんなにたくさんの種がとれたよ。 種をプレゼントして、来年もお花を咲かせてもらおう。 ほめられてうれしかった。 おじいちゃんに教えてもらって楽しかったよ。 おじいちゃんってすごいんだ。 おばあちゃんってもの知りなんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生き物の成長の記録を続ける。 子どもたちの気づきや思いを学級通信で知らせる。 地域の老人会等との交流活動を継続する。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> アルバムづくりをおして、自分の成長を振り返らせることができたか。 生き物の命について気づき、命あるものを大切にしようとする気持ちを持たせることができたか。 高齢者の人生経験の豊かさなどに気づかせ、尊敬の念を持たせることができたか。

テーマ	成長の実感		
ねらい	自分の成長を実感することによって、成長を支えてくれた周囲の人たちへの感謝の気持ちを持つ。また、親世代や高齢者とのふれあいをおして命のつながりを感じる。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年表づくりをとおして自分の成長を実感させる。 自分たちが食べる野菜の栽培をとおして、収穫の喜びを体験させる。 高齢者の人生経験の豊かさなどに気づかせ、尊敬の念を持たせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分を支えてくれた周りの人への感謝の気持ちを持たせる。 野菜の収穫を喜び、「いただきます」の意味を考えさせる。 誕生日をみんなで祝うことによって、一人ひとりのかけがえのなさに気づかせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手のよさを認め、相手の立場に立ち、思いやりの心を育てる。 将来の自分の夢を思い描いて、自分の人生を生きていこうとする思いを持たせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員自身が自尊感情を高める体験をしたり、自己再発見の体験をしておく。 子どもの家庭環境等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 家庭や地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 理科 道徳 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年表づくりの資料集めをする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> おんぶや抱っこ等のスキンシップを多くしてもらおう。 家族に「いちばん心配したとき」の話を依頼しておく。 地域の老人会等との交流活動をする。 	<p>私の年表づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 「うれしかった時」「お世話になった人」等を記入する。 家族から「うれしかった時」「いちばん心配した時」を聞いて記入する。 <p>タイムカプセルづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 「20歳の私への手紙」を書く。 <p>お世話になった人への手紙</p> <p>2分の1成人式</p> <ul style="list-style-type: none"> 家族を招き、みんなで自分の成長を振り返り、喜び合う。 これからの生活の仕方を考える。 ぼく、わたしのいいところ発見 友だちのいいところ、がんばっているところを認め合う。 <p>みんなで祝う誕生日</p> <p>野菜等の収穫祭・調理パーティー</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の協力を得て野菜の苗の植え付け等を行う。 収穫祭をしながら、その作物の成長の様子を振り返り、命のつながりについて考える。 <p>絵本の読み聞かせ</p> <ul style="list-style-type: none"> 『シリーズいのちの授業』（ポプラ社） 『そだててあそぼう絵本』シリーズ（農文社） <p>高齢者とのふれあい体験</p> <ul style="list-style-type: none"> 昔の生活や子どもの頃の暮らし等を聞く。 一緒に昔の遊びをする。 行事に招いたり、手紙を書いたりする等の活動を行う。 <p>ゲストティーチャーによる話</p> <ul style="list-style-type: none"> 食材と生き物との関係を知る。 「いただきます」の意味を知る。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> 大きくなってきた様子が分かってきた。 自分の成長はいろいろな人に支えてもらったんだなあ。 自分たちで育てた野菜は、おいしいね。 大切に育てたから、大切に食べよう。 「いただきます」は「命をいただきます」なんだね。 おじいちゃんはもの知りなんだ。 おばあちゃんってすごいんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭菜園やプランターを使い、家庭でも野菜を育て、食材として利用する。 ふれあい体験をした高齢者へお礼の手紙を書く。 ノーテレビデーを設定するなどして、家族との会話を増やす。 感謝の気持ちを持って食事を楽しむ機会を持つ。 地域の老人会等との交流活動を継続する。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の成長に気づき、周囲の人への感謝の気持ちを持たせることができたか。 たくさんの命をいただいて、自らの命をつないでいることに対する感謝の気持ちを育てられたか。 高齢者の人生経験の豊かさなどに気づかせ、尊敬の念を持たせることができたか。

テーマ	成長を支えるもの		
ねらい	赤ちゃんを見守る母親等の姿をとおして、かけがえのない命を感じるとともに、自分や他者の生き方や命を尊重しようとする心を持つ。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの命を守り育てる親の姿を知り、かけがえのない命に気づかせる。 ・先祖にさかのぼっていくとたくさんの人から命を受け継いでいることを感じさせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな生き方にふれることにより、生きていることの素晴らしさを感じさせる。 ・命のリレーが行われて私たちが存在していることに気づかせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんとのふれあいから母親の気持ちを推測させる。 ・命のリレーをとおして、自分自身がバトンを受けつぎ、つなく存在であることを理解させる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・老人介護施設、社会福祉施設等でのボランティアを体験する。 ・子どもの家庭環境等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 ・家庭や地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳 ・総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんの世話の仕方を調べておく。 ・祖父母など、自分につながる人の話を聞く。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーとして保護者へ話を依頼する。(赤ちゃんのいる保護者・地域の方) ・地域の老人介護施設、社会福祉施設等との連携を図る。 	<p>赤ちゃんとのふれあい体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・抱っこ、オムツ交換、ベビーカー、沐浴等赤ちゃん人形を使った体験をする。 ・学習発表会 「自分の誕生日に思うこと」(グループで、あるいは学級全体で実施する) <p>いろいろな生き方にふれる体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の生き方に学ぶ。 ・障害のある人や闘病する人等の生き方に学ぶ。 ・様々な教材を活用する。 『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』(サンケイ出版) 『たったひとつのたからもの』(文藝春秋) 『今、生きているあなたへ』(PHP出版) <p>絵本『葉っぱのフレディ』(童話屋)を使った学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かけがえのない命と命のつながりについて考える。 『心のノート』の活用 ・「いま生きているわたしを感じよう」 <p>絵本の読み聞かせ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『あなたが生まれるまで』(小学館) ・『みんなあかちゃんだった』(小峰書店) ・『いのちのまつり』(サンマーク出版) <p>ゲストティーチャーによる話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の話を聞く。 「子育て日記」 「子どもの誕生日に思うこと」 ・親が生まれた時の話を祖父母から聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんって大切にお世話されてるんだな。 ・みんなこんなふうに、大事に育てられてきたんだな。 ・生きてるってすばらしい。 ・わたしの命はたくさんの人から受け継いでいるんだ、すごい。 ・命ってすばらしい。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習した体験について家族と話し合う。 ・自分の成長を支えてくれた人たちに感謝の気持ちを込めた手紙を書く。 ・誕生日や父の日、母の日、敬老の日等の機会をとらえ、「あなたの存在そのものがすばらしい」というメッセージや感謝の気持ちを交換する。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲の人に支えられた命を実感させることができたか。 ・自らの命を支えてもらっていることに感謝の気持ちを持たせることができたか。 ・いろいろな生き方にふれることにより、生きていることの素晴らしさを感じさせることができたか。

テーマ	成長への感謝と未来の自分		
ねらい	自分史づくりなどをとおして、自分の成長を振り返り、自分が存在することに感謝と喜びを感じる。また、かけがえのない命を未来へつないでいこうとする思いを育む。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分史をつくることにより、受け継がれたこの命の大切さを感じさせる。 幼児とのふれあいをとおして、育まれる命の素晴らしさにふれ、生きていることの喜びを感じさせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 未来は自分で切り拓くという意志を持つことの大切さに気づかせる。 幼児との関わりの中で、自分の中のやさしさをふくらませ、かけがえのない命を育んでいこうとする喜びを感じさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今の自分を肯定するために、今何をなすべきかを考えさせる。 一つの考えにこだわらず、いろいろな価値観を受容できる力を養わせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員自身が自尊感情を高める体験をしたり、自己再発見の体験をしておく。 子どもの家庭環境や心身の状態等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 家庭や地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 道徳 特別活動 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今までの自分の成長を振り返り、思い出に残る品や写真を集める。 幼児とのふれあいの際、気をつけることを調べ、話し合っておく。 自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分が生まれるまでの家族の話をしてもらう。 幼児とのふれあいの際、気をつけることについて、家族でも話し合う。 地域の幼稚園や保育所に事前をお願いする。 	<p>自分史づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 思い出の品や写真を持ち寄って、自分史をつくる。 誕生から今までを振り返り、感動したことを中心にまとめる。 これからの私の生き方にも目を向け、未来の自分史もつくる。 <p>未来の自分への手紙</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分らしい生き方について考える。 多くの人との出会いと関わりの中で生きていくことに気づかせる。 <p>幼児とのふれあい体験</p> <ul style="list-style-type: none"> 一緒に遊ぶ。 様々な行事を一緒に行う。 幼児とのふれあい体験を振り返って、嬉しかったことや気がついたことなどについてグループで話し合う。 <p>ゲストティーチャーによる話</p> <ul style="list-style-type: none"> 保育所・幼稚園の先生の話聞く。「幼児とのふれあいの喜び」 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分もこんな時を過ごしてきたんだ。 今までいるんなことがあったけど、今、こうしてここにいる。 どんな自分になりたいか、どんな人生を送るのかは、私が決めることなんだ。 自分の一生なんて考えたことなかったな。 いろんな考え方や生き方があっていいんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習した体験について家族と話し合う。 自分が関わった幼児へ手紙を書く。 ボランティア活動に参加する。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 未来への希望と願いを持たせることができたか。 手紙の内容から、子どもたちに周りに支られた命を実感させることができたか。 一つの考えにこだわらず、いろいろな価値観を受容できる力を養うことができたか。

テーマ	支え合う喜び		
ねらい	地域社会への貢献をとおり、社会の一員としての自分を感じ、人に支えられて成長してきたことを自覚し、人を支えることの喜びを感じる。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】 ・ボランティア活動等の体験活動をとおり、感謝されることや役に立てることの喜びを感じさせる。</p> <p>【感性を育む】 ・ボランティア活動等の体験活動をとおり、相手を支えることによって、自分も支えられていることに気づかせる。</p> <p>【想像力の育成】 ・ボランティア活動等の体験活動を計画することによって、人に喜んでもらえるにはどうすればいいのかを考えさせる。</p>	<p>【先生の準備】 ・ボランティア体験をする。 ・ボランティア活動の留意点について整理する。 ・子どもの家庭環境や心身の状態等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 ・家庭や地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。</p> <p>【教育課程上の位置づけ】 ・総合的な学習の時間等</p> <p>【子どもたちの準備】 ・ボランティア活動の留意点について調べて話し合う。 ・ボランティア団体を調べてボランティアの体験をする。</p> <p>【家庭・地域との連携】 ・保護者からの意見を集める。 「子どもから励まされたり、勇気をもたらした一言」 ・ゲストティーチャーとしてボランティア活動をしている人に話を依頼する。 ・ボランティア活動の場所を選択し、依頼をする。</p>	<p>ボランティア活動の計画・立案 ・自分はどんなことができるか。 ・どうすれば役に立てるか。 ・どうすれば喜んでもらえるか。</p> <p>ボランティア活動の実施 ・保育所・幼稚園での活動 ・福祉施設・医療施設での活動 ・清掃活動 等</p> <p>ボランティア活動を振り返っての話し合い ・活動した結果や成果はどうか。 ・自分はこの活動から何を学んだか。</p> <p>ゲストティーチャーの話 ・ボランティア活動をしている人の話を聞く。</p> <p>読み聞かせ ・『おおきな木』（篠崎書林）</p> <p>ビデオ学習 ・『震度7・阪神大震災の教訓 こころのケアとボランティア』（NHK「震度7・阪神大震災の教訓」制作委員会）等</p> <p>『明日に生きる』（兵庫県教委）の活用 ・「今の自分に何ができるか」 ・「できることから始めよう」</p> <p>保護者の方の「子どもから励まされたり、勇気をもたらした一言」に基づく話し合い</p>	<p>【子どもたちの予想される心の動き】 ・誰かの役に立ちたい。 ・どうすれば喜んでもらえるかな。 ・自分は、こんなこともできるんだ。 ・役に立ててとてもうれしい。 ・ボランティアをさせてもらって、よかった。 ・最後までやり遂げたぞ。</p> <p>【振り返りカードへの記入】 ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。</p> <p>【日常生活での実践・家庭との連携】 ・ボランティア活動を継続する。 ・学習した体験について家族と話し合う。</p> <p>【先生の振り返り】 ・ボランティア活動の意義について考えさせることができたか。 ・地域社会に貢献することで、社会の一員としての自分を感じ、人を支えることの喜びを感じとらせることができたか。</p>

教育プログラムモデル 限りある命の尊さ

【テーマ】

限りある命の尊さ

【ねらい】

身近な人との関わりをとおして、老いや病にふれる体験や、死の悲しみにふれる体験などから、命の有限性や死の普遍性・絶対性に気づき、自他の命のかけがえのなさに思いをはせる。さらに、死の悲しみや苦しみに向き合う人々の思いに接し、人とのつながりを感じ、強く生きようとする心について考える。

【発達段階についての認識】

小学校段階では、自然の中にある命にふれることから自他の命の存在に気づくとともに、身近な人の老いや病について知ることで、命のかけがえのなさを実感する。また、自然現象を正確に見つめることにより命の有限性を実感する。中学校段階では、他者の痛みや避けられるかもしれない死を想像することで、自他の命のかけがえのなさと人とのつながりを実感し、死や暴力に対する健全な判断力を持つ。高等学校段階では、死の悲しみや苦しみと向き合う人々の思いにふれ、困難な中でも強く生きようとする心について考える。

	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校	高等学校
テーマ	自然の中にある命	身近にある老いと病	限りがある命	遺された者の痛みや悲しみ	生きること
ねらい	自然の中にある命にふれることから自他の命の存在に気づく。	身近な人の老いにふれたり、病について知ることによって、命のかけがえのなさを実感する。	命あるものにはすべて終わりがある。自然現象を見つめ、命の有限性を実感する。	遺された者の痛みや悲しみ、避けられるかもしれない死を想像することで、自他の命のかけがえのなさと人とのつながりを実感する。	死の悲しみや苦しみと向き合う人々の思いにふれ、困難な中でも強く生きようとする心について考える。

テーマ	自然の中にある命		
ねらい	自然の中にある命にふれることから自他の命の存在に気づく。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生き物の不思議にふれ、生命への畏敬の気持ちを持たせる。 ・生きているものと生きていないものとのふれさせ、その違いを体感させる。 ・自然にふれる中で命に限りがあることを体感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペットの死など悲しみにふれる体験から、自他の命の大切さを実感させる。 ・命に対する慈しみの気持ちを育てる。 ・失われた命に対して悲しいと思う心情を大切にさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生き物の「生」と「死」の関連をとらえ、生命への慈しみの心を育てる。 ・すべての命には限りがあり、人間も例外ではないことを感じさせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。 ・教員自身の死に対する思いをまとめる。 ・教員自身のペットとの思い出があればまとめておく。 ・学校内外の自然を四季の中でよく把握しておく。 ・現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定するなど、事前事後の個別指導を充実させる。 ・子ども一人ひとりを把握し、学級内の人間関係を掌握しておく。 ・家族との連携の上、学習や体験内容を適切に選択する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語 ・生活 ・道徳 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで飼ったペットの思い出をまとめる。 ・小動物とのふれあい体験を振り返る。 ・ノーテレビデー等とおして、生活習慣を見直すことで、自然の息吹にふれる機会をもつ。 ・自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ授業内容を伝え、家庭でも話題にするなど積極的に関心を持ってもらう。 	<p>身近な生き物とのふれあい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・うさぎ等の小動物と遊ぶ。 ・金魚、昆虫等の小動物を飼育する。 <p>生き物探し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生き物を探すことで身近な命を感じる。 ・死んだセミ等を見せ、生きているものと死んでいるものの違いに気づく。 <p>自分の体験の振り返りと聞き取り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペットの死、自分や家族の病気、身近な人の死などを振り返ったり、家族から体験を聞き取る。 ・振り返ったり聞き取ったことをクラスで発表する。 <p>絵本の読み聞かせ 動物の暮らし</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『どうぶつのはたらき』(講談社) ・『スイミー』(好学社) ・『しっぽのはたらき』(福音館書店) <p>動物やペットとの別れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『ずーっとずっとだいすきだよ』(評論社) ・『さようなら、ありがとう、ぼくの友だち ペットを失ったあなたへ』(岩崎書店) ・『スーホの白い馬』(福音館書店) <p>ゲストティーチャーの話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・獣医や動物園関係者、自然観察指導員など生き物の命に接している人の話を聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かわいいペットもいつかは死ぬんだね。 ・大切に育てた生き物が死ぬとすごく悲しい。 ・一緒に遊んだ思い出はいつまでもなくなるらないよ。 ・おじいちゃん(おばあちゃん)とのお別れはとっても悲しかったよ。 ・「死ね」とか「殺すぞ」などと言っはいけないんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な動物をかわいがる。 ・教材及び子どもの感想などをまとめて家庭に配布するなど学習や体験の成果を知らせ、家庭で話題にするよう依頼する。 ・日常の言葉遣い(「死ね」、「殺すぞ」等)を振り返る。 ・日常の生活習慣を振り返る。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命の存在や生命の不思議さに気づかせることができたか。 ・失われた命に対する悲しみにふれる体験から自他の命を大切にしようと思感させることができたか。 ・子どもたち一人ひとりの心の動きを十分にとらえることができたか。 ・死に対する過度の恐れを抱かせることはなかったか。

テーマ	身近にある老いと病		
ねらい	身近な人の老いにふれたり、病について知ることによって、命のかけがえのなさを実感する。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者とのふれあいを通じて、自分が他人を元気づけることができることを体験させる。 ・高齢者の人生経験の豊かさ等に気づかせ、尊敬の念を持たせる。 ・いろいろな生き方にふれることにより、生きていることの素晴らしさを感じさせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者とのふれあい体験をとおして老いることを理解させる。 ・絵本等の読み聞かせをとおして、老いの豊かさや病に立ち向かう人々を知り、人間の素晴らしさを感じさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な人との関わりをとおして、老いるということに気づかせる。 ・病気に負けずに闘病する人や、それを支える周りの人々について知り、人間の勇気やたくましさを感じさせる。 ・高齢者の話を聞くことにより、誰にでも老いは訪れることを感じとらせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。 ・教員自身の死に対する思いをまとめる。 ・教員自身が人生の振り返りを行っておく。 ・事前に関連施設との十分な打合せを行う。交流が一時的なものにならないように工夫する。 ・現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定するなど、事前事後の個別指導を充実させる。 ・子ども一人ひとりを把握し、学級内の人間関係を掌握しておく。 ・家庭・地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会 ・道徳 ・総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今までの高齢者との関わりの体験を思い出す。 ・病院へのお見舞いの体験等を思い出す。 ・自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ授業内容を伝え、家庭でも話題にするなど積極的に関心を持ってもらう。 	<p>インスタント・シニア体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手足におもりをつけて活動する。 ・ゴーグルやゴム手袋をつけて活動する。 <p>老人福祉施設等との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌や劇等学習成果を見てもらう。 ・一緒に折り紙などの作業を楽しむ。 ・介護のお手伝いをする。 <p>読み聞かせ</p> <p>高齢者とのふれあいや別れ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵本『おじいちゃん』（ほるぷ出版） ・絵本『おばあちゃんといつもいっしょ』（岩崎書店） ・絵本『ぶたばあちゃん』（あすなろ書房） ・絵本『わすれられないおくりもの』（評論社） <p>闘病する人々や支える人たち</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『種まく子どもたち』（ポプラ社） ・『ゆたかな命のために ホスピスで出会った生と死』（偕成社） ・『電池が切れるまで』（角川書店） ・『命の尊さを考える・生と死を学ぶ読み物集-』（鹿児島県教委） <p>ゲストティーチャーの話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の高齢者から昔の暮らしや遊びなどについて聞く。 ・老人福祉施設等の介護士などから話を聞く。 ・医療施設等で働く人などから話を聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お年寄りは物知りだなあ。 ・おじいちゃんはいろんな出来事に出会って生きてきたんだ。 ・病気にだって負けないぞ。 ・子どもが死んじゃうと、親はこんなに悲しいんだ。 ・おばあちゃんを大切にしよう。 ・お年寄りの手助けをしよう。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材及び子どもの感想などをまとめて家庭に配布するなど学習や体験の成果を知らせる。 ・高齢者を敬い、進んで交流する。 ・学校行事や地域行事でふれあった高齢者等との交流を続けていく。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者と心が通い合う交流ができたか。 ・いろいろな生き方にふれることにより、生きていることの素晴らしさを感じさせることができたか。 ・子どもたち一人ひとりの心の動きを十分にとらえることができたか。 ・虚無感や死に対する過度の恐怖心を抱かせることはなかったか。

テーマ	限りがある命		
ねらい	命あるものにはすべて終わりがある。自然現象を見つめ、命の有限性を実感する。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の命は両親の願いの結晶であり、毎日を精一杯生きることが大切であることを実感させる。 死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 震災や、交通事故、病気で亡くなった子どもについての話から、命の重みを感じさせる。 遺された者の悲しみをとおして、命は一人だけのものではなく、つながっているということを実感させる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> すべての生き物には寿命があり、自分の命も例外でないことを理解させる。 生きているということは当たり前前のことではなく、素晴らしいものであることを認識させる。 仮想現実での死と現実の死とは全く別物であることを理解させる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。 教員自身の命の有限性に対する思いをまとめる。 教員が現在の子どもの遊びの文化をまず体験し、子どもたちが接するマンガやアニメ及びゲーム等について知っておく。 インターネット上の有害情報やテレビゲームの有害性、情報モラルについて理解を深める。 現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定するなど、事前事後の個別指導を充実させる。 家庭との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 子どもたち一人ひとりを把握し、学級内の人間関係を掌握しておく。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 理科 道徳 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ノーゲームデーを体験する。 自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> メディアの中の暴力や死の表現について家庭での話し合いをとおして、親から子への命に対する力強いメッセージを依頼する。 配慮を要する子どもには家庭との連携を密にする。 	<p>命の探検</p> <ul style="list-style-type: none"> 校庭に出て子どもたちにデジタルカメラで「命」をテーマに自由に写真を撮らせ、発表させる。 死んだ昆虫等を見せ、命について考えさせる。 「年齢ものさし」づくり 思い出の絵や写真を貼って小学校6年間を振り返る「年齢ものさし」をつくり、一生の長さを考える。 家族との話し合い 自分を大切に育ててくれた家族が一番悲しむことについて考え、話し合う。 ペットの死や家族の病気、弟妹の誕生など「命」について深く考えたことを振り返る。 写真や本に基づく話し合い 動物の死 写真集『死』宮崎学（平凡社） 絵本『のにつき 野日記』（アリス館） 病気による死 『種まく子どもたち』（ポプラ社） 震災による死 『明日に生きる』（兵庫県教委） 「12時にサイレンが町中に響いた」「悲しみを乗り越えて」 ゲストティーチャーの話 獣医や動物園関係者、自然観察指導員など自然界で生と死に接している人の話 震災や病気などで子どもを亡くした保護者やNPO及び医療関係者の話 情報モラルに関するビデオ学習 『姿なき侵入者』 『虚構への落とし穴』 『虚構からの誘惑』 <p style="text-align: right;">（財団法人 警察協会）</p> <p>ノーゲームデーの実施</p>	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年をとったら、人は必ず死ぬんだ。 子どもが死ぬことは親にとってすごくつらいことなんだ。 自分の命が大切なと同じように、回りのみんなの命も大切なんだ。 死んだ命はよみがえらないんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教材及び子どもの感想などをまとめて家庭に配布するなど、授業の成果を知らせ、親子の対話を依頼する。 子どもの存在そのものが大切であるという明確で強いメッセージを依頼する。 子どもたちがわくわくするような自然体験等を数多くさせる。 芸術鑑賞などで、感動体験をさせる。 日常の生活習慣を振り返る。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 命の有限性や死の普遍性・絶対性を認識させることができたか。 死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させることができたか。 命は一人だけのものではなく、つながっているということを実感させることができたか。 子どもたち一人ひとりの心の動きを十分にとらえることができたか。 虚無感や死に対する過度の恐怖心を抱かせることはなかったか。

	テーマ	遺された者の痛みや悲しみ		
	ねらい	遺された者の痛みや悲しみ、避けられるかもしれない死を想像することで、自他の命のかけがえのなさと人とのつながりを実感する。		
中学校	指導のポイント	事前	学習・体験	事後
	<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 身近な人を亡くした家族の悲しみの深さを実感させる。 死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「被害者遺族の手記」などを読み、当事者の心の痛みや悲しみを感じさせる。 死別の悲嘆の深さに思いをめぐらせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者の痛みや悲しみを想像することで、自他の命のかけがえのなさと人とのつながりを実感させる。 快楽やスリル及び現実逃避の手段として暴走行為などで命を粗末にする愚かさ気づかせる。 自分の命を自分だけのものととらえることの誤りに気づかせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。 教員自身が被害者遺族の思いにふれる体験を持つ。 インターネット上の有害情報や仮想現実の死や暴力について知っておく。 現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定するなど、事前事後の個別指導を充実させる。 家庭・地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 子ども一人ひとりを把握し、学級内の人間関係を掌握しておく。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 保健体育、技術・家庭、道徳、特別活動、総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 被害者遺族関連記事やいじめによる自殺などの報道について調べる。 ノーゲームデーの体験をする。 自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> メディアの中の暴力や死の表現について家庭での対話を依頼する。 あらかじめ授業内容を伝え、家庭でも話題にするなど積極的に関わってもらうよう依頼する。 配慮を要する子どもには家庭との連携を密にする。 	<p>身近な人の命を奪われることの悲しみ</p> <ul style="list-style-type: none"> 遺族の手記を読んだり、身近な人の死に関わる体験談を聞く。 犯罪被害者・遺族やいじめによる自殺などの新聞記事を読む。 ロールプレイングをとおして、いじめなどの被害者のつらさや悲しみを知る。 『命の尊さを考える・生と死を学ぶ読み物集』(鹿児島県教委) <p>自分にとっての死</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口動態統計(厚生労働省)の年齢階級別死因のグラフを利用し、中高生の死因の第一位(不慮の事故)を考えさせる。 交通事故における死亡事故を想定したロールプレイングを行う。 <p>「自分が死んでしまったら親は？」 「自分が死んでしまったら友だちは？」</p> <p>ゲストティーチャーの話</p> <ul style="list-style-type: none"> 死と向き合う人々や犯罪被害者・遺族の方を招いて死別の悲嘆の深さについて話を聞く。(「被害者遺族の手記」を読む。) 救急医療従事者や救急隊員、「いのちの電話」相談員など死に直面した状況の中で命を支える人の話を聞く。 「薬物」、「いじめ」、「リストカット」、「援助交際」、「有害情報」等のテーマで話を聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> 被害者の立場に立って考えることは大切なんだ。 自分が死んだら、家族や友だちはどんなに悲しむだろう。 悲しみを乗り越えて生きている人々はすごいなあ。 自分や命を大切にしよう。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教材及び子どもたちの感想などをまとめて家庭に配布するなど学習や体験の成果を知らせる。 青少年が関わる他者の痛みや悲しみに関する事象について、家庭での対話を依頼する。 交通事故や不慮の事故等に対する認識を深め、生命尊重の視点を常に持って日常生活を点検する。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 死別の悲しみに思いをめぐらすことによって自他の命を大切にしようとする気持ちを養えたか。 死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させることができたか。 子どもたち一人ひとりの心の動きを十分にとらえることができたか。 虚無感や死に対する過度の恐怖心を抱かせることはなかったか。

テーマ	生きること		
ねらい	死の悲しみや苦しみと向き合う人々の思いにふれ、困難な中でも強く生きようとする心について考える。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 苦しい中でも、強く生きようとする事の尊さを感じとらせる。 ・ 人間の命の尊厳にふれさせる。 ・ 死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 悲しみや苦しみと向き合い、つらい中でもたくましく生きようとする人々の思いにふれ、生きることの素晴らしさを感じさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 困難な中でも、それに打ち勝とうと立ち向かう人々の思いを推し量らせる。 ・ 歴史上の偉人の社会に対する貢献や業績をとおして、自分自身の生き方を考えさせる。 ・ 様々な生や死についての体験や考察をとおして、限りある生を精一杯生きることの素晴らしさを実感させる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。 ・ 医療機関や老人福祉施設等の関係者と綿密な打合せをする。 ・ 生と死に関する様々なテーマについて、日頃から関連する情報などを収集し、考察しておく。 ・ 現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定するなど、事前事後の個別指導を充実させる。 ・ 子ども一人ひとりを把握し、学級内の人間関係を掌握しておく。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 公民 ・ 特別活動 ・ 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生と死に関する様々なテーマについての情報を集める。 ・ 自己発見の体験をする。 ・ 自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ あらかじめ授業内容を伝え、親もそのテーマについて考えるなど積極的に関わってもらおうよう依頼する。 ・ 配慮を要する子どもには家庭との連携を密にする。 	<p>読書の感想と意見交換 <闘病する人々や支える人たち></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 『種まく子どもたち』（ポプラ社） ・ 『電池が切れるまで』（角川書店） ・ 『命の尊さを考える・生と死を学ぶ読み物集』（鹿児島県教委） <p><討論をとおしての学習></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生命倫理（尊厳死・臓器移植） ・ 病名告知 ・ 薬物乱用 ・ 児童虐待、DV <p>ゲストティーチャーの話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ホスピス医、看護師、ターミナルケアをしているボランティア等の体験談を聞く。（企画から実施まで） <p>「命と向き合っている人々の言葉」 「強くたくましく生きようとしている人々の言葉」</p> <p>人の命や生き方についての考察や議論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 歴史上の偉人の生き方をとおして ・ 宇宙や自然に対する畏敬の念 ・ 人の命の尊厳 ・ 自分が死んだら周りの人はどう思うか ・ 命に関わる仕事について <p>体験活動等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生地域貢献事業、高校生就業体験事業等をとおして、医療機関や老人福祉施設等での体験活動を行う。（企画から実施まで） 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 悲しみや苦しみに立ち向かってがんばる人たちは素晴らしい。 ・ 私も勇気をもってがんばろう。 ・ 生きるということは大変だけど素晴らしい。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教材及び子どもたちの感想などをまとめて家庭に配布するなど学習や体験の成果を知らせ、家庭での対話を依頼する。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 悲しみや苦しみと向き合い、困難な中でも強く生きようとする人々から、子ども自身の生き方を振り返らせることができたか。 ・ 周囲の友だち一人ひとりの命も自分と同じかけがえない命であることを理解させることができたか。 ・ 死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させることができたか。 ・ 限りある生を精一杯生きることの素晴らしさを実感させることができたか。 ・ 子どもたち一人ひとりの心の動きを十分にとらえることができたか。 ・ 虚無感や死に対する過度の恐怖心を抱かせることはなかったか。

教育プログラムモデル 理解し合う心に支えられた命

【テーマ】

理解し合う心に支えられた命

【ねらい】

家族や親しい人たちとのコミュニケーションやスキシップを基本にして、心の通い合う適切なコミュニケーションの手段を学ぶ。また、仮想現実と現実の区別をはっきり認識し、社会の中でのマナーや望ましい人間関係についても考える。

【発達段階についての認識】

小学校低・中学年段階では、家族とのコミュニケーションやスキシップ等とともに、目的に応じた適切な情報伝達やそのルールの学習をとおして、望ましい人間関係を築く能力を育てる。小学校高学年段階では仮想現実と現実の違いを認識し、社会の中での自他の関わりについて考える。中学校段階では社会のルールとマナーを学習していく中で、お互いの考えや気持ちを伝え合う力や豊かな人間関係を築く力を育成する。高等学校段階ではネット社会の問題点を考えることをとおしてモラル意識を高めるとともに互いに理解し合う心を育て、望ましい人間関係を築く力を培う。

	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校	高等学校
テーマ	人とふれあう喜び	あいさつの大切さ	仮想現実と現実との違い	気持ちや考えを適切に伝え合うコミュニケーション	ネット社会と望ましい人間関係
ねらい	家族との会話やスキシップの喜びを感じる。	あいさつ等の言葉かけをきっかけとして、心がつながることの気持ちよさに気づく。	仮想現実と現実の違いを認識し、社会の中での自他の関わりについて考える。	考えや気持ちを伝える力をつけ、豊かな人間関係を築く力を身につける。	ネット社会でのマナーや様々なコミュニケーションスキルについて考え、望ましい人間関係を築く力を培う。

小学校低学年	テーマ	人とふれあう喜び		
	ねらい	家族との会話やスキンシップの喜びを感じる。		
	指導のポイント	事前	学習・体験	事後
	<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族とのふれあいをとおして、自己存在感を感じさせる。 ・家族や親しい人とのふれあい活動をとおして、一緒に向き合って遊ぶ時間の楽しさを実感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人のぬくもりやふれあうことの快さと満足感を感じさせる。 ・自然の音や風、気配等を五感で感じさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい体験をとおして、互いの存在や生きていることに気づかせる。 ・ノーテレビデーの取組をとおして、身のまわりには様々なことが起こっていることに気づかせる。 ・人と人との関わりの中に、様々な楽しみがあることに気づかせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員自身の幼い頃の話をもとめる。 ・子どものテレビ視聴時間やゲームをする時間、その内容などについてあらかじめ調査をしておく。 ・ノーテレビデーの企画をする。 ・子どもの家庭環境等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 ・家庭との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 ・保護者にふれあい体験の協力依頼をする。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語 ・生活 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族とのふれあい体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テレビ、ビデオ、ゲーム等に費やす時間を減らし、絵本の読み聞かせを依頼する。 ・スキンシップをする時間（背中文字で家族に伝える、肩たたき、一緒にお風呂に入る）を持つよう依頼する。 ・「テレビやゲームについて」のエッセーを募集する。 	<p>小動物とのふれあい</p> <p>ふれあい体験（背中文字、肩たたき等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族とふれあう。 ・友だちとふれあう。 ・先生とふれあう。 <p>絵本の読み聞かせ 心のふれあい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『とんとんとんの子もりうた』（講談社） <p>テレビやゲームのない生活の体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノーテレビデーの設定をする。 ・ノーテレビデーの感想を話し合う。 ・「テレビをみなかった日のこと」のテーマで作文を書く。 ・保護者からのエッセー「テレビやゲームについて」の読み聞かせをする。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だっこしてもらうときもちい。 ・テレビがなくてもいっぱいあそべたね。 ・みんなといっぱいあそべたよ。 ・家の中にはいろんな音があるんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的にテレビのない日を設定するなどして、言葉による関わり、身体によるふれあいの時間を多く持つようにする。 ・保護者に一日一つ子どものいいところを発見してほめることを依頼する。 ・学習や体験後の子どもたちの変容、感想を学級通信などで連絡する。併せて保護者の感想も掲載する。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テレビのない生活をとおして、人と人との関わりの中に、様々な楽しみがあることに気づかせることができたか。 ・スキンシップの心地よさを感じさせることができたか。

小学校 中学校 年	テーマ	あいさつの大切さ		
	ねらい	あいさつ等の言葉かけをきっかけとして、心がつながることの気持ちよさに気づく。		
	指導のポイント	事前	学習・体験	事後
	<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイングなどをとおして、あいさつなどの言葉による対面的な交流が心をつないでいくことを実感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつや会話をとおして、自分と他者とのつながりを感じとらせる。 ・心が分かり合えた気持ちよさに気づかせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションをとおして、心が分かり合えることの大切さに気づかせる。 ・いろいろな人と分かり合うためには、自分の気持ちを表現することが大切であることに気づかせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ありがとう」「ごめんなさい」について教員の体験や考えをまとめておく。 ・子どもの家庭環境等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 ・家庭や地域との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳 ・総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が人に親切にしたり、人から親切にされたときの体験を思い出す。 ・「ありがとう」「ごめんなさい」はどんなときに使ったのか考える。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭や地域にも意識をしてあいさつや言葉かけをしてもらうよう依頼する。 	<p>「あいさつすると気持ちいい」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心を通わせ合うきっかけとなるあいさつの大切さを知る。 ・ロールプレイングをすることで、相手の立場に立った適切なコミュニケーションを考える。 <p>「心の架け橋」となる言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が人に親切にしたとき、人から親切にされたときの体験を作文に記す。 ・「ありがとう」「ごめんなさい」はどんなときに使ったのか一日を振り返って、日記として記す。 ・「行ってきます」「行ってらっしゃい」等の言葉かけについて考える。 ・「いいとこみつけ」をして、友だちにいいところを伝える。 <p>『心のノート』の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人とともに生きよう」 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほめてもらってうれしかったな。 ・大きな声であいさつしたら、きもちよかったよ。 ・勇気を出して「ごめんなさい」を言ったら、仲直りできたよ。 ・「だいじょうぶ？」って声をかけたら、「ありがとう」って言ってくれた。うれしかったよ。 ・仲良くなったよ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習や体験後の子どもたちの感想、保護者の思いを通信で連絡する。 ・家族新聞を親子で作ってみる。 ・心の様子をうつす日記を親子で記入する。(親子交換日記) ・家庭の中であいさつのルールをつくる。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつの大切さに気づかせることができたか。 ・心が分かり合えた気持ちよさに気づかせることができたか。 ・自分の気持ちを表現することの大切さに気づかせることができたか。

小学校高学年	テーマ	仮想現実と現実との違い		
	ねらい	仮想現実と現実の違いを認識し、社会の中での自他の関わりについて考える。		
	指導のポイント	事前	学習・体験	事後
	<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> お互いの感情を直接に伝え合う体験の中で、気持ちを分かち合う喜びを感じさせる。 テレビ、テレビゲーム、パソコン、携帯電話等の多様なメディアとの接触を見直し、スキップのよさを実感させる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 構成的グループ・エンカウンターをとおして、ふれあうことの大切さを実感させる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の生活を振り返ることによって、ネット社会への望ましい関わり方について考えさせる。 一般に、電子メールでは感情はきちんと伝わらないことを実感させる。 電子メールやチャットにのめり込むことの危険性に気づかせる。 仮想現実と現実との違いに気づかせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 事前に子どもたちがゲームやインターネットに接する時間など実態を把握するアンケートを実施する。 テレビゲームのマイナス側面（睡眠時間の減少、いわゆるリセット症候群等）について問題点を把握しておく。 子どもの家庭環境等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 家庭との連携の上、学習や体験内容に配慮する。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭 特別活動 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> テレビ、テレビゲーム、パソコン、携帯電話等について今までに感じたことを作文にする。 一日の生活表をつくる。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 友だちとふれあって遊ぶ機会をつくる。 一日の生活表の記入をする。 ノーテレビデーやノーゲームデーの実施を依頼する。 	<p>テレビやゲームのない生活(ノーテレビデー、ノーゲームデー)の体験</p> <ul style="list-style-type: none"> 感想を話し合う。 <p>メディアとの関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> 一日の生活表を発表する。 作文発表会「テレビゲームとわたし」を実施する。 望ましいテレビやゲームとの関わり方について話し合う。 基本的な生活習慣の大切さについて考える。 <p>構成的グループ・エンカウンターによるふれあい体験</p> <p>様々な交流体験</p> <ul style="list-style-type: none"> テレビ会議での交流 チャットや掲示板での交流 互いに訪問し合っでの交流 ネット社会でのルールとマナー 『すべての教職員が身につけておきたい情報モラル』（兵庫県教委）を活用する。 (http://www.hyogo-c.ed.jp/manabi/moral/index.html) 「情報モラル研修教材 2005」（独立行政法人教員研修センター）を活用する。 (http://swab.nctd.go.jp/kyouzai_new/kenshu/index01.htm) <p>ビデオ学習</p> <ul style="list-style-type: none"> 暴力的なテレビゲームをするとどんな気持ちになるか。 『GAME OVER』 (Media Education Foundation) 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> 友だちの好きなことがわかったよ。 現実とゲームの世界は別物だ。 自分でコントロールすることが大切。 日課表をつくるようになったよ。 家の人とゲームについての約束をつかったんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家族の団欒やふれあいを大切にする。 子どもにお手伝いをさせ、しっかりほめることを保護者に依頼する。 仮想現実にはたってしまうことのマイナス面を学級通信等で連絡する。 一日の生活表を一緒につくり、生活を振り返らせる。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> メディアとの関わり方を振り返り、今後の生活に生かすことができたか。 仮想現実と現実との違いに気づかせることができたか。

テーマ	気持ちや考えを適切に伝え合うコミュニケーション		
ねらい	考えや気持ちを伝える力をつけ、豊かな人間関係を築く力を身につける。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちを素直に表現することにより、分かり合えることを感じさせる。 子ども同士の心がつながるといった体験をとおして、信頼し合うことの喜びを感じさせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の素直な気持ちをきちんと伝え、それを受けとめてもらう満足感を感じさせる。 会話やしぐさをとおして、他者の考えや思いを感じ取る力を身につけさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の思いがどうすれば相手に受けとめてもらえるか、相手の立場に立って考えさせる。 自分の素直な気持ちをもとに、相手の立場に立って相手の心情を考えさせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員自身が自尊感情を高める体験をしたり、自己再発見の体験をしておく。 パソコン教室のLANを使って、子どもたちに電子メールを利用するときのモラルとマナーを指導する。 子どもの家庭環境や友だち関係等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 技術・家庭 道徳 特別活動 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 電子メールもインターネットもなかった時代のコミュニケーションについて家庭で話し合う。 有害情報、チェーンメール、掲示板での中傷など、インターネットを使っての不愉快な思いをしたことがなかったかを家庭で話し合う。 授業への参観等の依頼をする。 	<p>構成的グループ・エンカウンターによるふれあい</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己理解を深める。 他者理解を深める。 <p>アサーション・トレーニングによる自己表現</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の素直な気持ちの理解と他者へも配慮した自己主張を学ぶ。 <p>学級の友だちのいいところ探し</p> <ul style="list-style-type: none"> パソコン教室内のLANをつかってメールメッセージ交換をし、お互いのよいところを伝え合う。 友だちの顔を見ながら、お互いのよいところを伝え合う。 <p>様々なコミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> 伝えることの大切さとネット社会のルールとマナーを学ぶ。 対面的なコミュニケーションがなぜ大切なのか考える。 有害情報、チェーンメール、掲示板での中傷など、インターネットを使っての不愉快な思いをしたことがなかったかを話し合う。 メール交換をするときのトラブル等について話し合う。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分に自信が持てた。 使い方によって、電子メールは人を傷つけたりすることもある。気をつけよう。 友だちのあの言葉が私を元気づけた。 自分の気持ちをきちんと伝えるって大切な。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭での会話を増やす。 学習や体験の様子、実施後の感想を学級通信等で家庭へ連絡する。 「親が無関心では子どもを守れない」という家族の絆の大切さを学級通信等で伝える。 家庭と連携し、インターネットや携帯電話等の利用に関するルールをつくる。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の思いがどうすれば相手に受けとめてもらえるかを考えさせることができたか。 相手の立場に立って相手の心情を考えさせることができたか。 メール交換におけるルールやマナーを身につけさせることができたか。 電子メールや掲示板等は使い方次第で人を傷つける場合もあることを実感させることができたか。

高 等 学 校	テーマ	ネット社会と望ましい人間関係		
	ねらい	ネット社会でのマナーや様々なコミュニケーションスキルについて考え、望ましい人間関係を築く力を培う。		
	指導のポイント	事前	学習・体験	事後
	<p>【感動の体験】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども同士による傾聴・共感の体験活動をとおして、理解し合うことの素晴らしさを感じさせる。 自分の気持ちを素直に表現することにより、分かり合えることを感じさせる。 <p>【感性を育む】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の素直な気持ちをきちんと伝え、それを受けとめてもらう満足感を感じさせる。 <p>【想像力の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ネット社会の長所と短所を知り、有効に生かせることに気づかせる。 自分の思いがどうすれば相手に受けとめてもらえるか、相手の立場に立って考えさせる。 	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員自身がコミュニケーション能力を高める体験をしておく。 情報機器使用時における教員自身の失敗談や不愉快な経験等についてまとめる。 教員自身が自尊感情を高める体験をしたり、自己再発見の体験をしておく。 子どもの家庭環境や友だち関係等を把握し、事前事後の個別指導を充実させる。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報 特別活動 総合的な学習の時間 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> どんな時に情報機器を活用するか調べてまとめる。 情報機器を使用している時に自分が失敗した体験や不愉快だった経験について、調べてまとめる。 自尊感情を高める体験をする。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者からの意見を集める。「大人から見た情報機器の怖さ」等 	<p>ネット体験</p> <ul style="list-style-type: none"> 調査をもとにネットや電子メールの活用について話し合う。 調査をもとにネットや電子メールでの失敗談や不愉快な経験等について話し合う。 <p>ネット社会</p> <ul style="list-style-type: none"> ネット社会での望ましい人間関係づくりに向けて、心がける点を話し合う。 保護者からの意見「大人から見た情報機器の怖さ」に基づき話し合う。 <p>コミュニケーションスキル</p> <ul style="list-style-type: none"> アサーション・トレーニングにより自己表現を学ぶ。 <p>構成的グループ・エンカウンターによるふれあい</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己理解を深める。 他者理解を深める。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ネットは便利だけれど、責任がともなうんだな。 こうやれば自分の気持ちがよく伝わるんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> アサーティブな表現を意識したコミュニケーションを心がける。 情報機器の安全で有効な活用を心がける。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ネット社会の長所と短所を理解させ、情報モラルを身につけさせることができたか。 自分の気持ちを素直に表現することにより、分かり合えることを感じさせることができたか。 自分の思いがどうすれば相手に受けとめてもらえるか、相手の立場に立って考えさせることができたか。

教育プログラムモデル 尊い命を守るために

【テーマ】

尊い命を守るために

【ねらい】

人による命をおびやかす行為に対しては未然に防ぐ対策を、また自然災害に対しては、その被害を最小限にいとめる知恵を学ぶ。そして、命をおびやかす様々な行為に対して、毅然と立ち向かい、克服していこうとする態度を養う。さらに、このことをとおして、子どもたちと大人が共にかけがえのない命を実感し、自他の命を守っていこうとする姿勢を持つ。

【発達段階についての認識】

小学校段階では、地域の人々との協力によって行われている命を守るための取組を知る。また、いじめ加害・被害を知り、いじめの行為を決して行わない心を育てる。中学校段階では、薬物犯罪に巻き込まれる心理や自殺について学び、命をおびやかす行為を未然に防ぐ知恵を学ぶ。高等学校段階では、児童虐待やDVがなぜ起こるのかを学び、社会人になったとき、自らがその過ちを犯さない知識と知恵を学ぶ。

また、すべての段階をとおして、年齢に応じた防災教育・ストレスマネジメント教育を展開する。防災知識だけでなく、被災後の心の変化やトラウマの心理、心のケアについても学び、困難に立ち向かい生き抜いてきた先人の知恵と対処を学ぶ。

	小学校低学年	小学校中・高学年	中学校	高等学校
テーマ	傷つくことばと元気ができることば 子どもの命を地域で守る	いじめ防止教育・さわやかな自己主張・ストレスの対処法 防災教育と災害後の心のケア	-a: 少年非行の実態と防止 -b: 暴力の知識と防止 -c: 自殺防止教育 防災教育と災害後の心のケア	DV防止教育、児童虐待防止教育 防災教育と災害後の心のケア
ねらい	言葉によって人を元気づけたり、傷つけたりすることがあることを学ぶ。 ヒヤリハットマップを子どもと一緒に作り、地域で子どもの命を守る。	いじめとけんかの違い、いじめによる心と身体の変化、不快な場面での言い方、いじめをしないための意識、いじめを見たり聞いたりしたときの対処を学ぶ。 人による行為に対しては未然に防ぐ対策を、また自然災害に対しては、その被害を最小限にいとめる知恵を学ぶ。また、被災後の心のケアについて知る。	-a: 薬物依存・少年非行に陥る少年の心理を学び、それらが命をおびやかす行為であることを理解し、その兆候を知ることにより未然に防ぐ知恵を学ぶ。 -b: カットしてふるう暴力と支配のための暴力があることを学び、暴力以外の方法で自分の気持ちを表現することを学ぶ。 -c: 自殺について知り、自殺を避けるためにできることについて考える。 自然災害に襲われた人々が、その困難をいかに乗り越えてきたかについて学び、災害への対処を身につける。また被災後の心のケアについて学ぶ。	DV、児童虐待がなぜ起こるのかを学び、社会人になったときの望ましい人間関係の築き方を学ぶ。命をおびやかす暴力の連鎖を断ち切る。 自然災害を乗り越えたり、被害を最小限にいとめる試みをした実践を学ぶ。

注) 各発達段階のテーマとねらいにおける、 はそれぞれ対応している。

小学校低学年	テーマ	傷つくことばと元気ができることば 子どもの命を地域で守る		
	ねらい	言葉によって人を元気づけたり、傷つけたりすることがあることを学ぶ。 ヒヤリハットマップを子どもと一緒に作り、地域で子どもの命を守る。		
	指導のポイント	事前	学習・体験	事後
	<p>【感動の体験】 ロールプレイングの体験をとおして、言葉を掛け合うことによって生まれる喜びを感じさせる。 ヒヤリハットマップを家庭や地域の人々と子どもが一緒につくることによって、命を守っていこうとする意欲を持たせる。</p> <p>【感性を育む】 もらってうれしい言葉によって、身体や心がどのようになるかを感じとらせる。 あいさつの気持ちよさを感じとらせる。 身近なところに潜む危険に気づかせる。</p> <p>【想像力の育成】 言葉は人を元気づけたり、傷つけたりする力があることを考えさせる。 危険な場面を想定し、自分の命を守る行動を考えさせる。</p>	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 心理的虐待について調べ、教員自身の言葉かけや態度について見直す。 危険な場所と安全避難場所を確認する。 校区内地図を準備する。 子どもの交友関係をよく把握しておく。 <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生活 道徳 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> 子ども駆け込み 110 番等、地域の協力家庭や店を調べる。 通学路や遊び場所近くの駆け込み 110 番の家や店にあいさつに行く。 地域の人々にあいさつをする習慣をつける。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業参観時等に、「家族からのホッとす言葉、イライラする言葉」を出し合ってもらおう。 P T C A、自治会、子ども駆け込み 110 番等、地域の協力家庭や店等に協力を依頼する。 	<p>【 】</p> <p>ロールプレイング</p> <ul style="list-style-type: none"> 困っている子に声かけをする場面を疑似体験する。 <p>「ありがとう探検隊」</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校生活の場で「ありがとう」の言える場面を探す。 <p>「どんなきもちかな？」</p> <ul style="list-style-type: none"> 怒り・悲しみ・喜びの表情絵を用いて、「こんな顔になるのはどんなとき？」「どんなことばを言ってもらったらこんな顔になる？」と質問する。 <p>【 】</p> <p>ヒヤリハットマップづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域のどんな場所が危険いか学級で話し合う。 現地にでかけて確認する。 地図づくりをする。 <p>「こんなときどうしよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 知らない人から声をかけられたらどうするか話し合う。 「誘拐へ結びつく誘い」 日常に潜む、身近な危険場面を考える。 自分の命を守る行動について考え、練習する。 <p>『あすにいきる』（兵庫県教委）の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> 「校区を歩いてみよう」 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ことばってとっても大切なんだ。 「どうしたの？」と言ってもらって、ホッとした。 相手を傷つける、言っではいけない言葉があるんだ。 カッとしたら心を落ち着けるおまじない。 自分の命は、しっかり守るぞ。 「いやです」「やめてください」を大きな声で言おう。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習内容と子どもの反応を通信や保護者会の場等で伝える。 お手伝い等をおして家族から「ありがとう」を言ってもらおう。 「トラブル解決隊」や「困ったときの相談係」等交代で主体的に関われる学級場面をつくる。 地域の人々にあいさつをする。 危険なときの回避の仕方を家族から学ぶ。 家族から危険な目にあった体験談を聞く。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉の大切さについて理解させることができたか。 危険を感じとり、身を守ろうとする態度を養うことができたか。

テーマ	いじめ防止教育・さわやかな自己主張・ストレスの対処法 防災教育と災害後の心のケア		
ねらい	いじめとけんかの違い、いじめによる心と身体の変化、不快な場面での言い方、いじめをしないための意識、いじめを見たり聞いたりしたときの対処を学ぶ。人による行為に対しては未然に防ぐ対策を、また自然災害に対しては、その被害を最小限に食い止める知恵を学ぶ。また、被災後の心のケアについて知る。		
指導のポイント	事前	学習・体験	事後
<p>【感動の体験】 一見、いじめに見えないごっこ遊びや特訓、親切に見える友だちへの注意等に潜む悪意がいじめであることに気づかせる。 被災者や被害者の手記等をとおして、災害や犯罪の恐ろしさや、それを切り抜けた勇気について学ばせる。 リラックス法を身につけることで、怒りや悲しみといったストレスが変化することを実感させる。</p> <p>【感性を育む】 ロールプレイングの体験をとおして、相手を傷つけないで、自分の考えを伝える表現方法を身につけさせる。 震災を経験した人の手記等をとおして、危機に直面した時に落ち着いて行動しようとする姿勢を身につけさせる。</p> <p>【想像力の育成】 いじめとけんかの違いを理解させ、いじめを決して許さないという気持ちを育む。 災害や犯罪にあった後の心身の変化や、うわさや傷つける言葉等の二次被害があることを知らせる。 人を支える心の絆の大切さを実感させる。</p>	<p>【先生の準備】 ・ 子どもの交友関係をよく把握しておき、個別指導を充実させる。 ・ 自然災害の写真や、子どもに関する犯罪情報を集めておく。</p> <p>【教育課程上の位置づけ】 ・ 道徳 ・ 特別活動 ・ 総合的な学習の時間</p> <p>【子どもたちの準備】 ・ いままでの「いじめた体験」や「いじめられた体験」を振り返る。</p> <p>【家庭・地域との連携】 ・ いじめ防止の保護者研修会を開く。 ・ 学級通信等で学級や子ども様子を日常的に知らせる。</p>	<p>【 】 いじめへの対処 ・ 学校生活を振り返り、いじめ、けんか、特訓、遊びの違いを明らかにする。 ・ いじめを見抜き、なくす方法を考える。 ・ いじめにあったり、いじめを見たときの対処をロールプレイングによって学ぶ。 絵本による学習 ・ 『わたしのせいじゃない』(岩崎書店) ビデオ学習 ・ 『大切ないのちシリーズ・大切ないのちといじめ』(アーニー出版) ストレスへの対処 ・ ストレスとは何かを知る。 ・ ストレスによって起こる様々な体や心の反応について知り、対処法を学ぶ。 『学校のストレスマネジメント研究』(県立教育研修所心の教育総合センター) アサーション・トレーニングの体験 ・ 不快な気持が湧いた時の適切な言い方をロールプレイングによって体験する。</p> <p>【 】 防災と被災後の心のケア ・ 被災者や被害者の手記等を読む。 ・ 自然災害や不審者に対して自分自身でできる具体的行動を考える。 ・ 災害や被害にあった後の心の変化について知る。 ・ うわさや傷つける言葉等について知る。 『明日に生きる』、『学校防災マニュアル(改訂版)』(兵庫県教委)の活用 紙芝居・絵本等による学習 ・ 『かばくんの気もち』 (兵庫教育大学富永良喜研究室 http://www.edu.hyogo-u.ac.jp/yotomi/kabakun.pdf)</p>	<p>【子どもたちの予想される心の動き】 ・ 悪意があれば、遊びに見えても、いじめなんだ。 ・ いじめは自分の心の問題だから、自分で分るはずなんだ。 ・ いじめは決して許してはいけないんだ。 ・ 自分の命は自分で守るんだ。 ・ 私ができることは だ。</p> <p>【振り返りカードへの記入】 ・ 学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 ・ 授業から一か月後に、いじめ被害・加害調査を実施し、取組の効果を検証する。</p> <p>【日常生活での実践・家庭との連携】 ・ 学習内容と子どもの反応を通信や保護者会の場等で伝える。 ・ 相談・アドバイスができる家族関係をつくる。 ・ 防災グッズを準備する。 ・ 非常時の連絡方法・集合場所等を家族で決めておく。</p> <p>【先生の振り返り】 ・ いじめを見抜く力や、いじめをなくそうとする意欲を養うことができたか。 ・ 日常生活の中で、危機意識をもたせ、その対処について考えさせることができたか。</p>

<p>テーマ</p>	<p>-a: 少年非行の実態と防止 -b: 暴力の知識と防止 -c: 自殺防止教育 防災教育と災害後の心のケア</p>		
<p>ねらい</p>	<p>-a: 薬物依存・少年非行に陥る少年の心理を学び、それらが命をおびやかす行為であることを理解し、その兆候を知ることにより未然に防ぐ知恵を学ぶ。 -b: カットしてふるう暴力と支配のための暴力があることを学び、暴力以外の方法で自分の気持ちを表現することを学ぶ。 -c: 自殺について知り、自殺を避けるためにできることについて考える。 自然災害に襲われた人々が、その困難をいかに乗り越えてきたかについて学び、災害への対処を身につける。また被災後の心のケアについて学ぶ。</p>		
<p>指導のポイント</p>	<p>事前</p>	<p>学習・体験</p>	<p>事後</p>
<p>【感動の体験】 売春・薬物・自殺サイト等犯罪になぜ巻き込まれるのか、その心理的背景等の学習をとおして、犯罪が身近に潜んでいることに気づかせる。 人類は災害と闘い、災害の中から知恵と勇気を学んできたことを知らせる。</p> <p>【感性を育む】 命をおびやかす犯罪を拒む勇気と知識を持たせる。 事例や手記をとおして、危機に直面した時に冷静に判断しようとする姿勢を身につけさせる。</p> <p>【想像力の育成】 犯罪に巻き込まれる心の隙間を考えさせ、未然に防ぐ知恵を学ばせる。 災害を切り抜けた人々のことを知らせ、その勇気を学ばせる。</p>	<p>【先生の準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> -a: 少年を巻き込む犯罪が、愛情を求める心理を利用した卑劣な行為であることを事前に認識しておく。 -b: 暴力意識のアンケート調査を実施する。 -c: サインに気づいた時の対処法を研修しておく。 <p>・自然災害の写真や資料、薬物や少年非行等に関する情報を集めておく。</p> <p>・子どもの家庭環境やプライバシーに十分配慮し、事前事後の個別指導を充実させる。</p> <p>・家庭と連携をとり学習や体験内容に配慮する。</p> <p>【教育課程上の位置づけ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保健体育 ・道徳 ・特別活動 <p>【子どもたちの準備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暴力意識のアンケート調査に回答する。 ・災害や犯罪についての報道に注目する。 <p>【家庭・地域との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級通信・保護者会等で学習の内容や資料を提供する。 ・地域の警察、補導員、民生委員等と連携をとる。 	<p>【 -a】</p> <ul style="list-style-type: none"> 少年非行の実態と防止 ・薬物依存や少年非行の事例を読み、その心理を考え、防ぐにはどのような行動が必要かを討議する。 ・非行に関する劇を見て、非行の怖さとその防止策を学ぶ。(兵庫県警少年非行防止劇団「麦の穂」) <p>【 -b】</p> <ul style="list-style-type: none"> 暴力の知識と防止 ・衝動的暴力と道具的暴力について学ぶ。 ・衝動的暴力にはストレスマネジメント体験を学ぶ。 『学校・家庭・地域における暴力防止研究 - 学校における危機対応実践プログラム開発研究 -』 (県立教育研修所心の教育総合センター) <p>【 -c】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自殺について ・自殺の実態について知る。 ・サインに気づいた時の対処法を学ぶ。 ・「自殺は許されないものである」ということを実感する。 ・どんな相談機関があるか知る。 ・自殺予防対策支援ページ「いきる」を活用する。 (国立精神・神経センター精神保健研究所 http://www.ncnp-k.go.jp/ikiru-hp/) ・『青少年のための自殺予防マニュアル』(金剛出版)を活用する。 <p>【 】</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災・被害後の心のケア ・災害や犯罪の報道について被害者の立場から見直す。 ・震災後の手記や資料から、周囲の人からの言葉かけの中で、傷つく言葉と元気がでる言葉を考える。(二次的被害の防止) ・トラウマについて学び、災害時の望ましい対処を考える。 『明日に生きる』(兵庫県教委)の活用 ゲストティーチャーの話 ・台風被害や地震を体験した人々の話を聞く。 	<p>【子どもたちの予想される心の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・犯罪は心の弱みにつけ込んでくるんだ。 ・はっきり断る勇気を持ちたい。 ・つらいことがあったら、悲しくなるのは自然なことなんだ。 ・人が力を合わせると生きぬくことができるんだ。 <p>【振り返りカードへの記入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。 <p>【日常生活での実践・家庭との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習内容と子どもの反応を通信や保護者会の場等で伝える。 ・防災グッズを準備する。 ・非常時の連絡方法・集合場所等を家族で決めておく。 <p>【先生の振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・犯罪に巻き込まれる心理を理解させた上で、自分の身を守る知恵と勇気を持たせることができたか。 ・災害を生き抜いた人々の知恵と勇気から、人間の生きる力の素晴らしさを実感させることができたか。

<p>テーマ</p>	<p>DV防止教育、児童虐待防止教育 防災教育と災害後の心のケア</p>		
<p>ねらい</p>	<p>DV、児童虐待がなぜ起こるのかを学び、社会人になったときの望ましい人間関係の築き方を学ぶ。命をおびやかす暴力の連鎖を断ち切る。 自然災害を乗り越えたり、被害を最小限に食い止める試みをした実践を学ぶ。</p>		
<p>指導のポイント</p>	<p>事前</p>	<p>学習・体験</p>	<p>事後</p>
<p>【感動の体験】 自分で自分の心と身体のセルフコントロールができる体験をさせる。 様々な災害を克服するために、人と人の絆が最も大きな力になっていたことを知らせる。</p> <p>【感性を育む】 暴力を受ける側の現実や被害に思いをはせ、暴力は微塵も許されるべきではないと感じとらせる。</p> <p>【想像力の育成】 暴力をふるう側が、「支配と権力」をよりどころにしていることを理解し、暴力に依存してしまう人間の心理を想像させる。 人間同士の絆によって困難を克服できることの強さを感じとらせる。</p>	<p>【先生の準備】 ・暴力（DVや虐待）に関する新聞記事や創作事例を用意する。 ・DVや虐待に関する法律を調べる。 ・振り込め詐欺や霊感商法といったマインドコントロールを利用した事件について調べる。 ・セルフリラクセーションを教える練習をする。 ・職員会議、学年会議等で学習の目的を共通理解し、暴力に対する教員一人ひとりの考え方を伝え合う。 ・子どもの家庭環境やプライバシーに十分配慮し、事前事後の個別指導を充実させる。 ・家庭と連携をとり、学習や体験内容に配慮する。</p> <p>【教育課程上の位置づけ】 ・国語 ・公民 ・理科 ・特別活動 ・総合的な学習の時間</p> <p>【子どもたちの準備】 ・新聞記事でDVや虐待に関する記事を調べたり、書籍等でDVや虐待について調べたりする。</p> <p>【家庭・地域との連携】 ・学習の意義とねらいを伝え、暴力に対する担任の考えを伝える。 ・体罰や暴力に対する学校の取組や、暴力行為を行った場合の指導について通信や保護者会等とおして相互理解する。 ・高校生を標的にした犯罪事例を紹介する。 ・警察・民生委員・コンビニエンスストア等と定期的な情報交換をする。</p>	<p>調べ学習 ・DVや虐待等の社会問題を調べて発表する。 暴力防止 ・事例や話し合いをとおして、暴力について理解する。 セルフコントロールとアサーション・トレーニング ・心は他者からコントロールされるのではなく、自らコントロールできるという体験をする。 ・自分の気持ちをさわやかに伝えられる体験をする。 新聞記事、視聴覚教材による学習 DVや虐待に関する資料・ビデオ ・啓発冊子『いのちのこえにみみをすまして・・・』 ・人権啓発ビデオ『新しい風』 (以上(財)兵庫県人権啓発協会) マインドコントロールを利用した事件等に関する資料・ビデオ等 (警察庁「振り込め詐欺にご用心!」 http://www.gov-online.go.jp/pickup/2006_02/pickup_movie.html) ・正しい情報と判断力を持つ。 ストレスマネジメントの学習 ・心と身体のセルフコントロール法を体験する。 自殺について ・自殺の実態について知る。 ・自殺のサインに気づいた時の対処法について考える。 ・「自殺は許されないものである」ということを実感する。 ・どんな相談機関があるかを知る。 ・自殺予防対策支援ページ「いきる」を活用する。 (国立精神・神経センター精神保健研究所 http://www.ncnp-k.go.jp/iki/ru-hp/) ・『青少年のための自殺予防マニュアル』(金剛出版)を活用する。 ゲストティーチャーの話 ・自然災害の被災者や犯罪、DVの被害者、「いのちの電話」の関係者等の話を聞く。 ・戦争体験者の話を聞く。 『明日に生きる』(兵庫県教委)の活用</p>	<p>【子どもたちの予想される心の動き】 ・これもDVなんだ。 ・虐待ってそういうことなんだ。 ・暴力は受ける側に問題があるわけではないんだ。 ・心や身体は自分でコントロールできるんだ。 ・自分にも「支配と権力」による行為があるかもしれない。</p> <p>【振り返りカードへの記入】 ・学習・体験の後に、子どもたちに自分の心の動きを振り返らせ、振り返りカードに記入させる。</p> <p>【日常生活での実践・家庭との連携】 ・日常生活の中でも簡単なセルフリラクセーションを実践する。 ・学習内容と子どもの反応を通信や保護者会の場等で伝える。</p> <p>【先生の振り返り】 ・様々な暴力について理解し、望ましい人間関係を築こうとする態度を養えたか。 ・人間同士の絆によって困難を克服できることの強さを感じとらせることができたか。</p>

2 授業用指導案

2 授業用指導案

(1) 授業用指導案の作成

授業用指導案の作成に当たっては、教育プログラムモデルをもとに、各学校の状況、子どもたちの実態や発達段階に応じて、学習・体験を組み合わせることが必要である。

16 頁の第 部実践編「実践編の構成と活用方法」に示したように、授業実践に向けて授業のねらいを決め、中心となる学習・体験を選択し、目標分析表、目標構造図、学習指導案、振り返りカードからなる授業用指導案を作成する。

目標分析表

授業用指導案の作成に当たっては、各学校の状況、子どもたちの実態や発達段階に応じて、単元や時間ごとのねらいを明確にする必要がある。つまり、子どもたちに学習・体験をとおして、どのような力をつけたいのか、どのような姿勢や態度を養いたいのか等の到達目標を明確にするのである。そして、こうした目標を具体的に洗い出し、目標分析表を作成する。

目標分析表には、縦軸を小単元(次)ごとに区切り、横軸に「感動の体験」「感性を育む」「想像力の育成」という指導のポイントを設けている。また、子どもたちの状況を把握し、事後の子どもたちの心の動きや振り返りがねらいや到達目標から見て十分なのかどうかといった「先生の振り返り」の項目も設けている。この目標分析表の作成は、単元の教育活動全体に目を配り、そこでのポイントを精選、構造化するための基礎作業となる。

目標構造図

単元の主要な目標を洗い出した目標分析表の中で、特に重要なものを精選し、構造化したものが目標構造図である。目標構造図の作成をとおして、活動の全体構造とそこでのポイントや系統性を明確にすることができる。

中核目標の抽出

これだけは絶対にはずせないという本質的な意義を持つ中核目標を 1～3 個選び出す。

基礎目標の相互関係の設定

中核目標以外のものを、中核目標を支える基礎目標とし、これらを論理的に分析して構造化し、中核目標の達成との関係がはっきりするような形で位置づける。

前提目標の設定

学習・体験をすすめるに当たっての前提として、理解や定着を再確認しておくべきことを前提目標として設定する。

どの目標を中核目標にするか、基礎目標との間にどのような構造を設定するかは、目の前の子どもをどうとらえ、どのように命の大切さを実感させようとしているのかによって異なってくる。

学習指導案

目標分析表、目標構造図にもとづいた学習・体験活動を小単元(次)ごとに示したものが学習指導案である。

振り返りカード

子どもたちが学習・体験の後に、振り返りカードへの記入をとおして、自分の活動内容や心の動きを振り返ることが必要である。

振り返りカードには、「感動の体験」「感性を育む」「想像力の育成」のそれぞれの目標(めあて)をあげている。子どもたちは、このカードへの記入をとおして、学習・体験の目標(めあて)と照らし合わせながら、自分の活動内容や心の動きを振り返っていくのである。そして、それぞ

れの振り返りの後、全体を振り返っての感想を記入する。その後、教員と家庭からコメントをもらい、それらを蓄積することにより、このカードをポートフォリオとして活用することができる。

振り返りカード		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験の目標(めあて)	自分の振り返り
感動の体験		
感性を育む		
想像力の育成		
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

【参考・引用文献】

- ・ 梶田叡一 『絶対評価<目標準拠評価>とは何か』小学館 2004
- ・ 人間教育研究協議会編 『真の学力向上のために』金子書房 2005
- ・ 加藤明 『評価規準づくりの基礎・基本 - 学力と成長を保障する教育方法 - 』明治図書 2003

(2) 授業用指導事例

ここでは、例として小学校高学年「命を守るために」、中学校「自分を大切にすること」、高等学校「命の大切さを実感させること」というテーマを設定し、授業用指導事例を作成した。

なお、学習指導案については指導略案を示した。

授業用指導案例 命を守るために (小学校高学年)

【テーマ】 命を守るために

【ねらい】 いじめ、暴力、荒れる、キレル等人による命をおびやかす行為に対して、毅然と立ち向かい、克服していこうとする意欲を持ち、かけがえのない命を実感し、自他の命を守ろうとする態度を培う。

【時間数】 全7時間

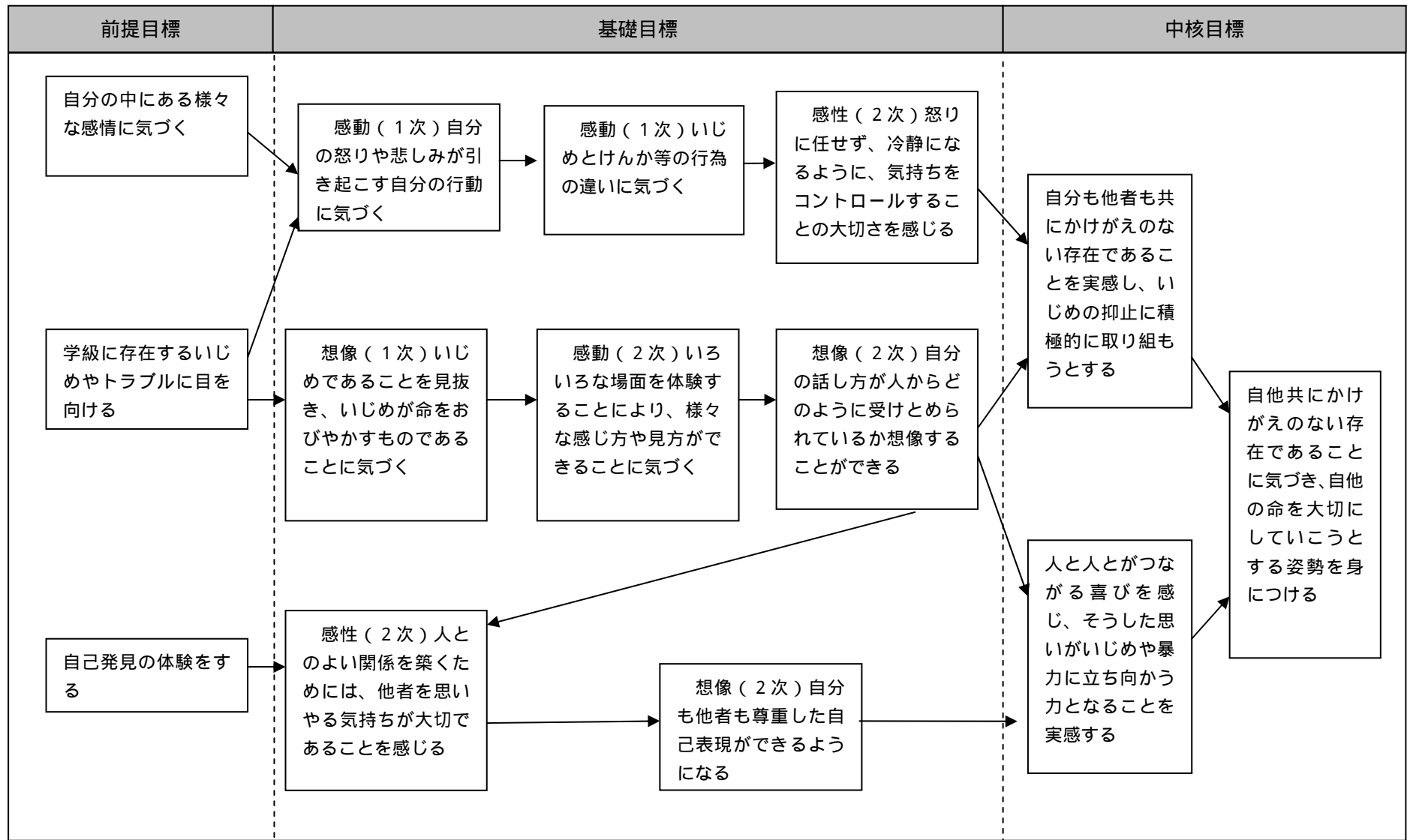
目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	自己発見の体験をする。	自分の中にある様々な感情に気づく。	学級に存在するいじめやトラブルに目を向ける。	自他を大切にすることについて考える。	
1次 (2時間)	人間にはどんな感情があるか考える。 自分がどんな時にどんな気持ちになるか、どんな行動をとるか考える。 感情の適切な表現について考える。	自分の怒りや悲しみが引き起こす自分の行動に気づく。 いじめとけんか等の行為の違いに気づく。	人には様々な感情表現があることに気づく。 いじめが人を傷つけるものであることに気づく。 いじめを許さないという気持ちを持つことができる。	感情のままに行動すると、どういう事態を招くか考える。 感情の適切な表現について考えることができる。 いじめであることを見抜き、いじめが命をおびやかすものであることに気づく。	いじめとけんかの違いを理解させることができたか。 様々な感情表現があることに気づき、感情の適切な表現について考えさせることができたか。
2次 (3時間)	アサーション・トレーニング ・自分の話し方の特徴を知る。 ・アサーティブな話し方を理解する。 ストレスマネジメント体験をする。 ロールプレイングを体験する。	学校生活での様々な体験により引き起こされる感情を、自分でコントロールできることを実感する。 いろいろな場面を体験することにより、様々な感じ方や見方ができることに気づく。	怒りに任せず、冷静になるように、気持ちをコントロールすることの大切さを感じる。 人とのよい関係を築くためには、他者を思いやる気持ちが大切であることを感じる。	自分の話し方が人からどのように受けとめられているか想像することができる。 自分も他者も尊重した自己表現ができるようになる。	思いに任せる行為が、予期しない結果を招くことに気づかせることができたか。 感情に流されず、自分の気持ちをコントロールできることを実感させることができたか。
3次 (2時間)	構成的グループ・エンカウンターを活用して共感性を高める体験をする。 いじめや暴力に対して、傍観者にならない等よりよい選択ができ、それを行動に移すために話し合いをする。	人と人がつながる喜びを感じ、そうした思いがいじめや暴力に立ち向かう力となることを実感する。	自分を大切にすることが、相手を大切にすることにつながることを実感する。	自分も他者も共にかげがえのない存在であることを実感し、いじめの抑止に積極的に取り組もうとする。	自他のかけがえのなさを実感させることができたか。 相手のことを思いやる気持ちを持ち、行動に移そうという気持ちを持たせることができたか。

【先生の準備】・授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。

- ・生と死に関する様々なテーマについて、日頃から関連する情報等を収集し、考察しておく。
- ・現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定する等、事前事後の個別指導を充実させる。
- ・子ども一人ひとりを把握し、学級内の交友関係を掌握しておく。
- ・ソーシャルスキルを高める体験をしておく。
- ・自尊感情を高める体験をしておく。

目標構造図



(凡例) 感動(1次):「 」は指導の順路、「感動」は指導の観点が「感動の体験」、「(1次)」は学習活動が「1次」であることを示す。

指導略案

内 容	
事前	自己発見の体験をする。
1次 (2時間)	1 人間にはどんな感情があるか考える。 ・ 怒り、悲しみ、喜び等
	2 自分がどんな時にどんな気持ちになるか、どんな行動をとるか考える。 ・ うれしい時や悲しい時、腹が立った時自分はどんな行動をとるのか考える。
	3 感情の適切な表現について考える。 ・ 他人を困らせたり、傷つける行動について知る。
	4 自分の体験等からいじめとけんか、ふざけの違いを考える。 ・ 原因、対象、人数、感情、期間等の視点から考える。 ・ いじめが人を深く傷つけるものであることを理解する。
	5 学習・体験の振り返りをする。
2次 (3時間)	1 アサーション・トレーニング 「わたしの話し方はどんなタイプ？」 ・ 自分の話し方の特徴を知る。(いやなことの断り方、人への依頼等) ・ アサーティブな話し方(自他を尊重した自己表現)を理解する。
	2 ストレスマネジメント体験をする。 ・ 自分の感情を落ち着かせる方法について知る。(リラクゼーション、呼吸法等)
	3 ロールプレイングを体験する。 ・ 様々な場面を想定し、答え方を体験する。(腹が立った時、いやなことを押しつけられた時、いじめを見つけた時等)
	4 学習・体験の振り返りをする。
3次 (2時間)	1 構成的グループ・エンカウンターを活用して共感性を高める体験をする。 「ぼく、わたしのいいところ発見」 ・ 自分や友だちのいいところを見つめ、互いに伝え合う。 「わたしの大切な仲間へ」 ・ 仲間を大切に思う言葉を具体的に表現し、互いの心の交流を深める。
	2 いじめや暴力に対して、傍観者にならない等よりよい選択ができ、それを行動に移すために話し合いをする。
	3 学習・体験の振り返りをする。

振り返りカード(1次)

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	自分の怒りや悲しみが引き起こす自分の行動について考えよう。	
	いじめとけんかの違いについて考えよう。	
感性を育む	様々な感情のあらわし方について考えよう。	
	いじめが友だちの心を深く傷つけるものであるということについて考えよう。 みんなが「いじめを許さない」という気持ちを持つことの大切さについて考えよう。	
想像力の育成	自分勝手な行動がどれほど周りの人に迷惑をかけているかについて考えよう。	
	その場に合った感情の表現の仕方について考えよう。 いじめによって大切な命が奪われることもあるということについて考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

振り返りカード (2 次)

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	感情を自分でコントロールすることについて考えよう。	
	いろいろな場面の体験から、様々な感じ方や見方ができることについて考えよう。	
感性を育む	怒りの気持ちを持った場合、気持ちをコントロールすることの大切さについて考えよう。	
	人とのよい関係をつくるためにも、相手を思いやる気持ちを持つことが大切であることについて考えよう。	
想像力の育成	自分の話し方が人からどのように受けとめられているかについて考えよう。	
	自分も相手も大切にしたい自分の気持ちの伝え方について考えよう。	
全体を振り返っての感想 :		
先生から :		
家庭から :		

振り返りカード (3 次)

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	気持ちが通じ合う喜びを感じ、そうした気持ちが、いじめや暴力に立ち向かう力となることについて考えよう。	
感性を育む	自分を大切にすること、相手を大切にすることについて考えよう。	
想像力の育成	自分も相手もともにかけがえない存在であること、いじめを絶対に許さない気持ちを持つことについて考えよう。	
全体を振り返っての感想 :		
先生から :		
家庭から :		

授業用指導案例 自分を大切にすること(中学校)

【テーマ】 自分を大切にすること

【ねらい】 自分を愛し他者を尊重し、自己理解や他者理解を深め合いながら、心を伝え合う豊かな人間関係をつくる力を身につける。

【時間数】 全4時間

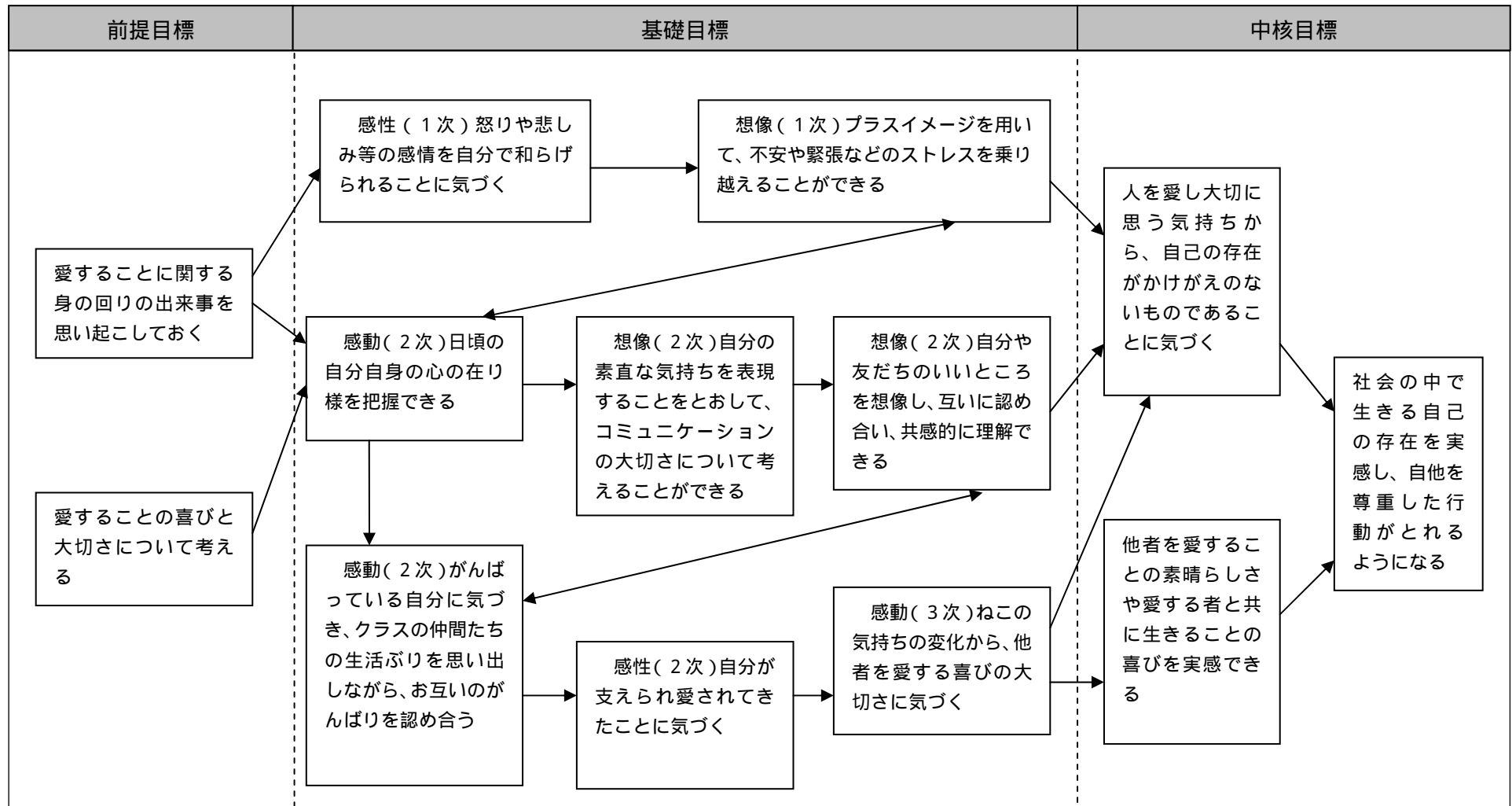
目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	愛することに関する教材(歌、詩、作品等)にふれる。	愛することの偉大さと素晴らしさにふれる体験をする。	愛することに関する身の回りの出来事を思い起こしておく。	愛することの喜びと大切さについて考える。	
1次 (1時間)	ストレスマネジメント体験をする。	一流のスポーツ選手もストレスを乗り越えるための様々な工夫をしていることを知る。	怒りや悲しみ等の感情を自分で和らげられることに気づく。	プラスイメージを用いて、不安や緊張等のストレスを乗り越えることができる。	不安や緊張をコントロールし、ストレスを自己管理する方法を身につけさせることができたか。
2次 (2時間)	自尊感情を高める体験をする。友だちとの関わりを振り返る体験をする。	日頃の自分自身の心の在り様を把握できる。がんばっている自分に気づき、クラスの仲間たちの生活ぶりを思い出しながら、お互いのがんばりを認め合う。	本音の交流ができる人間関係の大切さに気づく。自分が支えられ、愛されてきたことに気づく。	自分の素直な気持ちを表現することとおして、コミュニケーションの大切さについて考えることができる。自分や友だちのいいところを想像し、互いに認め合い、共感的に理解できる。	自他を認め合う体験とおして、自尊感情を高めさせることができたか。子どもたちに、自分や友だちのいいところやがんばっているところを見つけさせることができたか。
3次 (1時間)	愛することの大切さについて考える。 『100万回生きたねこ』(講談社)	ねこの気持ちの変化から、他者を愛する喜びの大切さに気づく。	人を愛し大切に思う気持ちから、自己の存在がかげがえのないものであることに気づく。自分を支えてくれた周りの人に対して感謝の気持ちを持つ。	他者を愛することの素晴らしさや愛する者と共に生きることの喜びを実感できる。	愛することの大切さに気づかせることができたか。

【先生の準備】・授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。

- ・現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定する等、事前事後の個別指導を充実させる。
- ・学級内の交友関係をよく把握しておく。
- ・教員が自己再発見の体験をしておく。
- ・教員自身が自尊感情を高める体験をしておく。
- ・実際の指導に当たっては、人を受け入れるということはどういうことかについても考えさせる場を設定する。

目標構造図



(凡例) 感性(1次):「 」は指導の順路、「感性」は指導の観点が「感性を育む」、「(1次)」は学習活動が「1次」であることを示す。

指導略案

内 容	
事前	愛することに関する教材(歌、詩、作品等)にふれておく。
1次(1時間)	<ol style="list-style-type: none"> 1 ストレスマネジメント体験をする。 ・セルフリラクゼーション、ペアリラクゼーション等のストレスを自己管理する方法について学ぶ。 2 学習・体験したことを振り返る。
2次(2時間)	<ol style="list-style-type: none"> 1 自尊感情を高める体験をする。 ・自分へ肯定的メッセージを送る。(「私は私が好きです。なぜなら・・・だからです。」) ・ペアで肯定的なメッセージを交換し合う。(「私は さんの なところが好きです。なぜなら・・・だからです。」)
	<ol style="list-style-type: none"> 2 友だちとの関わりを振り返る体験をする。 ・過去の自分が友だちから、(1)してもらったこと(2)お返しをしたこと(3)迷惑をかけたことについて考える。 3 学習・体験したことを振り返る。 ・お互いに話し合うことで、自分への気づきと他者理解を深める。
3次(1時間)	<ol style="list-style-type: none"> 1 愛することの大切さについて考える。 『100万回生きたねこ』(講談社) ・自分にとってのかけがえない存在は何かを考える。 ・ねこの気持ちの変化から、他者を愛する喜びや愛する者と共に生きることの喜びについて考える。 2 学習・体験したことを振り返る。

振り返りカード(1次)

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	ストレスを乗り越えるための様々な工夫について考えよう。	
感性を育む	怒りや悲しみ等の感情を自分で和らげられることについて考えよう。	
想像力の育成	プラスイメージを使ってストレスを乗り越えることについて考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

振り返りカード(2次)

振り返りカード		
年 組 名前()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	普段の自分自身の気持ちの持ち方について考えよう。	

感性を育む	普段の生活の中での自分や友だちのがんばりについて考えよう。	

想像力の育成	本音で話し合える人間関係について考えよう。	

想像力の育成	支えられ、愛されてきた自分自身について振り返ろう。	

コミュニケーションの大切さについて考えよう。		

自分や友だちのいいところを想像し、互いに認め合うことの大切さについて考えよう。		
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

振り返りカード(3次)

振り返りカード		
年 組 名前()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	ねこの気持ちの変化から、他者を愛する喜びの大切さについて考えよう。	

感性を育む	かけがえのない自分自身の存在について考えよう。	

想像力の育成	周りから支えられている自分について考えよう。	

他者を愛することの素晴らしさ、愛する者とともに生きることの喜びについて考えよう。		
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

授業用指導案例 命の大切さを実感させること (高等学校)

【テーマ】 命の大切さを実感させること

【ねらい】 死の悲しみや苦しみと向き合う人々の思いを受けとめ、困難な中でも強く生きようとする心にふれ、生きることを考える。

【時間数】 全5時間

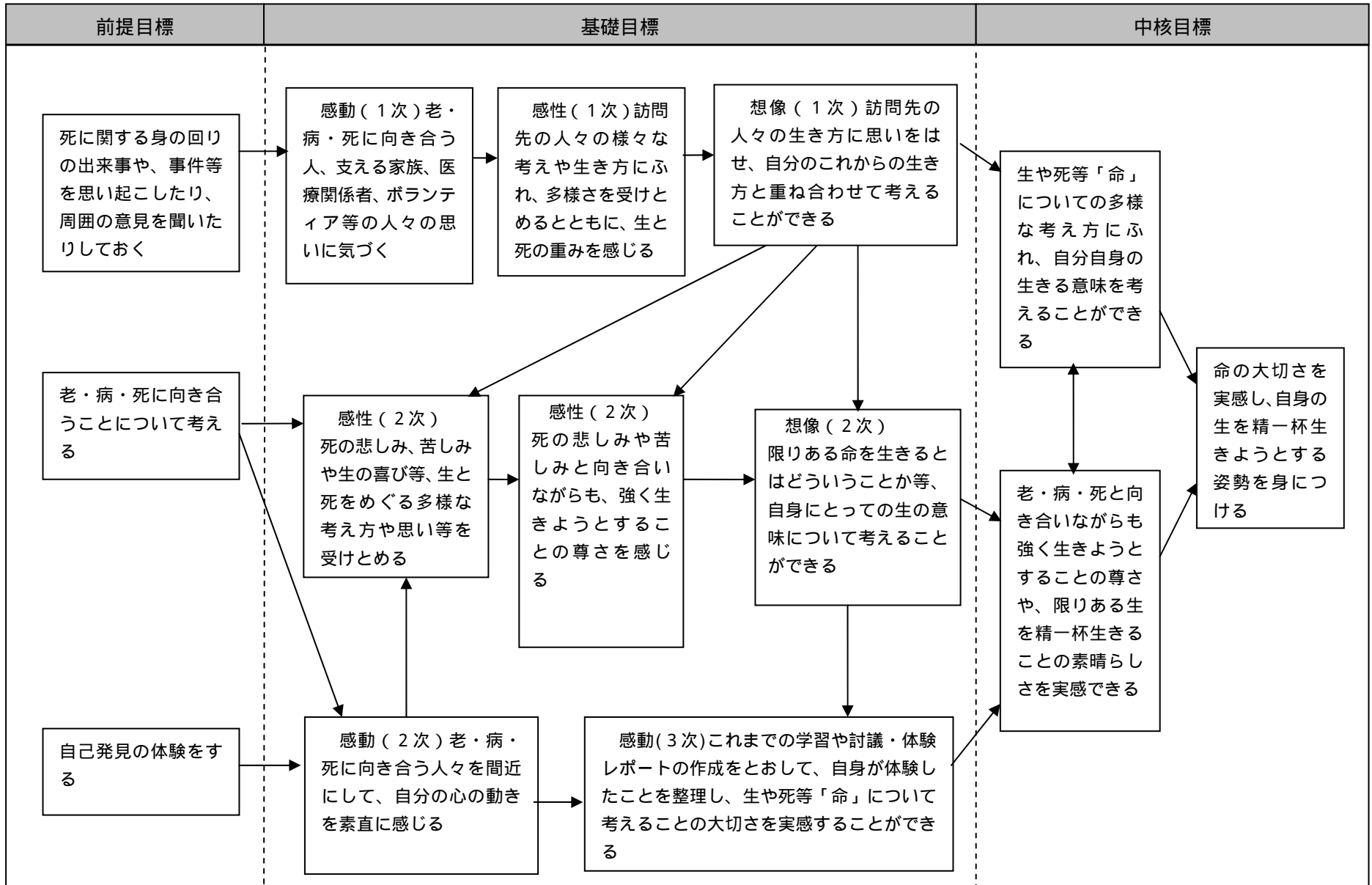
目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	自尊感情を高める体験をする。 生と死に関する様々なテーマについて関連する情報を調べる。	自己発見の体験をする。	死に関する身の回りの出来事や、事件等を思い起こしたり、周囲の意見を聞いたりしておく。	老・病・死に向き合うことについて考える。	
1次 (1時間)	老・病・死に関する自分のテーマを決め、訪問先(ホスピス等)について調べ理解を深めた後、連絡をとる。	老・病・死に向き合う人、支える家族、医療関係者、ボランティア等の人々の思いに気づく。	訪問先の人々の様々な考えや生き方にふれ、多様さを受けとめるとともに、生と死の重みを感じる。	訪問先の人々の生き方に思いをさせ、自分のこれからの生き方と重ね合わせて考えることができる。 訪問するために必要な準備について考え行動することができる。	個々の子どものテーマを振り返り下げるとともに、自身の生き方について真剣に考えさせることができたか。
2次 (2時間)	施設を訪問し、ボランティア活動やインタビューすること等とおして、人々の生き方や思いにふれる。	老・病・死に向き合う人々を身近にして、自分の心の動きを素直に感じる。	死の悲しみ、苦しみや生の喜び等、生と死をめぐる多様な考え方や思い等を受けとめる。 死の悲しみや苦しみと向き合いながらも、強く生きようとすることの尊さを感じる。	死の悲しみや苦しみによる心の痛みや悲嘆の深さを思いやり、命の重みについて考えることができる。 限りある命を生きたらはどういうことか等、自身にとっての生の意味について考えることができる。	死というものを見つめ、死について考えることの大切さを実感させることができたか。 自分も限りある生を生きる者として、老・病・死に向き合う人々と自身を重ね合わせて考えさせることができたか。
3次 (2時間)	討議や体験レポートの作成をおして、体験を振り返り、整理し、自分自身の生きる意味を考える。	討議や体験レポートの作成をおして、自身が体験したことを整理し、生や死等「命」について考えることの大切さを実感することができる。	生や死等「命」についての多様な考え方にふれ、死の悲しみや苦しみと向き合いながらも強く生きようとすることの尊さを感じる。 自分自身の生きる意味を考えることができる。	生や死についての考察をおして、困難な中でも、それに打ち勝とうと立ち向かう人々の思いを推し量ることができる。 限りある生を精一杯生きることの素晴らしさを実感することができる。	命の大切さを実感させることができたか。 自分自身の生きることを考えることができたか。

【先生の準備】・授業の中だけでなくすべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。

- ・生と死に関する様々なテーマについて、日頃から関連する情報等を収集し、考察しておく。
- ・関係施設と綿密な事前の打合せをする。
- ・現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、個別に話を聞く時間を設定する等、事前事後の個別指導を充実させる。
- ・子ども一人ひとりを把握し、学級内の交友関係を把握しておく。

目標構造図



（凡例） 感動（1次）：「 」は指導の順路、「感動」は指導の観点が「感動の体験」、「（1次）」は学習活動が「1次」であることを示す。

指導略案

	内 容
事前	自尊感情を高める体験をする。 生と死に関する様々なテーマについて関連する情報を調べる。
1次(1時間)	1 老・病・死に関する自分のテーマを決め、訪問先(ホスピス等)を検討する。 ・訪問先の人々の生き方に思いをさせ、自分のこれからの生き方と重ね合わせてテーマや訪問先を決定する。 2 訪問先とのアポイントメントをとる方法を検討する。 ・訪問するために必要な準備について考え行動ができるようにする。 ・訪問先について配慮すべきことやマナーについて確認する。
2次(2時間)	1 施設を訪問し、ボランティア活動やインタビューすること等とおして、人々の生き方や思いにふれる。 ・施設見学をする。 ・ボランティア体験活動をする。 ・入所者やその家族、医療関係者、ボランティア等との語らいなどを体験する。
3次(2時間)	1 グループ・クラス全体での討議・発表をおして、自身の体験を振り返り、整理する。 (テーマ) ・どのような体験をしたか、印象に残っている体験について ・訪問先の人々から受けとったメッセージ ・体験をしたことによって自分の中で変化したと感じられること 等 ----- 2 訪問先で出会った人々の思いにふれ、精一杯生きるとはどういうことか、自分自身の生きる意味について考え、体験レポートを作成する。

振り返りカード(1次)

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	老・病・死に向き合う人、支える家族、医療関係者、ボランティア等の人々の思いについて考えよう。	
感性を育む	訪問先の人々の様々な考えや生き方にふれ、多様さを受けとめるとともに、生と死の重みについて考えよう。	
想像力の育成	訪問先の人々の生き方に思いをさせ、自分のこれからの生き方と重ね合わせて考えよう。	
	訪問するために必要な準備について考え、行動することができたか。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

振り返りカード (2 次)

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	老・病・死に向き合う人々を間近にして、自分の心の動きを素直に感じることができたか。	
感性を育む	死の悲しみ、苦しみや生の喜び等、生と死をめぐる多様な考え方や思いをどう受けとめたか。	
	死の悲しみや苦しみと向き合いながらも、強く生きようとすることについて考えよう。	
想像力の育成	死の悲しみや苦しみによる心の痛みを思い、命の重みについて考えよう。	
	限りある命を生きるとはどういうことか等、自分自身にとっての生の意味について考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

振り返りカード (3 次)

振 り 返 り カ ー ド		
年 組 名 前 ()		
	学習・体験のめあて	自分の振り返り
感動の体験	討議や体験レポートの作成をとおして、自身が体験したことを整理し、生や死など「命」について考えよう。	
感性を育む	生や死など「命」についての多様な考え方にふれ、死の悲しみや苦しみと向き合うことについて考えよう。	
	自分自身の生きる意味を考えよう。	
想像力の育成	生や死について考え、困難な中でも、それに打ち勝とうと立ち向かう人々の思いを推し量ろう。	
	限りある生を精一杯生きることの素晴らしさについて考えよう。	
全体を振り返っての感想：		
先生から：		
家庭から：		

3 教員研修

3 教員研修

(1) 求められる研修内容について

命の大切さについて教員の伝えようとしていることが、子どもたちの心に響いていくためには、教員自身が命の大切さを実感し、一人の人間として与えられた命を生きていることを自覚していなければならない。そのためには、教員自身が自尊感情を高める体験をし、自己を再発見しておく必要がある。また、死に向き合う人々の生き方にふれることにより、命のかけがえのなさを感じ、生きることの意義を考えたり、犯罪被害者・遺族の声等を聞くことにより、かけがえのない人を失った悲しみや怒りにふれる体験をしておくことも必要である。

さらに、自分の考えや気持ちを相手に伝え、相手の気持ちを汲み取ったり思いを重ねるといった伝え合う力を高めることをとおして、教員自身が豊かな人間関係を築く力を身につけることも必要である。電子メールやチャット、掲示板等の新しいコミュニケーション手段について、問題点を把握するために、教員自身が擬似体験をしてその仕組みを理解したり、子どもたちの行動や考え、時には死生観にまでインターネット等による有害情報が強い影響を及ぼしていることに鑑み、インターネット等の利用に当たってのルール及びモラルやマナーを明確に理解し、指導力の向上を図っておくことも必要である。

(2) 教員研修例

以下の から の研修テーマに分けて、実際の具体的な研修例を用意した。

研修テーマ 自尊感情を高める

< >ここがあなたのいいところ (1時間 35分)

お互いのよいところや努力していることを伝え合うことで、自尊感情を高める研修

研修テーマ 自己再発見

< >私の人生の振り返り (1時間 45分)

人生を振り返る中での発見や、あるがままの人生を肯定的に受け入れる体験の研修

< >私のかけがえのない人 (2時間 35分)

これまでの人生でのかけがえのない人を振り返り、自己を見つめる研修

研修テーマ コミュニケーション能力を高める

< >自他を大切に自己表現能力を高める (1時間 5分)

攻撃的な表現や非主張的な表現を体験し、自他を大切に自己表現能力を高める研修

< >日常のコミュニケーション能力を高める (1時間 20分)

日常生活での人間関係におけるトラブル対処法をとおして、対人関係能力を高める研修

研修テーマ 情報モラル指導力を高める

< >インターネット上の有害情報等への対応 (3時間)

教員自身がインターネット上の有害情報の危険性を実感し、指導力の向上を図る研修

< >ノーテレビデー体験 (50分 + 1時間 10分)

「ノーテレビデー」の体験に基づき、各校の実態に応じた実施案を作成する研修

研修テーマ 死と向き合う人々や犯罪被害者・遺族から学ぶ

< >ターミナルケアに携わる人々の話を聞いて (1時間 35分)

死と向き合う人々の話を聞き、生きることの意義について考える研修

< >犯罪被害者・遺族の声を聞いて (2時間)

犯罪被害者・遺族の声を聞いて、命の大切さ、命の危機に対する認識を持つ研修

研修テーマ 自尊感情を高める

本テーマのねらい

<ul style="list-style-type: none"> ・プラスのメッセージを交換し合うグループ体験をとおして、自尊感情の高まりを実感する。 ・自分も他者も大切な命を持つ存在であること、命を大切にするにはまず自尊感情を高めることが大切であること等を実感する。
--

内容

< >ここがあなたのいいところ	
ねらい: グループメンバーのよいところや努力していることを伝え合うことで、お互いのよいところを認め合い、自尊感情を高める。	
所要時間: 1時間35分	
準備物: いす、机、筆記用具、タイマー、ワークシート	
内 容	
活動内容	留意点・活動の意図
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 ねらいと留意点について説明する。</p> <p>(1) 「この研修のねらいは、自分も他者も大切な命を持つ存在であること、命を大切にするにはまず自尊感情を高めることが大切であること等を、先生方ご自身が実感されることです。」</p> <p>(2) 「なお実習に際しては個人的な内容も多く出ますので、プライバシーへの配慮をお願いいたします。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分も他者も大切な命を持つ存在 ・命を大切にするには自尊感情を高めることが大切 ・教員自身が実感することが大切 <p>個人情報の保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p>
<p>00:02</p> <p>2 誕生日順のグループ分け(注¹)により、4～5人のグループをつくる。</p> <p>(1) 「まずは、大きな輪になって、いすに座ってください。」</p> <p>(2) 「今から、1月1日生まれから、12月31日生まれまで順番になるように座席を移動してください。ただし、無言でやりとりをしてください。では、始めてください。」</p> <p>(3) 「1月1日生まれから順番に1、2、3、4と番号を言ってください。その4人で一つのグループをつくります。」</p>	<p>全員が輪になって、無言で誕生日順(1月1日生まれ 12月31日生まれ)に並んでいく。特定のグループでかたまらないように誕生日順にグループ分けをする。</p> <p>参加者は無言でやりとりをしなければならないので、ゼスチャーで意思の疎通を図ることになり、場の雰囲気のをやかにさせる効果がある。</p> <p>基本は4人グループにしているが、人数が余れば、5人グループをつくる。</p>
<p>00:12</p> <p>3 グループで輪になり、「私の好きなこと(趣味)」について発表し合う。</p> <p>(1) 「今決まったグループで、自分の好きなことや趣味について、発表し合ってください。</p> <p>例えば、『週末に散歩することが趣味の(名前)です。』のように言います。そして、一通り発表が終われば、グループで互</p>	<p>グループのメンバーが互いを知り合うための実習として、まず「私の好きなこと(趣味)」について、グループ内で発表し合う(一人2～3分程度で)。一通り発表が終われば、グループで互いの好きなことや趣味について質問をし合う。</p> <p>メンバーが実習をイメージしやすいように例をあげて説明する。</p>

<p>いの好きなことや趣味について質問をし合ってください。では、まず発表する順番を決めてください。」</p> <p>(2) 「それでは、一人2～3分程度で、質問の時間も含め、全体で15分程度、話し合ってください。終了時間になればこちらから合図を出します。」</p>	<p>グループの主体性を尊重するため、発表する順番は各グループで決めてもらう。</p>
<p>00:30</p> <p>4 グループで気づいたことを発表し合う。 「今話し合った中で、気づいたことや感想等について各グループで3分間話し合ってください。」</p>	<p>この実習で、気がついたことや感想等を交換し合うことで、各自の本音を交流し、次のステップの実習へと結びつける。 意見が出にくいグループへは、「気づいたことはどんな小さなことでも結構です。」のように発言を促す。</p>
<p>00:35</p> <p>5 自分のよさや日ごろから努力していることについて「私は私が好きです。なぜならだからです。」と発言し合う。</p> <p>(1) 「次の体験は、自分自身のよさや努力点を振り返る体験です。」</p> <p>(2) 「『私は私が好きです。なぜならだからです。』のように、自分が自分を好きな理由を発表していただきます。例えば『私は私が好きです。なぜなら子どもが大好きだからです。』のように言います。」</p> <p>(3) 「それでは、各グループで、3周してください。」</p>	<p>各自で自分の今を振り返り、自分自身のいいところを見直すことで、教員自身が自尊感情を高める体験をする。</p> <p>メンバーがイメージしやすいように例を挙げて説明する。</p> <p>なかなか自分のよさに気づかない場合、さらにいくつかの例を挙げ、一人3つ程度はよさを言えるように進める。</p>
<p>00:45</p> <p>6 グループで気づいたことを発表し合う。 「今話し合った中で、気づいたことや感想等について各グループで3分間話し合ってください。」</p>	<p>この体験で、気がついたことや感想等を交換し合うことで、各自の本音を交流し、「7 ここがあなたのいいところ」の実習へと結びつける。 意見が出にくいグループへは、「気づかれたことはどんな小さなことでも結構です。」のようにアドバイスする。</p>
<p>00:50</p> <p>7 グループでの話し合いで感じたことからワークシート「ここがあなたのいいところ」にグループメンバーのいいところや努力している点を記入する。</p> <p>(1) 「今からワークシート『ここがあなたのいいところ』(資料1)を配りますから、各グループのメンバーのよさ等、素敵だなと思うところを記入してください。」</p>	<p>自分自身のいいところ探しに続いて、グループメンバーのいいところや努力している点をワークシートに記入する。</p>

<p>(2) 「例えば、『家族とのふれあいをとても大事にされておられるんですね。それって素敵ですね。』のように記入していきます。全体で12分間時間をとります。1人分書ければ隣の人にワークシートを順次送っていただきます。では記入してください。」</p> <p>01:05 8 ワークシート「ここがあなたのいいところ」を交換し合う。 「だいたい記入も終わったようですね。では、自分宛てのワークシートを受け取って目をとおしてください。」</p> <p>01:10 9 グループで気づいたことを発表し合う。 「今話し合った中で、気づいたことや感想等について各グループで話し合ってください。」</p> <p>01:15 10 全体で、気づいたことを発表し合う。 「研修全体をとおして、気づいたことや感想等について発表してください。」</p> <p>01:30 11 まとめをする。 (1) 「本研修のねらいは、『ここがあなたのいいところ』等の実習をとおして、自分も他者も大切な命を持つ存在であることや、命を大切にすることを前提として、まず自尊感情を高めることが大切であることを先生方ご自身に実感していただくことでした。自尊感情が低い子どもへの関わり方の一端を体験していただいたと思いますが、いかがだったでしょうか。」 (2) 「なお、本日実習の中で出てきました個人の情報等につきましては、この場限りとし、プライバシーへの配慮をお願いいたします。」 (3) 「本日本験していただいた研修内容を子どもたちへ実践する際には、子どもたちの発達段階や実態に応じた体験活動になるようにすること。カリキュラムへの位置づけをすること。教員自身が本音を語ってモデルを示すこと等、十分に配慮する必要がありますが、ぜひ本研修の体験を生かしていただき、子どもたちに、自分も友だちも大切な命を持つ存在であることを実感</p>	<p>グループでの話し合いで感じたことや日頃の様子からグループメンバーのいいところや努力している点に気づく。 ワークシートに記入する内容が思いつかない場合は、後回しで記入してもよい。</p> <p>グループ内でワークシートを交換し合い、シートに目をとおして、グループメンバーから送られた自分自身のよさを確認する。</p> <p>グループ活動で気がついたことや新しい発見をグループ内で発表し合う。 グループメンバーから自分に送られたプラスのメッセージを受け取ることで、「自分のよさは なんだ!」のように、まず教員自身が自尊感情の高まりを実感する。</p> <p>気がついたことや自分自身の新しい発見を全体で発表し合うことで、個人やグループの気づきを共有する。</p> <p>実践に向けての心構えを持つ。</p> <p>個人情報保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p> <p>子どもへ指導する際の留意点^(注2)について注意を喚起する。</p>
--	--

させ、自尊感情を育てた上で生きる喜びを実感させていただきたいと思います。本日はご多忙の中ありがとうございました。」	
01:35	

(注1) グループ分けについて

グループ分けについては、様々な方法がある。まず、何人のグループをいくつつくるのか。その男女比の構成はどうするのか。グループリーダーはあらかじめ決めておくのか等、事前に実習のねらいと照らし合わせて検討しておく必要がある。

ここでは、実習のねらいから、1グループの人数を決め、グループリーダーについても自然発生的に決めるようにしている。

グループ分けにはいろいろな方法があるが、ここでは「誕生日順」(他に「通勤距離順」「今朝の起床時刻順」等も考えられる)を紹介した。具体的な進行については、「活動内容」の展開例を参考にしてほしい。

研修参加者が多く、一人のリーダーでコントロールするのが難しい場合、サブリーダーをつけることが望ましい。

(注2) 子どもへ指導する際の留意点

この研修は命の大切さを実感させる教育活動の前提となる自尊感情を高めるためのもので、小学校低学年から高等学校までどの段階でも実施可能である。

教員自身が、子どもたちが普段見過ごしているような子どもたちの「いいところ探し」をする。子どもたちの実態に応じた体験活動になるようにする。

- ・和やかにかつ真剣に取り組むことができるよう事前準備や導入を工夫する。
- ・騒がしいクラスには導入時にゲーム性の高いものを取り入れたり、誰かが話している時は黙って聞くといったルールの徹底を図る。
- ・クラスがばらばらであったり問題を抱えている子どもがいる場合は、教員がそのような子どもたちの良さを具体的に複数例示する。
- ・実習中は、絶えず子ども一人ひとりの動きを観察しながら、雰囲気や溶け込みにくい子どもがあればその子どもに合った言葉かけをする等、個別のフォローをする。
- ・自分の思いのままに行動することが多い子どもには、自分の言動が他者へ迷惑をかけなかったかどうか等を振り返らせたりして、自省自戒の場を設定する。

カリキュラムへの位置づけについては、例えば道徳や特別活動、総合的な学習の時間等に位置づける。特定の時間の実践だけで終わるのではなく、日常の学級経営の中で、自他の「いいところ探し」を行う。

(資料1) ワークシート「ここがあなたのいいところ」

_____ さんへ

_____	()より
_____	()より
_____	()より

【参考・引用文献】

- ・ 國分康孝 (編) 『構成的グループ・エンカウンター』 誠信書房 1992
- ・ 梶田勲一 『自己を育てる』 金子書房 1996
- ・ 住本克彦・古田猛志 「教職員のカウンセリング研修における構成的グループ・エンカウンターの実用に関する一考察」 兵庫教育大学発達心理臨床研究第十巻 2004
- ・ 上地安昭 (編著) 『教師カウンセラー』 金子書房 2005

研修テーマ 自己再発見

本テーマのねらい

- ・「私の人生の振り返り」、「私のかげがえのない人」の実習をとおして、自己を再発見することから、命の大切さを実感する体験をする。
- ・これまでの自分の人生を振り返り、その中での気づきや、自分自身の人生をあるがままに受け入れることを体験する。

内容

< >私の人生の振り返り	
ね ら い : 人生を振り返り、その中での発見や、あるがままの人生を肯定的に受け入れることを体験する。	
所 要 時 間 : 1時間45分	
準 備 物 : いす、机、筆記用具、タイマー、ワークシート	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	
(注) 印は留意点、 印は活動の意図	
<p>00:00</p> <p>1 ねらいと留意点について説明する。</p> <p>(1) 「この研修のねらいは、先生方ご自身が人生を振り返り、その中での発見や、あるがままの人生を肯定的に受け入れる体験をしていただくことです。」</p> <p>(2) 「なお実習に際しては個人的な内容も多く出ます。実習で出ました内容についてはこの場限りとして、秘密の厳守をお願いします。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の命に関する体験やこれまでの人生を振り返ること ・その中での気づきや自分自身の人生の受け入れ等を、教員自身が体験すること <p>個人情報保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p>
<p>00:02</p> <p>2 通勤距離順のグループ分け^(注3)により、3～4人のグループをつくる。</p> <p>(1) 「まずは、大きな輪になって、いすに座ってください。」</p> <p>(2) 「今から、短い距離から長い距離へと通勤距離順に座ってもらいます。ただし、無言(ゼスチャー等)でやりとりをしてください。では、始めてください。」</p> <p>(3) 「短い距離から順番に、1、2、3と番号を言ってください。その3人が一つのグループです。(人数が余れば4人グループをつくる)」</p>	<p>日頃交流のなかった人とも実習できるように通勤距離順にグループ分けをする。</p> <p>全員が輪になって、無言で通勤距離順(短い距離から長い距離順)に並んでいく。参加者は無言でやりとりをするため、ゼスチャーで意思の疎通を図ることになり、場の雰囲気や和やかにさせる効果がある。基本は3人グループにしているが、人数が余れば、4人グループをつくってもよい。</p>
<p>00:12</p> <p>3 グループで輪になって「自己紹介・私の大切な時間」について話し合う。</p> <p>(1) 「今決まったグループで、『自己紹介・私の大切な時間』について発表し合ってください。例えば『私の名前は です。わたしの大切な時間は、入浴時間です。一人で風呂にはいり、ボーっとしている時間が</p>	<p>グループのメンバーが互いを知り合うための実習として、まず「私の大切な時間」(1日、あるいは1週間のうちで自分が一番大切にしている時間)について、グループ内で発表し合う(一人2～3分程度で)。一通り発表が終われば、グループで互いの好きなことや趣味</p>

<p>一番大切です。』のようにします。そして、一通り発表が終われば、グループで互いの『私の大切な時間』について質問をし合ってください。では、まず発表する順番を決めてください。」</p> <p>(2) 「それでは、一人2～3分程度で、最後の質問時間も含めて、全体で15分程度話し合ってください。終了時間になればこちらから合図を出します。」</p>	<p>について質問し合う。 メンバーが実習をイメージしやすいように例を挙げて説明する。 グループの主体性を尊重するため、発表する順番は、各グループで決めてもらう。</p>
<p>00:30</p> <p>4 グループで気づいたことを話し合う。 「今話し合った中で、気づいたことや感想等について各グループで3分間話し合ってください。」</p>	<p>この実習で、気がついたことや感想等を交換し合うことで、各自の本音を交流し、次のステップの実習へと結びつける。 意見が出にくいグループへは、「気づいたことはどんな小さなことでも結構です。」のように発言を促す。</p>
<p>00:35</p> <p>5 ワークシート「私の人生の振り返り」^(資料2)に記入する。 (1) 「ワークシートの例を参考にして、ワークシートの横線に出生から今までの年齢をふってください。それぞれの年齢の自分を思い出しながら、その時々嬉しかったことあるいはつらかったことを、例のように1本の折れ線グラフで表してください。」 (2) 「その時にどんなことがあったか、大きな出来事にタイトルをつけます。嬉しかったことあるいはつらかったことを思い出して記入してください。」</p>	<p>自分の出生から今までを思い出しワークシートに記入する。 ワークシートに記入することで各自の人生を振り返る体験をする。</p> <p>自分自身の人生の大きな出来事にタイトルをつけるが、タイトルについては簡潔につけるようにする。</p>
<p>00:55</p> <p>6 タイトルをとおして「私の人生の振り返り」をグループ内で発表し合う。 「自分の人生の大きな出来事にタイトルをつけましたが、そのタイトルごとに説明をしてください。」</p>	<p>ワークシート「私の人生の振り返り」を指し示し、自分の人生を振り返りながらグループ内で発表し合う。 他者の命や人生にもふれ、自他の命や人生についても考える。</p>
<p>01:15</p> <p>7 グループで気づいたことを話し合う。 「今話し合った中で、気づいたことや感想等について各グループで話し合ってください。」</p>	<p>この体験で、気がついたことや感想等を交換し合うことで、各自の本音を交流し合う。 意見が出にくいグループへは、「気づいたことはどんな小さなことでも結構です。」のように発言を促す。</p>
<p>01:25</p> <p>8 全体で、気づいたことを発表し合う。 (1) 「研修全体をとおして、気づいたことや感想等について発表してください。」 (2) 「つらかったことの方が多かった人もい</p>	<p>気がついたことや自分自身の新しい発見を全体で発表し合うことで、個人やグループの気づきを共有する。</p> <p>つらかったことが多いと思っている人への言</p>

たかかもしれません。人生は、嬉しいことばかりではありません。つらかったことが多い場合でも今あなたがここに存在することこそが、つらかったことに耐え、乗り越えてきたことの証しです。自分の力を再確認し、あるがままの今の自分を認めることが大切です。また、これからどういうことが起ころうともそれを乗り越えることができるはずだという確信を持てることが大事です。」

01:40

9 まとめをする。

(1) 「本研修のねらいは、先生方ご自身が人生を振り返り、その中での発見や、あるがままの人生を肯定的に受け入れる体験をしていただくことでした。」

「この研修をとおして、人生にはいろいろなことがあるが、今生きていることが素晴らしいことであると感じていただけましたでしょうか。先生方がそう感じられることが、子どもたちに自分の人生を肯定的にとらえさせるためのヒントになると思います。いかがだったでしょうか。」

(2) 「なお、本日実習の中で出てきました個人の情報等につきましては、この場限りとし、秘密の厳守をお願いいたします。」

(3) 「本日体験していただいた研修内容を子どもたちへ実践する際には、子どもたちの発達段階や実態に応じた体験活動になるようにすること。カリキュラムへの位置づけをすること。教員自身が本音を語ってモデルを示すこと。自分の人生を肯定的にとらえられるように個別の支援をすること等、十分に配慮する必要がありますが、ぜひ本研修の体験を生かしていただき、子どもたちに自己理解や他者理解、自己再発見の体験をとおして、自分も友だちも大切な存在であることを実感させ、自尊感情を育てた上で、生きる喜びを実感させていたきたいと思います。本日はご多忙の中ありがとうございました。」

01:45

葉かけとして自分への勇気づけのメッセージを送るように促す。自分自身の人生と向き合い、それをあるがままに受け入れることができるようにする。

実践に向けての心構えを持つ。

個人情報の保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。

子どもへ指導する際の留意点^(注4)について注意を喚起する。

(注3) グループ分けについて

グループ分けについては、様々な方法がある。まず、何人のグループをいくつつくるのか。その男女比の構成はどうするのか。グループリーダーはあらかじめ決めておくのか等、事前に実習のねらいと照らし合わせて検討しておく必要がある。

ここでは、実習のねらいから、1グループの人数を決め、グループリーダーについても自然発生的に決めるようにしている。

グループ分けの手法についてもいろいろな方法があるが、ここでは「通勤距離順」(他に「誕生日順」「今朝の起床時刻順」等も考えられる)を紹介した。具体的な進行については、「体験内容」の展開例を参考にしてほしい。

研修参加者が多く、一人のリーダーでコントロールするのが難しい場合、サブリーダーをつけることが望ましい。

(注4) 子どもへ指導する際の留意点

学習体験を「私の成長の足あと」「自分史づくり」「私の年表づくり」とし、小学校中学年くらいから高等学校までの実施が可能である。

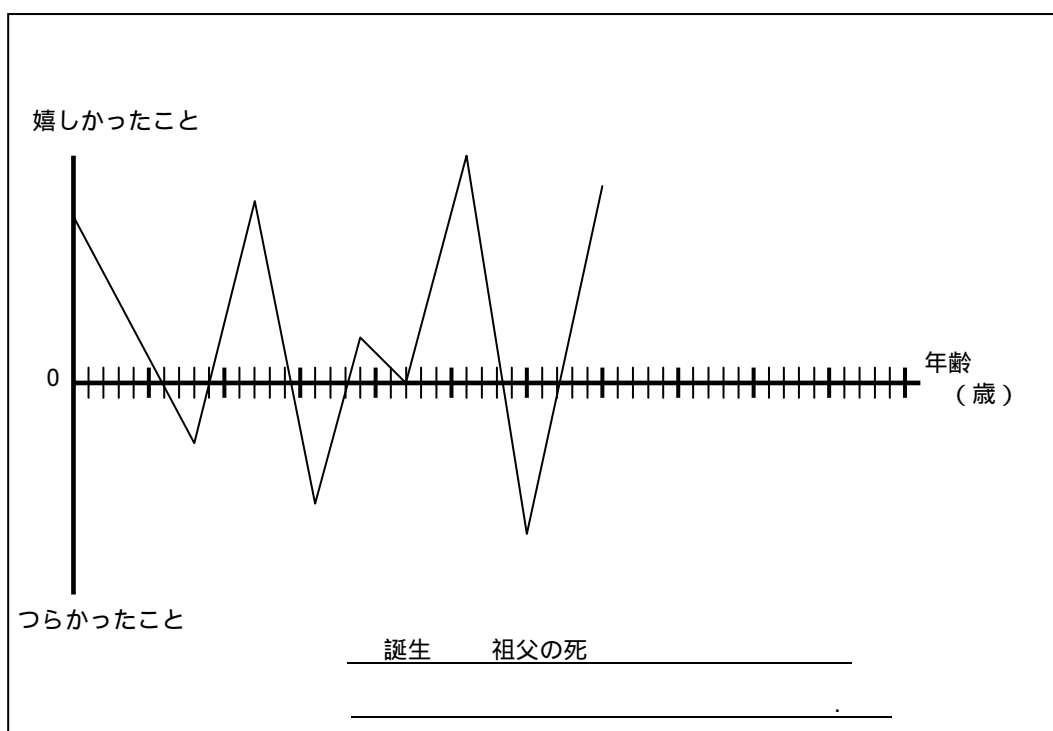
子どもたちの実態に応じた体験活動になるようにする。

- ・ 真剣に取り組むことができるよう事前の準備や導入を工夫する。
- ・ 真剣に取り組む雰囲気がないクラスでは、教員自身がまず「私の人生の振り返り」をとおして自己を語る中で真剣に取り組む雰囲気を醸成し、誰かが話している時は黙って聞くというルールを徹底を図る。
- ・ 実習中は、絶えず子ども一人ひとりの動きを観察しながら、雰囲気に溶け込みにくい子どもがあればその子どもに合った言葉かけをする等、個別のフォローをする。

つらい出来事が多い子どもには、今元気に生きていることが大切なことで、これからも勇気を持って生きることを促す。また、これからどういうことが起ころうともそれを乗り越えることができるという思いを持たせるようにする。

カリキュラムへの位置づけについては、例えば道徳や特別活動、総合的な学習の時間等に位置づける。

(資料2) ワークシート「私の人生の振り返り」(例)



【参考・引用文献】

- ・ 河村茂雄 『心のライフライン』誠信書房 2000
- ・ 富永良喜 「ストレス・マネジメント」藤森和美(編著)『学校トラウマと子どもの心のケア 実践編』誠信書房 2005

内容

< >私のかけがえのない人	
ね ら い : これまでの人生でのかけがえのない人を振り返り、自己を見つめる体験をする。	
所要時間 : 2時間35分	
準備物 : いす、机、筆記用具、タイマー、ワークシート	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 ねらいと留意点について説明する。</p> <p>(1) 「この研修のねらいは、先生方ご自身がこれまでの人生でのかけがえのない人を振り返り、自己を見つめる体験をしていただくことです。」</p> <p>(2) 「なお実習に際しては個人的な内容が多く出ます。実習で出ました内容についてはこの場限りとして、秘密の厳守をお願いします。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の命に関する体験やこれまでの人生を振り返ること ・その中での気づきや自分自身の人生の受け入れ等を、教員自身が体験すること <p>個人情報保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p>
<p>00:02</p> <p>2 通勤距離順のグループ分け(注5)により、3～4人のグループをつくる。</p> <p>(1) 「まずは、大きな輪になって、いすに座ってください。」</p> <p>(2) 「皆さんの通勤距離をだいたい結構ですから、思い浮かべてください。」</p> <p>(3) 「今から、短い距離から長い距離へと通勤距離順に座ってもらいます。ただし、無言(ゼスチャー等)でやりとりをしてください。では、始めてください。」</p> <p>(4) 「短い距離から順番に、1、2、3と番号を言ってください。その3人が一つのグループです。(人数が余れば4人グループをつくる)」</p>	<p>日頃交流のなかった人とも実習できるように通勤距離順にグループ分けをする。</p> <p>全員が輪になって、無言で通勤距離順(短い距離から長い距離順)に並んでいく。</p> <p>参加者は無言でやりとりをするため、ゼスチャーで意思の疎通を図ることになり、場の雰囲気をややかにさせる効果がある。</p> <p>基本は3人グループにしているが、人数が余れば、4人グループをつくる。</p>
<p>00:12</p> <p>3 グループで輪になって「自己紹介・私の大切な時間」について発表し合う。</p> <p>(1) 「今決まったグループ内で、『自己紹介・私の大切な時間』について発表し合ってください。例えば『私の名前は です。わたしの大切な時間は、入浴時間です。一人でお風呂にはいり、ボーっとしている時間が一番大切です。』のようにしてください。そして、一通り発表が終われば、グループで互いの『私の大切な時間』について質問をし合ってください。では、まず発表する</p>	<p>グループのメンバーが互いを知り合うための実習として、まず「私の大切な時間」(1日、あるいは1週間のうちで自分が一番大切にしている時間)について、グループ内で発表し合う(一人2～3分程度で)。一通り発表が終われば、グループで互いの好きなことや趣味について質問し合う。</p> <p>メンバーが実習をイメージしやすいように例を挙げて説明する。</p> <p>グループの主体性を尊重するため、発表する順番は、各グループで決めてもらう。</p>

<p>順番を決めてください。」</p>	
<p>(2) 「それでは、一人2～3分程度で、最後の質問時間も含めて、全体で15分程度、話し合ってください。終了時間になればこちらから合図を出します。」</p>	
<p>00:30</p>	
<p>4 グループで気づいたことを発表し合う。 「今話し合った中で、気づいたことや感想等について各グループで3分間話し合ってください。」</p>	<p>この実習で、気がついたことや感想等を交換し合うことで、各自の今、ここでの気づきを交換し、次のステップの実習へと結びつける。意見が出にくいグループへは、「気づいたことはどんな小さなことでも結構です。」のように発言を促す。</p>
<p>00:35</p>	
<p>休憩10分</p>	
<p>00:45</p>	
<p>5 「私の人生(命)を支えてくれたかけがえのない人」について思い起こし、ワークシート(資料3-1)に記入する。 (1) 「では、『私のかけがえのない人』の体験を始めます。この体験では、自分のこれまでの人生にとって大切だと思う人を思い出し、その人と自分はどんな関係、つながりがあったかを考えます。例えば、私の場合、かけがえのない人は さんです。」 (2) 「ではまず、楽な姿勢で座ってください。そして、よかったら軽く目を閉じてください。」 「それでは、自分の人生を振り返って、大切だと思う人を一人選んでください。」 (3) 「その『お世話になった』あるいは『迷惑をかけた』人に対して、『お返しをしたこと』を思い出して、ワークシートに記入してください。」</p>	<p>子どもたちへ実施の際にはワークシート(資料3-2)を用いる。 私を支えてくれたかけがえのない人を、理由も含めて具体的に自己開示し、参加者がワークシートに書き込みやすくする。 自分自身の人生で大切だと思う人を思い浮かべる。 各自で、その人に「お世話になったこと」「迷惑をかけたこと」「お返しをしたこと」を思い出す。 思い浮かばない人には、家族や、恩師、友人等の例をあげる(ただし、発想を限定しないように留意する) 自分の人生が周りの人の支えで成り立っていることを振り返り、それに応えてこれからの人生をよりよく生きることについても考える。</p>
<p>01:45</p>	
<p>6 「私のかけがえのない人」を発表し合う。 (1) 「今記入したワークシートを見ながら各グループで『私のかけがえのない人』、その人に『お世話になったこと』『迷惑をかけたこと』『お返しをしたこと』を発表してください。」 (2) 「発表しにくいことについては無理に発表しないようにしてください。」</p>	<p>参加者に心情を語ってもらう場合は、発言を強要することにならないように配慮する。</p>

<p>02:05</p> <p>7 グループで気づいたことを発表し合う。 「今話し合った中で、気づいたことや感想等について各グループで、話し合ってください。」</p>	<p>グループで発表し合うことで、他者の人生にもふれ、自他の人生について考える。自分の人生を振り返りながらグループ内で発表し合う。 この体験で、気がついたことや感想等を交換し合うことで、各自の今、ここでの気づきを交換し合う。 意見が出にくいグループへは、「気づいたことはどんな小さなことでも結構です。」のように発言を促す。</p>
<p>02:15</p> <p>8 全体で、気づいたことを発表し合う。 「研修全体をとおして、気づいたことや感じたことを発表してください。」</p>	<p>気がついたことや自分自身の新しい発見を全体で発表し合うことで、個人やグループの気づきを共有する。</p>
<p>02:30</p> <p>9 まとめをする。 (1) 「本研修のねらいは、先生方ご自身がこれまでの人生でのかけがえのない人を振り返り、自己を見つめる体験をしていただくことでした。」 「この研修をとおして、自分の人生が周りの人々の支えにより成り立っていることを子どもたちに気づかせるためのヒントをつかんでいただけたと思います。いかがでしょうか。」 (2) 「なお、本日実習の中で出てきました個人の情報等につきましては、この場限りとし、秘密の厳守をお願いいたします。」 (3) 「本日体験していただいた研修内容を子どもたちへ実践する際には、子どもたちの発達段階や実態に応じた体験活動になるようにすること。カリキュラムへの位置づけをすること。教員自身が本音を語ってモデルを示すこと。自分の人生を肯定的にとらえられるように個別の支援をすること等、十分に配慮する必要がありますが、ぜひ本研修の体験を生かしていただき、子どもたちに自己理解や他者理解、自己発見の体験をとおして、自分も友だちも大切な命を持つ存在であることを実感させ、生きる喜びを実感させていただきたいと思います。本日はご多忙の中ありがとうございます。」</p>	<p>実践に向けての心構えを持つ。</p> <p>個人情報保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p> <p>子どもへ指導する際の留意点^(注6)について注意を喚起する。</p>
<p>02:35</p>	

(注5) グループ分けについて

グループ分けについては、様々な方法がある。まず、何人のグループをいくつつくるのか。その男女比の構成はどうするのか。グループリーダーはあらかじめ決めておくのか等、事前に実習のねらいと照らし合わせて検討しておく必要がある。

ここでは、実習のねらいから、1グループの人数を決め、グループリーダーについても自然発生的に決めるようにしている。

グループ分けの手法についてもいろいろな方法があるが、ここでは「通勤距離順」(他に「誕生日順」「今朝の起床時刻順」等も考えられる)を紹介した。具体的な進行については、「体験内容」の展開例を参考にしてほしい。

研修参加者が多く、一人のリーダーでコントロールするのが難しい場合、サブリーダーをつけることが望ましい。

(注6) 子どもへ指導する際の留意点

学習体験を「私を支えてくれた人」とし、小学校高学年くらいから高等学校までの実施が可能である。

子どもたちの実態に応じた体験活動になるようにする。

- ・ 真剣に取り組むことができるよう事前の準備や導入を工夫する。
- ・ 真剣に取り組む雰囲気がないクラスでは、教員自身がまず「私の人生(命)を支えてくれたかけがえのない人」をとおして自己を語る中で真剣に取り組む雰囲気を醸成し、誰かが話している時は黙って聞くといったルールの徹底を図る。
- ・ 実習中は、絶えず子ども一人ひとりの動きを観察しながら、雰囲気に溶け込みにくい子どもがあればその子どもに合った言葉かけをする等、個別のフォローをする。

後悔の思いを抱く子どもには、その思いを大事にすることが新たな行動への出発点となることを伝える。カリキュラムへの位置づけについては、例えば道徳や特別活動、総合的な学習の時間等に位置づける。

(資料3-1)

「私のかげがえのない人」
<教員研修用ワークシート>

「私の人生(命)を支えてくれたかけがえのない人」

- 1 あなたにとってかけがえのない人はだれですか？

- 2 そのかけがえのない人について、心に残っているできごとを記入してください。

(1) その人に「お世話になったことや迷惑をかけたこと」はどんなことがありますか。

- (2) その「お世話になった」あるいは「迷惑をかけた」人に、「お返しをしたこと」はありますか？

ア、ある イ、ない

「ある」と答えた人は、どんなお返しをしましたか？

上のことを思い出してみ、あなたはどんな感想を持ちましたか？

(資料3-2)

「私を支えてくれた人」
<子ども用ワークシート>

「私の人生(命)を支えてくれたかけがえのない人」

- 1 あなたにとってかけがえのない人はだれ？(母親・父親・きょうだい・友だち・先生など)

かけがえのない人： _____

- 2 そのかけがえのない人について、心に残っている出来事を下の質問にそって、記入してください。

(1) その人に「お世話になったことや迷惑をかけたこと」はどんなことがありますか。

どんなことでしたか？ ()

いつごろのことでしたか？ ()

どこでのことでしたか？ ()

どうなりましたか？ ()

(2) その「お世話になった」あるいは「迷惑をかけた」人に、「お返しをしたこと」はありますか？

ア、ある イ、ない

アに 印をつけた人

どんなお返しをしましたか？ ()

いつごろのことでしたか？ ()

どこでのことでしたか？ ()

どうなりましたか？ ()

- 3 上に書いた2つのことを思い出してみ、あなたはどんな感想をもちましたか？

(1) あなたにとって、そのかけがえのない人はどんな人であったと思いますか？ ()

(2) 逆に、そのかけがえのない人にとって、あなたはどんな人であったと思いますか？ ()

(3) その他、感じたこと、考えたことはありますか？ ()

【参考・引用文献】

- ・ 飯野哲朗(編著)『思いやりを育てる内観エクササイズ』図書文化社 2005

研修テーマ コミュニケーション能力を高める

本テーマのねらい

- ・自分の気持ちを的確に表現できるようなコミュニケーション能力や対人関係能力を高めることをとおして、互いに支え合っていることを実感する。
- ・日常生活を振り返り、人間関係におけるトラブルへの対処法をとおして、自分の気持ちを的確に表現できるようなコミュニケーション能力や対人関係能力を高める。

内容

< >自他を大切にすることによる自己表現能力を高める	
ね ら い : 攻撃的な表現、非主張的な表現、自分も他人も大切にすることによる自己表現の違いを知り、自分も他人も大切にすることによる自己表現能力を高める。	
所要時間 : 1時間5分	
準備物 : いす、机、タイマー	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 ねらいと留意点について説明する。</p> <p>(1) 「この研修のねらいは、攻撃的な表現、非主張的な表現、自分も他人も大切にすることによる自己表現の違いを知り、自分も他人も大切にすることによる自己表現能力を高めることです。」</p> <p>(2) 「なお実習に際しては個人的な内容が出るかもしれませんが、プライバシーへの配慮をお願いいたします。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員自身が日常生活での自己表現の仕方を振り返る。 ・望ましいコミュニケーションの在り方についての認識を深める。 <p>個人情報の保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p>
<p>00:02</p> <p>2 自己表現の仕方について考える。</p> <p>(1) 「皆さんは、日頃、人と接するとき、どのような自己表現の仕方をされていますか。」</p> <p>(2) 「日頃、人と接するときの自己表現の仕方として一般的に、3種類の自己表現の仕方があるといわれています。1つ目が攻撃的な表現、2つ目が非主張的な表現、そして3つ目が自分も他人のことも大切にしたい表現、これをアサーティブな表現といいますが、これら3種類の自己表現の仕方があるといわれています。ここまでで、何かご質問はありませんか。」</p>	<p>自己表現の仕方には、攻撃的な表現、非主張的な表現、自分や他人を大切にしたい表現があることを理解する。</p> <p>参加者へは説明の内容を「自己表現の仕方」として紙に書いて提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;">自己表現の仕方</p> <p>攻撃的な表現〔がみがみタイプ〕</p> <p>非主張的な表現〔おどおどタイプ〕</p> <p>自分も他人も大切にしたい(アサーティブな)表現〔さわやかタイプ〕</p> </div>
<p>00:10</p> <p>3 4～5人のグループをつくる。</p> <p>「近くの人同士で4人のグループをつくってください。人数が余れば5人グループでも結構です。」</p>	<p>近くの者同士が、4～5名ごとに1グループで輪になって座る。</p>

<p>00:15</p> <p>4 3種類の自己表現の仕方を体験してみる。</p> <p>(1) 「今からグループごとに、3種類の自己表現の仕方を体験していただきます。一人が約束の時間に30分遅れてやってきました。遅れてきた人への対応として、Aさんは攻撃的に自己表現してください。Bさんは非主張的に自己表現してください。Cさんはアサーティブに自己表現してください。」</p> <p>(2) 「役割は、遅れてきた人の役が終われば今度は攻撃的な自己主張をする役というように、順次交代してください。」</p> <p>(3) 「ではグループごとに、まず最初の役割を決めてください。5人のグループは観察者の役も決めてください。」</p>	<p>3種類の自己表現の仕方を体験をとおして学ぶことで、日頃の自分自身の対人関係の持ち方について振り返る。</p> <p>自己表現の仕方について、必要であれば、例示する。</p>
<p>00:40</p> <p>5 各グループで話し合う。</p> <p>「では、各グループで気がついたことを話し合ってください。一人1分程度で、全体で5分程度、話し合ってください。後でどんな話が出たか発表してもらいますので、発表者も決めておいてください。」</p>	<p>気がついたことや自分自身の新しい発見を全体で発表し合うことで、個人やグループの気づきを共有する。</p>
<p>00:45</p> <p>6 全体で話し合う。</p> <p>「では、各グループで出た話を発表してください。」</p>	<p>各グループで話し合ったことを、全体で共有する。</p>
<p>01:00</p> <p>7 まとめをする。</p> <p>(1) 「本研修のねらいは、攻撃的な表現、非主張的な表現、自分も他人も大切にすることによる自己表現の違いを知り、自分も他人も大切にすることによる自己表現能力を高めることでしたが、いかがだったでしょうか。」</p> <p>(2) 「なお、本日の実習で出ました個人の情報等につきましては、プライバシーへの配慮をお願いいたします。」</p> <p>(3) 「本日体験していただいた研修内容を子どもたちへ実践する際には、子どもたちの発達段階や実態に応じた体験活動になるようにすること。日常生活の中でも学習した内容が実践できるように指導を継続すること。ただし、いつもアサーティブな表現をしないといけないということではなく、時と場を踏まえた自己表現が大切であることを子どもたちに伝えること等、十分に配慮する必要がありますが、ぜひ本研修の体験を生かして</p>	<p>実践に向けての心構えを持つ。</p> <p>個人情報保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p> <p>子どもへ指導する際の留意点^(注7)について注意を喚起する。</p>

<p>いただき、子どもたちに自分も他人も大切にしたい対人関係の持ち方を学ばせていただきたいと思います。本日はご多忙の中ありがとうございました。」</p> <p>01:05</p>	
---	--

(注7) 子どもへ指導する際の留意点

この研修は、豊かな人間関係を構築するための基礎的なトレーニングとなるもので、小学校低学年から高等学校までどの段階でも実施可能である。

子どもたちの発達段階に応じた体験活動になるようにすること。例えば、提示の仕方も「攻撃的」を「がみがみタイプ」、「非主張的」を「おどおどタイプ」、そして「アサーティブ」を「さわやかタイプ」のように表示する。

実習中は、絶えず子ども一人ひとりの動きを観察しながら、雰囲気や溶け込みにくい子どもがあればその子どもに合った言葉かけをする等、個別のフォローをする。

時と場をわきまえた自己表現をすることが大切であることを確認する。

カリキュラムへの位置づけについては、例えば道徳や特別活動、総合的な学習の時間等に位置づける。

【参考・引用文献】

- ・ 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之(編著)『教師のためのアサーション』金子書房 2002

内容

< >日常のコミュニケーション能力を高める	
ねらい：日常生活を振り返り、人間関係におけるトラブルへの対処法をとおして、自分の気持ちを的確に表現できるようなコミュニケーション能力や対人関係能力を高める。	
所要時間：1時間20分	
準備物：いす、机、筆記用具、タイマー、ワークシート	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 ねらいと留意点について説明する。</p> <p>(1) 「この研修のねらいは、日常生活を振り返り、人間関係におけるトラブルへの対処法をとおして、自分の気持ちを的確に表現できるようなコミュニケーション能力や対人関係能力を高めることです。」</p> <p>(2) 「なお実習に際しては個人的な内容も多く出ます。プライバシーへの配慮をお願いいたします。」</p> <p>00:02</p> <p>2 トラブルが起こったときの対処法について考える。</p> <p>(1) 「皆さんは人間関係でトラブルに巻き込まれたとき、どのように対処していますか。」</p> <p>(2) 「トラブルへの対処法として一般的な手順はこの図にありますように、では、どういう問題が起こったのか事実関係を明らかにします。では、問題への対処方法とその処理の順序を決定します。で決定した対処方法を実行し、最後に、で対処方法を実行した結果について、確認します。」</p> <p>「ここまでで、何かご質問はありませんか。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員自身が日常生活での人間関係のトラブルを振り返る ・望ましいコミュニケーションの在り方についての認識を深める <p>個人情報の保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p> <p>人はトラブルへの対処法を考えることで成長するものであることに気づく。</p> <p>参加者へは説明の内容を「トラブルへの対処法」として紙に書いて提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">トラブルへの対処法</p> <p>問題の明確化 問題への対処法について考える 対処法を決定する 対処の順序を考える 対処の順序の決定 対処法の実行 結果の確認</p> </div> <p>トラブルの予防を主な目的とする危機管理マネジメントとは異なることに留意する。この手法をソーシャルスキルトレーニング^(参考1)と呼ぶ。</p>
<p>00:15</p> <p>3 4～5人のグループをつくる。</p> <p>「近くの人同士で4人のグループをつくってください。人数が余れば5人グループでも結構です。」</p>	<p>近くの者同士が、4～5名ごとに1グループで輪になって座る。</p>
<p>00:20</p> <p>4 ワークシート^(資料4-1)を使って、人間関係のトラブルへの対処について考える。</p>	

<p>「今回は、ワークシートを使って、人間関係のトラブルへの対処について考えます。今から一人1枚ワークシートを配ります。各自で記入していただき、その後グループで話し合います。では10分程度で記入してください。」</p>	<p>ワークシート「人間関係でのトラブル対処法」に記入し、対処の手順について理解する。この研修を応用して、子どもたちへ実施する際にはワークシート(資料4-2)を用いる。</p>
<p>00:35 5 グループで話し合う。 「記入したワークシートをもとにグループでトラブル対処の方法について話し合ってください。一人3分程度で、全体で15分程度、話し合ってください。後でどんな話が出たか発表してもらいますので、発表者も決めておいてください。」</p>	<p>グループで話し合うことで、自分の欠点や新たな対処法に気づく。</p>
<p>00:55 6 全体で話し合う。 「では、各グループの話し合いで、出た話を発表してください。」</p>	<p>各グループで話し合ったことを、全体で共有する。</p>
<p>01:10 7 まとめをする。 (1) 「この研修のねらいは、日常生活を振り返り、人間関係におけるトラブルへの対処法をとおして、自分の気持ちを的確に表現できるようなコミュニケーション能力や対人関係能力を高めることでした。いかがでしたでしょうか。」 (2) 「なお、本日の実習で出ました個人の情報等につきましては、プライバシーへの配慮をお願いいたします。」 (3) 「本日体験していただいた研修内容を子どもたちへ実践する際には、子どもたちの発達段階や実態に応じた体験活動になるようにすること。カリキュラムへの位置づけをすること。日常生活の中でも学習した内容が実践できるよう指導を継続すること等、十分に配慮する必要がありますが、ぜひ本研修の体験を生かしていただき、子どもたちに自分の気持ちを的確に表現できるコミュニケーション能力を身につけさせていきたいと思っております。本日はご多忙の中ありがとうございました。」</p>	<p>実践に向けての心構えを持つ。 個人情報の保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。 子どもへ指導する際の留意点(注8)について注意を喚起する。</p>
<p>01:20</p>	

(参考1) ソーシャルスキルトレーニングについて
 ソーシャルスキルトレーニングとは、効果的な対人行動の獲得を、体験学習をとおして支援していく練習法である。

(注8) 子どもへ指導する際の留意点
 この研修は豊かな人間関係を構築するための基礎的なトレーニングであり、小学校低学年から高等学校までどの段階でも実施可能である。
 子どもたちの実態に応じた体験活動になるようにする。トラブルへの対処法の手順にとられるのではなく、アサーティブな対応を重視する。
 実習中は、絶えず子ども一人ひとりの動きを観察しながら、雰囲気や溶け込みにくい子どもがあればその子どもに合った言葉かけをする等、個別のフォローをする。
 カリキュラムへの位置づけについては、例えば道徳や特別活動、総合的な学習の時間等に位置づける。

(資料4-1) 人間関係でのトラブル対処法
 < 教員研修用ワークシート >

こんなときどうする？
 友人の一人があなたに腹を立てているようです。特に心当たりもないのですが、関係がどんどん悪化してきました。なんとか友人との関係を良くしたいと思います。

問題の明確化
 問題は何か

対処法について考える

対処法1	対処法2	対処法3
予想される結果	予想される結果	予想される結果

対処法を決定する
 () () ()

対処の順番を考える

1	2	3	4
---	---	---	---

対処の順番を決定する
 () () () ()

対処法を実行する
 (実行する際の留意点)

結果の確認

(資料4-2) 人間関係でのトラブル対処法
 < 子ども用ワークシート >

こんなときどうする？
 友だちのAさんがあなたに腹を立てているようです。特に心当たりもないのですが、どんどん仲が悪くなってきました。なんとかAさんとの仲を良くしたいと思います。

「自分はどうしたいのか」を確認する
 Aさんとの仲をどうしたいか

原因について考える

原因1	原因2	原因3

仲なおりする方法を決める

方法1	方法2	方法3
予想される結果	予想される結果	予想される結果

仲なおりする方法の順番を考える

1	2	3	4
---	---	---	---

仲なおりする方法の順番を決める
 () () () ()

仲なおりを試してみる
 (実行するときに注意すること)

結果はどうなったか

【参考・引用文献】

・小林正幸・相川充(編著)『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』図書文化社 1999

研修テーマ 情報モラル指導力を高める

本テーマのねらい

- ・電子メールやチャット、掲示板等のコミュニケーション手段について、擬似体験をとおしてその仕組みの理解を深め問題点を把握する。
- ・「ノーテレビデー体験」を実践することで、生活リズムを向上させることの重要性を再認識する。
- ・インターネット等による有害情報が、子どもたちの行動や考え方、時には死生観にまで強い影響を及ぼしていることに鑑み、インターネット等の利用に当たったのルールやマナー等への理解を深める。

内容

< >インターネット上の有害情報等への対応	
<p>ね ら い：インターネット上の有害情報の氾濫等子どもたちを取り巻く社会環境の変化に対応すべく、教員自身はその危険性を実感し、その課題の解決に対する指導力の向上を図る。また、電子メールの利用に関するトラブルの事例をとおして、「自分を大切にする心」や「家族とのコミュニケーション」がトラブルを回避する重要なキーとなることを実感する。</p>	
<p>所要時間：3時間(分割して実施することも可能)</p>	
<p>準備物：パソコン、いす、机、筆記用具、タイマー、ワークシート</p>	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	
<p>00:00</p> <p>1 ねらいと留意点について説明する。 「最近、重大な問題行動の背景にインターネット等による有害情報が影響している事例が発生しています。そのような状況を踏まえ、本日の研修では、子どもたちに情報社会でのルールやマナーの指導をとおして、『自分を大切にする心』や『人を思いやる心』を実感させるような指導についての研修を行います。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。 家庭におけるパソコンや、子どもたちの携帯電話の保有率は近年急激に上昇してきている。そのような中で子どもたちが意識しないうちに有害情報に触れてしまう場面が増えつつある。メール等電子メディアの利用方法を誤れば、自分を傷つけたり、周囲の人を悲しませたりする危険性がある。情報社会におけるルールやマナーの学習をとおして、「自分を大切にする心」「人を思いやる心」の大切さを実感させることが必要である。</p>
<p>00:05</p> <p>2 研修用視聴覚教材を観る。 「出会い系サイトの罠」(約40分)^(参考2) (企画 警察庁生活安全局少年課) 「まず、電子メールやチャットに潜む危険について考えます。今からビデオを観てもらいます。視聴後、グループで感想を交換し合ってもらいます。その中で電子メディアに潜む危険性や問題点を出し合うことで、子どもたちに何を伝えていかなければならないかを共有したいと思います。それではビデオをご覧ください。」 (教材視聴後) 「このビデオの要点は、 有害情報の危険性に対する認識 個人情報に対する認識 問題発生時に家族に相談する等の対応 情報発信者の責任</p>	<p>研修用視聴覚教材をとおして、電子メール等の電子メディアに潜む危険を知る。 「出会い系サイト」では、インターネットの特性により、面前の直接のやりとりでは言いにくい事も、ストレートに表現できたり、現実離れた内容を伝えたりすることも容易である(匿名性・仮想性)。さらに、多数の者に対して一斉にメッセージを伝えることができる(瞬時性・大量性)という機能を有している。この機能により、「出会い系サイト」を犯罪に利用しようとする者が、容易に対象を見つけ出すことができる。このような「出会い系サイト」の危険性を理解するために、ビデオを視聴する。 要点を記入したワークシート^(資料5)を各グループに1枚配布し、グループでの話し合いの柱となることを明確にする。</p>

等であったと思います。この後グループでビデオを観た感想や問題だと思ふ点を交換し合ってください。」

00:45

- 3 グループで討議をする。
「近くの人同士で4人のグループをつくってください。人数が余れば5人グループでも結構です。」

「今見てもらったビデオの感想を各グループで交換し合ってください。ワークシートに書かれた要点を中心に話し合いを進めてください。また、ビデオの中で分からない用語等がありましたらそれもあげてください。」

「ワークシートに記載されていること以外にも重要なポイントがあれば、ワークシートに記入し、意見交換を行ってください。」

「最後に、グループごとに話し合った内容を全体に発表していただきますので、発表者を決めておいてください。発表の時間は2分程度を予定しています。それでは話し合いを始めてください。」

01:05

- 4 グループの話し合いの内容を全体に発表する。

「先ほど各グループで話し合った内容を発表してもらいます。各グループの発表者の方は2分程度で発表してください。その際に、子どもたちに何を伝えるべきなのかという視点があればより良いのではないかと思います。」

01:15

休憩 10分

01:25

- 5 Web版情報モラル教材を活用する。
・独立行政法人教員研修センター
「情報モラル教材2005」
<http://sweb.nctd.go.jp/2005/index.htm>
(他の関連Webサイト例)(参考3)

「電子メール、掲示板、チャット等を疑似体験したいと思います。そのことによって、様々な問題事例とその対応例について考えます。」

「ここでは『情報モラル教材2005』を利用します。この教材には、ファイル交換ソフトに潜む問題点、無線LANを使用する際の注意、携帯電話による出会い系サイトアクセスの問題、ウイルス対策の手引き、ウェブログ開設のトラブル、カメラ付き携帯電話の

近くの者同士が、4～5名1グループで輪になって座る。

先にあげた要点にしたがって感想を交換し合うことによって、電子メディアに潜む危険を把握する。また、どの子どもにも起こりうる事象であり、特別な出来事ではないことを認識し、教員自身が子どもたちに的確に指導することの必要性を実感する。

ワークシートの要点についてグループでの話し合いを進める。また、自分の身の回りにある事例も出し合いながら意見交換を行う。ビデオの中で分からない用語がある場合はその解説も行う。

発表者とワークシートへの記入者をグループの中で決めるように指示する。

感想を述べ合うだけでなく、問題点を明らかにし、それを全体で共有できるような発表となるように促す。

インターネット接続可能なパソコンを、教員一人に1台準備しておく。インターネットへの接続環境がない場合には、以下のサイトからダウンロードしたものを各パソコンにインストールして利用することも可能である。

<http://sweb.nctd.go.jp/kyouzai.html>
教員自身が、電子メールやチャット機能やそれに伴う事例を疑似体験することによって、様々な問題事例とその対応例について考える。

具体的に学習の内容や体験の順序を指示し、活動が焦点化されるように留意する。

「情報モラル教材2005」には多くのコンテンツが含まれているが、ここでは問題を焦点化するために「出会いメール」や「チャット」、「掲示板」に絞って学習や体験を進める。

マナー等最近顕在化してきた問題も含まれています。」
 「ここからは、パソコンでWeb教材を使って進めていきます。学習や、体験の手順を次に説明します。実際の画面を見ての操作については別紙(参考4)を参照ください。
 「体験から学ぶ」「事例を体験する」
 「事例から学ぶ」「事例を見る」
 「体験から学ぶ」「機能を体験する」
 「授業素材」「授業素材を見る」
 では、様々な事例を擬似体験することができます。では掲示板、オンラインショップ等の機能を試すことができます。
 では実際の授業の展開例を見ることができ、後の指導計画作成のヒントとすることができます。それでは実習を進めてください。」

01:50

6 グループ単位で指導計画を作成する。
 「ただ今から、本日の研修で利用したビデオの内容や、Web教材をもとにして、子どもたちに有害情報の危険性を認識させ、メールやチャット等の電子メディアの利用に関するルールやマナーを育てることを目的とした指導計画を作ります。また、『自分を大切にする心』『人を思いやる心』の大切さも伝えていきたいところです。今後実際に子どもたちに指導することをイメージしながら作成してください。」
 「一例をあげます。
 子どもたちへのアンケート実施
 視聴覚教材の提示
 視聴後の感想交換
 Web教材による体験学習
 体験学習後の感想交換
 実践に向けてのまとめ
 このうちのどれか1つの学習に焦点を当てて作成していただいても結構です。グループで1つ作成してください。」
 「後の全体での発表はポスタープレゼンテーションの形で行います。配布いたします模

(活用例)
 ・独立行政法人教員研修センター
 「情報モラル教材2005」
<http://swab.nctd.go.jp/2005/index.htm> を開く。
 「目的別に題材を探す」「出会いメール」
 「思いがけない請求がきた!」
 「突然のメール失礼します。」
 「友だち探しチャット」
 「目的別に題材を探す」「偽りの自己紹介」
 「会ってはいけない出会い系」
 「知らない人からのメール」
 「偶然出会ってしまう有害サイト」
 「掲示板」「チャット」
 ~ をとおして、メールやチャットでは匿名性が高く、悪用すれば他人になりすましたり、偽りの情報を流したりすることや、巧みな手口で個人情報を引き出ししたりすること等が容易にできることを体験する。
 「目的別に題材を探す」
 「インターネットの出会いのページで見知らぬ人に会う」
 「携帯電話を活用するときの心構え」
 「チェーンメール等問題のあるメール」
 (注)文中の「」は、リンクをたどる順序を示す。

子どもたちに指導する場合、教員は事前にWebのリンクをたどり確認をしておく。

電子メディアに潜む危険を認識させるとともに、子どもたちの情報モラルの向上を図る指導計画を作成する。
 例をあげることで具体的なイメージをふくらませる。
 作成に当たっては、子どもの興味を引くだけになったり、逆に恐怖感だけを植えつけるような指導になることのないように注意する。
 また、メール等電子メディアの利用の仕方を間違えれば、自分を傷つけ、周囲の人を悲しませる結果になってしまうことを理解させることが必要である。そのような指導をとおして、「自分を大切にする心」「人を思いやる心」の大切さを実感させることのできる指導計画の作成を心がける。
 情報モラル全般にわたるものではなく、本日の研修内容に沿い、学習内容を焦点化したものとなるようにする。

<p>造紙に指導計画を作成してください。その中には、学習や体験の内容やそこで子どもたちに気づかせたいこと、身につけさせたいこと等もご記入ください。図で表していただいても結構です。」</p> <p>02:25 7 全体討議をする。 「今から各グループで作成した指導計画を発表してもらいます。各グループで発表者を決めていただき3分程度で発表してください。」</p> <p>02:55 8 まとめをする。 「本研修のねらいは、インターネット上の有害情報等、子どもたちを取り巻く社会環境の変化に対応すべく、教員自身がその危険性を実感し、有害情報等の新たな課題に対する指導力の向上を図ることでしたが、いかがだったでしょうか。」 「本日作成していただいた指導計画をもとに子どもたちへ実践する際には、子どもたちの発達段階や実態に応じた活動になるようにすること。カリキュラムへの位置づけをすること。子どもの興味をひくだけの指導に終わらないこと等、十分に配慮する必要がありますが、ぜひ本研修の体験を生かしていただき、子どもたちにインターネット等の利用に当たってのルールやマナーを明確に理解させ、『自分を大切に作る心』『人を思いやる心』を育てていていただきたいと思います。本日はご多忙の中ありがとうございました。」</p> <p>03:00</p>	<p>ポスタープレゼンテーションのイメージができるように説明をする。</p> <p>グループ討議の内容をもとに全体で討議する。 ポスタープレゼンテーションの形で発表を行う。1グループの発表後に、全体での意見交換の時間をとる。</p> <p>本研修で学んだことを全体で確認する。</p>
--	--

(参考2)『出会い系サイトの罠』2004(企画 警察庁生活安全局少年課:約40分) あらすじ
誕生日に両親からはじめて携帯電話をプレゼントされた、女子高生の「愛」。真面目な「愛」は、友人の「ケイコ」が“メル友”に会うために出かけていくのを、最初は冷めた目で見つめていた。
ところがある日、無差別に送られてきた懸賞サイトにアクセスしたことがきっかけで、出会い系サイトを知ることになる。モデルの「じゅん」と称する男性と興味半分に出会ってしまった「愛」。お酒を勧められるままに飲んだ彼女は「じゅん」に乱暴され、心に深い傷を負う。そのうえ、有料サイトにアクセスしたことがきっかけで、不当なお金を請求され、追いつめられた「愛」は援助交際に走ってしまう。
久しぶりに出会う幼なじみ「長瀬」のさわやかな笑顔も、今の「愛」には空しく感じられるばかり……。出会い系サイトの罠が、「愛」を思わぬ苦しみに引きずり込んでいく……。

(参考3)他の研修用教材Webサイト
・@police(警察庁)「セキュリティ講座」<http://www.cyberpolice.go.jp/index.html>
・IPA、CEC Eスクエア・プロジェクト「ネット社会の歩き方」<http://www.cec.or.jp/net-walk/>等

(資料5) ワークシート
ワークシート 『出会い系サイトの罠』を見て

有害情報の危険性

その他の要点

個人情報の認識

家族との相談

情報発信者の責任

わかりにくい用語

【参考・引用文献】

- ・ 警察庁生活安全局少年課（企画）ビデオ『出会い系サイトの罠』2004

(参考4) Web教材「情報モラル教材2005」を使った実習の進め方

Web教材「情報モラル教材2005」を使った実習の進め方

「体験から学ぶ」 事例を体験する 「目的別に題材を探す」

ここをクリック

ここをクリック

ここをクリック

ここをクリック

「事例から学ぶ」 事例を見る 「目的別に題材を探す」

ここをクリック

ここをクリック

ここをクリック

ここをクリック

「体験から学ぶ」 機能を体験する 「掲示板」「チャット」

ここをクリック

ここをクリック

このWebページはシミュレーションです。
 ・ページに掲載されている内容はすべて架空のものです。
 ・ページを更新(リロード)すると、画面が初期状態に戻ってしまいますので、
 操作途中での更新(リロード)は行わないでください。

タイトル：
 名前：
 e-mail：
 内容：
 書き込み リセット

「授業素材」 授業素材を見る 「目的別に題材を探す」

ここをクリック

ここをクリック

ここをクリック

インターネットの出会いのページで見知らぬ人に出会

「出会い系サイト」には、趣味、仕事の仲間や結婚相手を探すものもあれば、援助交際など犯罪につながるものもあります。その危険性を理解し、健全な利用ができるように指導することが大切です。

対象校種
 中 高
 学習時間
 1・2時間

内容

< >ノーテレビデー体験	
ね ら い：教員自身が「ノーテレビデー体験」を実践し、生活リズムを向上させることの重要性を再認識する。また、その体験をもとに各校の実態に応じた「ノーテレビデー体験」の実施案を作成する。	
所要時間：50分 + 1時間10分	
準備物：いす、机、筆記用具、タイマー	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 ねらいについて説明する。 「この研修のねらいは、教員自身が『ノーテレビデー体験』を実践し、生活リズムを向上させることの重要性を再認識し、その体験をもとに本校の実態に応じた実施案を作成することです。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。 子どもの「キレイやすさ」と家庭における基本的な生活習慣の乱れとの関係が指摘されているところであるが、ここでは「ノーテレビデー体験」をとおして、子どもの望ましい基本的な生活習慣を育成する。</p>
<p>00:02</p> <p>2 「ノーテレビデー」に関する先行取組を知る。 「日常生活を見直す取組にはいろいろな取組が今までにありましたが、ここではテレビやテレビゲームとの関わりを取り上げます。1日の中でどれくらいテレビがついているでしょうか。テレビを消してみると家の中に変化はあるのでしょうか、また、日常生活の変化はあるのでしょうか。まずは教員自身が体験してみることが大切ではないでしょうか。」 「今までノーテレビデーに関しての取組として のようなものがあります。」 「実践した人の振り返りや感想は のようなものでした。」</p>	<p>各自が1日でテレビがついている時間を合計するなど、家庭でのテレビとの関わりについて考える。 電子メディア漬け生活の弊害について認識を深める。 できるだけたくさんの「ノーテレビデー」に関する実践例(参考5)を紹介し、「ノーテレビデー体験」のイメージをふくらませ、教員自身の意欲を高める。 「 」の部分では、実践例を参考にし、実践者の振り返りや感想を紹介し、実施に向けてのヒントをあたえる。 テレビを消すことで、そこから何が見えてくるのか、まずは自分が体験してみることが大切であることを認識する。</p>
<p>00:15</p> <p>3 教員自身の「ノーテレビデー体験」について立案する。 「これらの先行の取組を参考にし、各自でプランを立ててください。」 「プランの立て方として、期間や実施内容等を各自で考えて立案してください。」</p>	<p>期間や実施内容を各自の生活に応じて検討する。 (プラン例) ・テレビ(テレビゲーム)をつけない日 ・テレビ(テレビゲーム)をつけない週 ・決まった時間しかテレビをつけない週 等 「ノーテレビデー体験」の実施にあたり、家族とどのような話し合いをするのか、また、体験から何を学ぶことができるのかについても考える。</p>
<p>00:30</p> <p>4 立案したプランについて発表する。 「今考えていただいた各自のプランをグループで発表し合ってください。」</p>	<p>各自のプランをグループ内で発表し合う。</p>

<p>00:40</p> <p>5 グループで感想を交換し合う。 「グループの人の発表を聞いた感想を交換し合ってください。」 「同じグループの人の意見を聞いて、必要があれば自分のプランを修正してください。」</p> <p>00:45</p> <p>6 まとめをする。 「次回は に集まっていただきます。その際、各自『ノーテレビデー体験』の内容や感想を出し合ってください。」 「なお、実施については事前に実施目的や方法について家庭で十分な話し合いに時間を持っておいてください。」</p> <p>00:50</p>	<p>同じグループの人の意見を聞いて、必要があれば自分のプランを修正する。</p> <p>事前に「ノーテレビデー体験」の目的や実施方法について、家庭で十分な話し合いを持つ。ノーテレビデー体験の際の留意点を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノーテレビデー体験は、がまん大会ではなく、テレビを消すことによる効果に気づく体験である。 ・家族の会話や読書等の時間を普段よりも多く取れるように心がけてみる。 ・普段気づけなかった新しい気づきを大切に ・家族で決めたことを守ろうとする心を育てる。 ・「これはこれでいいところがあるな」と思えるような体験となるように。 等
<p>「ノーテレビデー体験」を家庭で行う。 (各自で実施)</p>	<p>各自に合った体験を展開する。</p>
<p>(体験後)</p> <p>00:00</p> <p>1 グループで体験の様子や感想を交換する。 「各自で取り組んでいただいたノーテレビデー体験について、前回と同じグループで話し合ってください。」 「家庭内での心のふれあいと新しい発見の2つの観点について話し合いを進めてください。」</p> <p>00:10</p> <p>2 全体で話し合う。 「各グループで話し合ったことを、全体に発表してください。」</p> <p>00:25</p> <p>3 学校、家庭における取組を立案する。 「教員自身の体験をもとに、子どもたちを対象にしたノーテレビデー体験について今から考えたいと思います。まずは先ほどのグループで、本校において実施する場合、どのような形態で実施するのが良いか、また、子ど</p>	<p>各自の取組を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭内での心のふれあいに関して 「家族の会話が増えた」 「子どもの学校の様子が分かった」 ・新しい発見に関して 「お母さんが食事をつくる音が聞こえた」 「時間がゆっくりと感じられた」 等 <p>成功した事例だけでなく、失敗した事例についても発表する。</p> <p>各グループで話し合ったことを、全体で共有する。</p> <p>教員自身の体験を踏まえ、子どもたちや地域の実態に応じた具体的実施案をグループで作成する。立案にあたっては、この体験をとおして子どもたちに何を感じさせたいのかを教員自身が明確に持っていることが大切である。</p>

<p>もたちにとってどんな体験になってほしいか等について意見を出し合ってください。その後、全体で検討したいと思います。」</p> <p>00:45 4 全体討議をする。 「各グループで話し合ったことを、全体に発表してください。」</p> <p>01:05 5 まとめをする。 「本研修のねらいは、教員自身がノーテレビデー体験をすることで、生活リズムを向上させることの重要性を再認識し、その体験をもとに本校の実態に応じた実施案を作成することでしたが、いかがだったでしょうか。」 「本日体験していただいた研修内容を、子どもたちへ実践する際には、子どもたちの発達段階やクラスの子どもの実態に応じた体験活動になるよう、十分に配慮する必要がありますが、ぜひ本研修の体験を生かしていただき、子どもたちに、望ましい電子メディアとのつきあい方やそれをとおして、生きる喜びを実感させていただきたいと思います。本日はご多忙の中有り難うございました。」</p> <p>01:10</p>	<p>このような体験活動を実施する場合、家庭との連携が重要である。そこで、計画を立案するにあたり、家庭や地域に対してどのように広報活動を行い、協力を依頼していくのかも重要な要素であることに留意する。 体験の前後においてアンケート（資料6）を実施し、生活習慣の変化をとらえることも有効である。</p> <p>グループ討議の内容をもとに全体で討議する。</p> <p>この研修をもとに、実践してみようという気運を高めるように心がける。</p> <p style="text-align: center;">（資料6）生活ふりかえり表の例</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 70%;"></th> <th style="width: 30%;">月曜日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>朝何時に起きましたか</td> <td style="text-align: center;">：</td> </tr> <tr> <td>朝ごはんを食べましたか</td> <td>食べた・食べてない</td> </tr> <tr> <td>うんこはしましたか</td> <td>した・しなかった</td> </tr> <tr> <td>歯をみがきましたか</td> <td>朝・夜</td> </tr> <tr> <td>朝、顔を洗いましたか</td> <td>はい・いいえ</td> </tr> <tr> <td>テレビは何時ごろ見ましたか</td> <td style="text-align: center;">： ～ ：</td> </tr> <tr> <td>テレビゲーム類を持っていますか</td> <td>テレビゲーム機・携帯ゲーム機・持っていない</td> </tr> <tr> <td>ゲームをどのくらいの時間しましたか</td> <td style="text-align: center;">： ～ ：</td> </tr> <tr> <td>何かお手伝いをしましたか</td> <td></td> </tr> <tr> <td>何時に寝ましたか</td> <td style="text-align: center;">：</td> </tr> <tr> <td>【ふりかえってみよう】</td> <td>【おうちのひとから】</td> </tr> </tbody> </table>		月曜日	朝何時に起きましたか	：	朝ごはんを食べましたか	食べた・食べてない	うんこはしましたか	した・しなかった	歯をみがきましたか	朝・夜	朝、顔を洗いましたか	はい・いいえ	テレビは何時ごろ見ましたか	： ～ ：	テレビゲーム類を持っていますか	テレビゲーム機・携帯ゲーム機・持っていない	ゲームをどのくらいの時間しましたか	： ～ ：	何かお手伝いをしましたか		何時に寝ましたか	：	【ふりかえってみよう】	【おうちのひとから】
	月曜日																								
朝何時に起きましたか	：																								
朝ごはんを食べましたか	食べた・食べてない																								
うんこはしましたか	した・しなかった																								
歯をみがきましたか	朝・夜																								
朝、顔を洗いましたか	はい・いいえ																								
テレビは何時ごろ見ましたか	： ～ ：																								
テレビゲーム類を持っていますか	テレビゲーム機・携帯ゲーム機・持っていない																								
ゲームをどのくらいの時間しましたか	： ～ ：																								
何かお手伝いをしましたか																									
何時に寝ましたか	：																								
【ふりかえってみよう】	【おうちのひとから】																								

（参考5）ノーテレビデーの取組例

〔書籍〕

- 『子どもとメディアの“新しい関係”を求めて』（発行 子どもとメディア研究会）
- ・各家庭で毎月20日をノーテレビデー（テレビをつけない日・ゲーム類も禁止）として実施。効果としては、「家族の会話が増えた」「子どもと一緒に遊ぶ時間が増えた」「子どもが食事の手伝いをした」等。
- 『テレビに子育てをまかせていませんか？』（編集 コモ編集部）
- ・6日間はテレビ、ビデオ、ゲーム、パソコン等のメディアはすべてオフ。家庭の外でも同じ。親の生活に必要な場合ラジオはOK等。その効果としては、「子どもの遊びを生み出す想像力が増した」「きょうだいの豊かな関係性を生み出した」「子どもがいかに親を求めているかがわかった」等。

〔Web〕

- NPO法人子どもとメディア <http://www16.ocn.ne.jp/~k-media/>
- ・『子どもとメディアの“新しい関係”を求めて』を参照のこと。
- 鳥取県三朝町の取組 <http://www.town.misasa.tottori.jp/site/page/allindex/eyakuba/info/kyouiku/oshirase/>
- ・子どもたちは読書の体験、遊びの体験を楽しむようになった。また、大人の気づきとして、テレビを消すことで、子どもたちの様子がよく見えるようになったこと等があげられた。

【参考・引用文献】

- ・子どもとメディア研究会『子どもとメディアの“新しい関係”を求めて』2003
- ・コモ編集部（編）『テレビに子育てをまかせていませんか？』主婦の友社 2005

内容

< >テレビゲームとのかかわり	
ねらい：暴力的で残虐な描写や性的な描写が多く含まれるテレビゲームが子どもたちに及ぼす影響について、教師自身はその危険性を認識し、これからの指導の必要性を実感する。	
所要時間：1時間40分	
準備物：いす、机、筆記用具、タイマー	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 0 ねらいと留意点について説明する。 「この研修のねらいは、暴力的で残虐な描写や性的な描写が多く含まれるテレビゲームが子どもたちに及ぼす影響について、教師自身はその危険性を認識し、これからの指導の必要性を実感することです。」</p>	<p>研修のねらいについて簡潔に説明する。 少年犯罪との関連性が指摘されている有害ゲーム（暴力的で残虐な描写や性的な描写が多く含まれ、子どもたちにとって有害性のあるゲーム）についての問題点を取り上げる。</p>
<p>00:02</p> <p>1 1 研修用視聴覚教材を観る。 「GAME OVER」(約20分) (Media Education Foundation) 「まず、有害ゲームに潜む危険性について考えます。今からビデオを観てもらいます。視聴後、グループで感想を交換し合ってもらいます。その中で有害ゲームに潜む危険性や問題点を出し合うことで、子どもたちに何を伝えていかなければならないのかを共有したいと思います。それではビデオをご覧ください。」 (教材視聴後) 「このビデオのテーマは、 テレビゲームにおける暴力 シミュレーション本来の目的 等であったと思います。この後ビデオを観た感想や問題点だと思う点をグループで交換し合ってください。」</p>	<p>事前にビデオを視聴し、その内容を確認しておく。 有害ゲームやネット上に氾濫する情報などを問題視する人は多いが、その弊害について体験的に理解する機会は少ない。研修用視聴覚教材をとおして、有害ゲームに潜む危険性を知り、これからの指導に生かすことができるようにする。 視聴前に「GAME OVER」についての説明をする。(参考1) このビデオは次の3点をテーマとしている。 ・テレビゲームにおける性 ・テレビゲームにおける人種 ・テレビゲームにおける暴力 その中で、今回は「テレビゲームにおける暴力」をテーマとして取り上げるので、Intro Chapter5 Chapter6 Chapter7を視聴する。 要点のメモをとる。 ・有害ゲームが子どもたちに及ぼす影響 ・シミュレーション本来の目的 等 他のテーマで同様に実施することも可能である。(参考2)</p>
<p>00:22</p> <p>1 2 グループで討議をする。 「近くの人同士で4人のグループをつくってください。人数が余れば5人のグループでも結構です。」 「今観てもらったビデオの感想や、ご自身やご家族のこれまでのテレビゲームとのかかわりについて話し合ってください。」</p>	<p>近くの者同士が、4～5名1グループで輪になって座る。 互いに共感できるところ等を確認し合う。 身の回りにあるゲームに関するエピソードを</p>

<p>わりについて意見をグループで交換してください。」 「最後に、グループごとに話し合った内容を全体に発表していただきます。発表時間は1グループ2分程度を予定しています。それでは話し合いを始めてください。」</p> <p>00:30 1 3 グループの話し合いの内容を全体に発表する。 「先ほど各グループで話し合った内容を発表してもらいます。各グループの発表者の方は2分程度で発表してください。その際に、ゲームをする際の留意点等、子どもたちに何を伝えるべきかという視点をもとに発表してください。」</p> <p>00:40 1 4 ロールプレイングを行う。 「ロールプレイングを行います。即興的に役割演技を行うことで、抽象的に捉えていたものがより具体的、実質的に理解できるようになります。」 「次の『課題』について役割を決めて、実施してください。あくまでこの場だけの演技です。実際の間人間関係は忘れてください。それぞれの役を演じきらないとロールプレイングの意味は薄れます。物わかりのいい人になり過ぎないように注意してください。」 「役割のない方は、観察者として進行を見守り、終了後に意見を述べてください。」 「ロールプレイングの時間は10分間とります。その後、感想をグループで交換し合う時間とります。では、始めてください。」</p> <p>00:55 1 5 フィードバックを行う。 「振り返りを行います。まず、演技者が感想を述べ、次に観察者が感想を述べてください。」</p> <p>01:00 1 6 役割を変えて、ロールプレイングを行う。 「次に、役割を変えて、もう一度ロールプレイングを行ってください。」</p> <p>01:15 1 7 フィードバックを行う。 「振り返りを行います。まず、演技者が感想を述べ、次に観察者が感想を述べてください。」</p>	<p>出し合い、有害ゲームが身近にも存在することを確認する。 最近ではパッケージ版のゲームだけでなく、ネットゲームが多く存在し、親の知らないうちに子どもがゲームサイトに登録してしていることも多いことなどを例に上げ、活発な討議になるように促す。</p> <p>各グループで話し合ったことを、全体で共有する。 感想を述べ合うだけでなく、問題点を明らかにし、それを全体で共有できるような発表となるように促す。</p> <p>即興的な役割体験を通して、抽象的に捉えていたものを身近な出来事として実感する。 ためらいなく役を演じきれるように雰囲気づくりをする。 ペーパーで用意した『課題』(資料1)を渡し、どのような状況を演じるかを説明する。 興味本位の演技や、演技のための演技にならないように促す。 はじめの5分間で、課題の内容を把握し、グループ内で一組の演技者と残りの観察者を決める。</p> <p>リーダーは、演技者が自分の演技を振り返り、感想等を率直に述べるように促す。 リーダーは、観察者が感じたことを率直に述べるように促す。</p> <p>先ほど観察者であった人は、演技者になるように促す。</p> <p>リーダーは、演技者が自分の演技を振り返り、感想等を率直に述べるように促す。 リーダーは、観察者が感じたことを率直に述</p>
--	--

<p>「その後、子どもたちや保護者とのかかわりの中で、どのような工夫が考えられるか、子どもたちの様子を思い浮かべながら意見を出し合ってください。また、これまでに先ほどのロールプレイングの内容と似た事例があれば、それも参考として意見を出し合ってください。」</p> <p>01:25 18 全体で討議をする。 「では、各グループで話し合った内容を発表してください。」</p> <p>01:35 19 まとめをする。 (1) 「この研修のねらいは、暴力的で残虐な描写や性的な描写が多く含まれるゲームが子どもたちに及ぼす影響について、教師自身がその危険性を認識し、これからの指導の必要性を実感することでした。いかがだったでしょうか。」 (2) 「ぜひ、本研修の体験を生かしていただき、今後も有害ゲームの持つ危険性について留意しながら命の大切さや、かけがえのなさを実感させる教育を実践する際の参考にしていただきたいと思います。本日はご多忙の中ありがとうございました。」</p> <p>01:40</p>	<p>べるように促す。 感想を交換し合うことによって、有害ゲームに潜む危険性を把握する。また、こういったロールプレイングの内容については、身近にも起こりうる出来事であることを認識し、教員自身が子どもたちに的確に指導することの必要性を実感する。</p> <p>感想を述べ合うだけでなく、問題点を明らかにし、それを全体で共有できるような発表となるように促す。</p> <p>本研修で学んだことを全体で確認する。</p>
---	--

(参考1) 『GAME OVER』(Media Education Foundation)
 Media Education Foundation(アメリカのNPO)は、メディアが扱う様々な情報と人とのかかわりについて考え、討論することを奨励するようなドキュメンタリービデオを製作し配給している。「GAME OVER」は、テレビゲームにおける暴力、性、人種に関する問題点を取り上げた最初の教育的なドキュメンタリーである。このビデオを通して、高校生や大学生がテレビゲームについて批評的に考え、討論することができるように製作された。
 これまで国内には、テレビゲームをテーマとした教育用素材はほとんどなく、ここでは「GAME OVER」に日本語字幕を付けて活用している。
 URL: <http://www.mediaed.org/videos/MediaGenderAndDiversity/GameOver>

(資料1) 【課題】 教師と生徒の二者面談
 中学2年生のA君の母親は、最近、A君の言動が荒っぽくなった気がしているが、どう対応をしたらよいかかわらなかつた。そのような時、担任から母親へA君が冗談半分で友達を殴り、軽いけがをさせたという連絡があった。
 A君は以前から、暴力的な場面の多いロールプレイングゲームや、格闘技ゲームをよくしており、母親は気になってはいたが、やめさせることはできなかった。また、A君はそうしたゲームに夢中になることについて全く問題を感じてはいなかった。むしろ暴力的な強さがかっこいいと感じ、ゲームの主人公に憧れを持っていた。
 ゲーム漬けの少年が事件を起こしたという報道を聞いた時に、母親は「この子に限って」と思いながらも、暗い気持ちになっていた。そこで、A君の母親は、親子での話し合いの前に有害ゲームの危険性について担任のB先生からもA君に話をしてもらうように依頼し、A君とB先生は面談することになった。二者面談の様子を演じてください。

(参考2) 他のテーマでの実施

「テレビゲームにおける性」を取り上げる場合は、Intro Chapter1 Chapter2 Chapter3を視聴した後、ロールプレイングの課題を変えて実施することも可能である。

【課題例】 教師と父親の二者面談

高校1年生のC君は、家庭では自分の部屋にこもりがちでゲームをして過ごすことが多かった。

あるとき、部屋で何をしているのか以前から気になっていた父親は、C君の外出中に子どもの部屋のパソコンを何気なく調べてみた。すると、子どもを性の対象としたネットゲームに参加したり、それにまつわる情報交換サイトを閲覧した膨大な履歴があった。また、C君が書き込んだと思われる過激な書き込みが掲示板に残っていた。

昨今の幼児を対象とした事件のこともあり、心配になった父親は、子どもには内緒で高校の担任のD先生に相談することにした。

二者面談の様子を演じてください。

研修テーマ 死と向き合う人々や犯罪被害者・遺族から学ぶ

本テーマのねらい

<ul style="list-style-type: none"> ・死と向き合う人々からの話を聞き、その生き方にふれることにより、命のかけがえのなさを感じ、生きることの意義を考える。 ・犯罪被害者や遺族の声を聞くことにより、かけがえのない人を失った悲しみや怒りにふれ、命のかけがえのなさについて体験的に実感する。 ・「命を守るために自分にできること」のテーマで討議することで、命の危機に対する認識を深める。
--

内容

< >ターミナルケアに携わる人々の話を聞いて	
ね ら い：死と向き合う人々の話を聞き、生きることの意義について考える。	
所 要 時 間：1時間35分	
準 備 物：いす、机、筆記用具、タイマー	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 ねらいについて説明する。 「この研修のねらいは、死と向き合う人々からの話を聞き、『限りある命をどう生きるか』のテーマで討議することで、教員自身が命の大切さ、命のかけがえのなさに対する認識を持つことです。」</p> <p>00:05</p> <p>2 死と向き合う人々の声を聞き、命のかけがえのなさを実感する。 (1) 「今から、死と向き合う仕事をされておられる方(ホスピス医等)のお話を伺います。」 (2) 「 様は、 に所属されています。 なお、受講者の方々は、プライバシーの保護には十分配慮くださいますよう、特にお願しいたします。それでは 様、よろしくお願しいたします。」</p> <p>(講話) (講話後： 様、有り難うございました) (3) 「 様には、引き続き研修にご同席いただき、この後の協議の様子をご覧いただき、最後にコメントを頂戴します。」</p> <p>00:35</p> <p>3 4～5人のグループをつくる。 (1) 「近くの人同士で4人のグループをつくってください。人数が余れば5人グループでも結構です。」 (2) 「グループで輪になってください」</p>	<p>研修のねらいを確認する。 ・死と向き合う人々からの話を聞く ・「限りある命をどう生きるか」のテーマで討議する ・教員自身が命の大切さ、命のかけがえのなさに対する認識を持つ</p> <p>死と向き合う人々の声を直接聞くことで、命の大切さや命のかけがえのなさ、命の危機に対する認識を持つ。 事前に「命の大切さ」を実感させる教育プログラムの趣旨や研修の目的について講師と十分打ち合わせをし、講義内容、ねらい、話の要点を整理しておく。 個人情報の保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p> <p>要点のメモをとる。</p> <p>近くの者同士が、4～5名1グループで輪になって座る。</p>

<p>00:40</p> <p>4 死と向き合う人々の話を聞いた感想を出し合う。 「先ほどのお話の要点は、 というお話だったと思います。 ゲストティーチャーの話を聞いた感想を、特に命の大切さや命のかけがえのなさについてグループで出し合ってください。」</p>	<p>命の大切さや命のかけがえのなさについて、互いに共感できるところ等を確認し合う。要点をまとめることで参加者の理解を深める。</p>
<p>00:50</p> <p>5 フリートークで、テーマ「限りある命をどう生きるか」についてグループ討議をする。 「今度はグループで『限りある命を、自分はどう生きるか』ということについてフリートークをしてください。なお、後で全体討議をしますからその時の発表者を決めておいてください。」</p>	<p>グループ内で「限りある命をどう生きるか」のテーマで、フリートークをする。</p>
<p>01:10</p> <p>6 全体で討議をする。 「先ほど各グループで話し合った内容を発表してもらいます。各グループの発表者の方は、3分程度で発表してください。」</p> <p>7 全体討議のまとめをする。 「では、講師の 様から各グループの発表についてのコメントをいただきます。」</p>	<p>グループ討議の内容をもとに全体で討議する。</p> <p>講師の方からコメントをいただく。</p>
<p>01:30</p> <p>8 まとめをする。 (1) 「講師の先生には、本日は貴重なお話をしていただき有り難うございました。」 (2) 「本研修は、死と向き合う人々からの話を聞き、生きることの意義について考えることをねらいとして実施しましたが、いかがだったでしょうか。 今日は非常に重いテーマで討議をしていただきました。……………」 (3) 「ぜひ本研修の体験を生かしていただき子どもたちにも、命の大切さやそのかけがえのなさを実感させていきたいと思えます。なお、受講者の方々は、本日のお話に関わる内容について、プライバシー及び個人情報の保護には十分配慮くださいますよう、重ねてお願いいたします。本日はご多忙の中ありがとうございました。」</p>	<p>講師の方へのお礼とともに、本研修で学んだことを確認する。</p> <p>「……………」の部分では、研修後にテーマの重さを引きずらないようなコメントを含めること。</p> <p>個人情報の保護やプライバシーへの配慮について、注意を喚起する。</p>
<p>01:35</p>	

内容

< >犯罪被害者・遺族の声を聞いて	
ねらい：犯罪被害者・遺族の声を聞き、『命を守るために自分たちの立場でできることについて』のテーマで討議することで、教員自身が命の大切さ、命の危機に対する認識を持つ。	
所要時間：2時間	
準備物：教材ビデオ、ビデオプロジェクター、スクリーン、いす、机、筆記用具、タイマー、メモ	
内 容	
活動内容	留意点
(注) 太字は研修リーダーの台詞	(注) 印は留意点、 印は活動の意図
<p>00:00</p> <p>1 ねらいについて説明する。 「この研修のねらいは、犯罪被害者・遺族の声を聞き、『命を守るために自分たちの立場でできることについて』のテーマで討議することで、教員自身が命の大切さ、命の危機に対する認識を持つことです。」</p>	<p>研修のねらいを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・犯罪被害者・遺族の声を聞く(ビデオ視聴) ・「命を守るために自分たちの立場でできることについて」のテーマで討議する ・教員自身が命の大切さ、命の危機に対する認識を持つ
<p>00:05</p> <p>2 ビデオを観る。</p> <p>(1) 「今から、ビデオをご覧ください。このビデオは『犯罪被害者の人権を守るために』(約30分)^(参考6)(企画 法務省人権擁護局)です。」</p> <p>(2) 「ビデオ視聴後、グループで感想も含めて話し合いの時間を持ちます。ではご覧ください。」</p>	<p>事前にビデオを視聴し、その内容を確認しておく。</p> <p>犯罪被害者の声を聞くことで、命の大切さや命の危機に対する認識を持つ。</p> <p>要点のメモをとる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・犯罪被害者・遺族の心理について ・犯罪被害者・遺族の人権について 等
<p>00:40</p> <p>3 4～5人のグループをつくる。</p> <p>(1) 「近くの人同士で4人のグループをつくってください。人数が余れば5人グループでも結構です。」</p> <p>(2) 「グループで輪になってください。」</p>	<p>近くの者同士が、4～5名1グループで輪になって座る。</p>
<p>00:45</p> <p>4 ビデオを観た感想を出し合う。</p> <p>「先ほどのビデオは、犯罪被害者・遺族の人権の保護が社会的に重要な課題となっていることから、犯罪被害者・遺族の心理等について知ることが大切であるという内容であったと思います。</p> <p>では、このビデオを観た感想をグループ内で一人2分程度、全体で10分程度で出し合ってください。」</p>	<p>互いに共感できるところ等を確認し合う。</p>
<p>00:55</p> <p>5 全体で話し合う。</p> <p>「各グループで話し合ったことを、全体に</p>	<p>各グループで話し合ったことを、全体で共有</p>

<p>発表してください。」</p> <p>「先ほどグループで話し合っていたいただいた意見は、</p> <p>でした。」</p> <p>01:15</p> <p>6 フリートークで「命を守るために自分たちの立場でできること」についてグループ討議をする。 「続いてグループで『命を守るために自分たちの立場でできることについて』フリートークをしてください。なお、後で全体討議をしますからその時の発表者を決めておいてください。時間は15分間です。」</p> <p>01:30</p> <p>7 全体で討議をする。 「先ほど各グループで話し合った内容を発表してもらいます。各グループの発表者の方は3分程度で発表してください。」</p> <p>8 全体討議のまとめをする。 「先生方のご意見をまとめます。私たち自身が、犯罪の被害にあったり、遺族になったりすることは十分起こりうることで、加害者を生み出さない等、犯罪を防ぐために自分たちに何ができるかという意識を持つこと 犯罪被害者・遺族の方々の心理や人権について正しく理解すること等、私たち自身が犯罪被害者・遺族の方々の立場に立って考えることが何より大切なのではないのでしょうか。」</p> <p>01:55</p> <p>9 まとめをする。 (1) 「本研修のねらいは、ビデオをとおして犯罪被害者・遺族の声を聞き、『命を守るために自分にできることについて』のテーマで討議し、教員自身が命の大切さ、命の危機に対する認識を持つことでしたが、いかがだったでしょうか。」 (2) 「ぜひ、本研修の体験を生かしていただき子どもたちにも、命の大切さやかけがえのなさを実感させていただきたいと思います。本日はご多忙の中ありがとうございました。」</p> <p>02:00</p>	<p>する。</p> <p>話の要点は事前にメモをとっておく。</p> <p>グループ内で「命を守るために自分たちの立場でできることについて」のテーマで、フリートークをする。</p> <p>グループ討議の内容をもとに全体で討議する。</p> <p>教員自身の犯罪被害者・遺族に対する意識の持ち方が何より大切であることにふれる。</p> <p>本研修で学んだことを確認する。</p>
--	--

(参考6)『犯罪被害者の人権を守るために』(財)人権教育啓発推進センター:約30分) 内容
犯罪被害者・遺族の人権の保護が社会的に重要な課題となっており、犯罪被害者・遺族の心理やその人権を守るためにはどうしたらいいかについて述べている。
犯罪被害者・遺族の心理については、事件直後の心理状況として、「ショック」「悲嘆」「不信の念」「否認」「感情麻痺」「感情の爆発」「過剰な警戒心」「疎外感」「焦燥感」「無力感」「絶望感」等の情緒的反応が見られるとして、具体的な犯罪被害者・遺族の声を紹介している。また、犯罪被害者・遺族の人権として、「被害回復の権利」「二次的被害から守られる権利」「知る権利」「支援を受ける権利」等をあげ、行政と民間の協力体制の必要性についても述べている。

【参考・引用文献】

- ・ (財)人権教育啓発推進センター ビデオ『犯罪被害者の人権を守るために』2004

第 部 月刊『兵庫教育』連載編

平成 18 年度 月刊『兵庫教育』連載講座
「命の大切さ」を実感させる教育プログラム

執筆者一覧

(掲載順)

氏名	テーマ	所属等
梶田 叡一	「命の大切さ」の教育を	兵庫教育大学長
藤井 美和	教育にかかわる側に問われるもの	関西学院大学社会学部 社会福祉学科助教授
上地 安昭	教育の核心として「命の大切さ」の実感を育む	武庫川女子大学大学院 教授
富永 良喜	尊い命を守るために	兵庫教育大学大学院教授 心の教育総合センター所長
加藤 寛	「人が傷つくということ」	兵庫県こころのケアセン ター研究部長
井本 智勢子	生きるってすばらしい - 今親と子と教師で「命の大切さ」を実感させる教育を推進しよう -	三木市教育長
高木 慶子	親友をなくした悲しさから	英知大学教授
皆藤 章	「生きる」在りようから考える	京都大学大学院教育学 研究科助教授
養老 孟司	いのちの大切さ	東京大学名誉教授
日野原 重明	いのちの大切さ	聖路加国際病院理事長
柳田 邦男	バーチャル映像より現実体験を	ノンフィクション作家

(注) 執筆者の許可を得て転載

「命の大切さ」の教育を

兵庫教育大学長
梶田 勲一

与えられた命を生きる私

小さな子どもの命が無惨にも奪われる事件や事故が続く。家庭でも学校でも、何とか子ども達が無事に大きくなってほしいと、祈るような気持ちであろう。勉強が出来るかどうかとか、スポーツその他の得意な面が伸びるかどうかなど、それに比べたら大したことではない。ともかく、何事もなく毎日を送ってくれ、大人になる日を迎えてくれさえしたらそれでいい、という気にもなるのではないだろうか。

このためにも、子ども達に自分の命の大切さを改めて言い聞かせたくなる。何事に付け注意深くあること、慎重であること、を強調したくなる。それと同時に、いろいろなことが上手く行かなかったり失敗に終わったりしたとしても、絶望したり自暴自棄になったりしないよう、日頃から口が酸っぱくなるほど言い聞かせておきたくもなる。

「命の大切さ」を認識させる第一歩は、与えられた命を自分自身が生きている、という事実を自覚させることである。そして、その自覚を基盤に時々刻々を大事に過ごす、という態度や習慣を育てていくことである。これは自分自身を、呼吸し、飲食し、排泄し、新陳代謝しつつ機能していく一つの生命体として認識させる、ということでもある。そして同時に、自分自身が誕生から始まって、自分という意識を持ち、成長して成人になり、歳を重ねて老齢となり、死を迎える、という人生を辿っていく存在であることを自覚させることでもある。

周囲の誰もが固有の命を生きている

そうした自己認識を土台として、周囲の友達も、親を初め家族の人達も、学校の先生達も、知り合いの誰彼も、さらには街ですれ違う人達も、それぞれが自分自身の掛け替えの無い命を生きているのだ、ということに気付かせたい。人間誰しもが、それぞれ固有の命を与えられ、その命を自分なりに生きていって、誕生から死までの人生を独自固有の形で辿りつつある、という認識を深めさせたい。

さらにいえば、掛け替えの無い命を生きる人同士が会うからこそ、どういう人との出会いも<一期一会>であるという認識を持たせたいし、親子や師弟や友人といった形でご縁のある人との持続的な人間関係が出来ているということ、運命的な絆なり紐帯として大事にする姿勢も育てたい。

そして、組織とか社会、世間とか世の中についての認識を、無機質で実体的なものとしてでは

なく、一人ひとりが懸命に自分の命を生きている人達同士の手の繋ぎ合いの姿の具現として、有機的で人間臭さに溢れたものとして、認識させたいものである。そうした基本認識に立つ時には、互いに他の人の命を大事にし合うことは当然として、一人ひとりが人間らしく生きることを互いに大事にし擁護していこうという真の人間尊重の感覚も育っていくはずである。また、他の人を「自分自身にとってどう役立つか」という視点から見るのではなく、「自分自身が他の人のためにどう役立つか」という視点から見る事が出来るようになるであろう。大乘仏教の強調してきた「菩薩道」も、アシジのフランシスコの「我を神の平和の道具になしたまえ」という祈りも、こうした基本的な自他認識が土台にあることは、改めて言うまでもない。

命の海の中で保たれている自分自身の命

人は誰しも掛け替えの無い命を生きているのだ、という自他認識、社会認識を延長していけば、自分自身の日常目にする花も木も、動物も虫も、また掛け替えの無い命を生きているという事実気付くはずである。そして例えば我々の毎日の食事は、そうした動植物の命を自分自身の中に取り込む行為に他ならないことにも気付くのではないだろうか。

人間として生まれた以上、数多くの命を日々犠牲にすることによって自分自身の命を養っていかざるをえない、という自覚からは、生きとし生けるものに対する感謝の念が生まれて来るであろう。そして、必要な最小限の範囲を越えて動植物の命を奪わないこと、さらには動植物それぞれの命が十分な形で機能し継承されていくよう最大限の配慮を払うこと、といった当為（ゾルレン）が生まれてくるはずである。

環境保護の動きも、こうした多生命の共存繁栄という基本原則を踏まえて行われるべきであり、自己中心的な、あるいは人間中心的なものであってはならない。これをひるがえせば、私という命自体が、そして人間という種（命の群れの共同体）自体が、広大な「生命の海」を浮遊する一つのエレメントである、という認識にも行き着くはずである。そして、自分自身としても、人間としても、他の諸生命に対して、いささかの思い上がりも自分勝手も、本来許されないのだ、という基本認識に行き着くのではないだろうか。

以上に述べてきたような自覚と認識を、各自の実感世界に深く根ざす形で育てていくのが、「命の大切さ」の教育のあるべき姿であろう。これこそ、教師各自が、あらゆる学習指導の場を通じて工夫し実践していくべき人間教育の基本課題ではないだろうか。

教育にかかわる側に問われるもの

関西学院大学社会学部社会福祉学科助教授
藤井美和

関係性の中で生かされる命

人は誰も一人では生きていけない。人は自分の周りの様々な関係の中で生き、その中で自分の存在を確かめ、自分の生を意味づけていく。そしてこの作業は、決してある年齢で達成され終結するものではなく、生涯を通して続く、人に与えられた最も大きな課題であると、私は考える。命や生きる意味についての問いは、様々な関係性において、その答えに近づくことができる。ここでいう関係性とは、家族や友人、社会や環境との間だけでなく、自然とのつながり、宇宙の中の自分、また自己を超えるものとの関係を含み、その関係の中の自分の存在に気付くことが、命の大切さを実感するスタートになると考える。決して人間が創り出すことのできない命、その命が今ここにあることに気付くことが「生きる」ことの課題に向き合う第一歩なのである。そしてその課題への取組には、誕生の喜び、家族・友人・社会関係の中での自己の発見といった「在る(生)もの」としての命を受け止めることと、大切な人を失うことや別れの悲しみといった「喪失(死)するもの」としての命を受け止めるという、2方向からのアプローチが必要である。

教育の受けるチャレンジ

近年の低年齢から始まる受験や競争の中で、我々の社会の持つ価値観が一つの方向 - 成績がよいとか能力が高い - に傾いていることに危うさを感じているのは私だけではないだろう。このような価値観は、病や障害を負ったとき、また高齢になり人の援助が必要になったとき、「そんな人間には価値がない」という考えを導きかねない。人が尊いのは、成績がよいとか人より秀でていからではなく、そこに存在していること自体が尊いのだということ、今の教育の中でどう伝えていくか、これは教育する側にとってのチャレンジである。誤解のないように言っておくが、勉強するなといったのではない。教養は人を生かす力である。私が危惧するのは、教育の場が、世間の価値観に乗っ取られてしまうことである。しかしよく考えてみると、このような価値観をもつ社会を作ってきたのは我々一人一人であり、この価値観は、家庭、学校、育った環境によって築かれてきたものである。この現象に目を向けたとき、命の大切さを教育することがいかにチャレンジングかという本質がみえてくる。

教育プログラムの役割

人間は、どの人も必ず死を迎える。もし、何かができることや目に見える豊かさに価値をおいて生きるなら、すべてを失う人の最期は例外なく惨めだということになる。しかし、人間の尊さ

は、もっと違うところにある。実は、教育はそれに気付くためのきっかけを与えるものではないかと思う。

認知症の家族を介護するのがたいへんであることは想像に難くない。しかしたいへんなだけだろうか？余命数年と宣告された父親と過ごす家族は、悲嘆に暮れた日々を過ごしているのだろうか？私たちは、このような人たちを、自分自身とは「別の世界の人」と捉え、かわいそうな人たちと考えてはいないだろうか。人の生き方を、自分自身の問題として捉えることなくして、子どもを教育することは難しい。「命は大切です」「どんな人も尊いです」という言葉の背後に教師の実感がなければ、この教育は無意味になる。

この教育プログラム（注）に、普段会う機会の少ない人たちとの出会いが組み込まれているのは、それによって、生きることのしんどさ、楽しさ、すばらしさを実感するための仕掛けである。残り少ない人生を生きる人の話、大切な家族を亡くした人の苦しみ、障害を負いながら自立生活をする人たち、そういった人たちを、第三者として遠くから眺めるのではなく、実際にその人たちと会って話をする。そこで得るものは、どんな言葉より力強い。なぜなら、出会った時、その人たちは「別の世界の人」ではなくなっているからである。そして教育は、子どもたちが得た実感を、これからの生き方の中にどう生かしていくかを手助けするものでなければならない。

問われるのは私たち自身

この教育プログラムを意味あるものにするために最も大切なことは、教育にかかわる者が、自分自身の死生観・価値観を構築していくことにある。私たち自身もかけがえのない存在であり、その私たちは、またそれぞれかけがえのない関係の中で生きている。だからこそ私たちは関係性を大切にしなければならない。

人との関係においては、共に喜び悲しむ以上に、謝り、赦しあうことが大切である。自分の非を認めて謝ることは難しい、謝る人を赦すこともまた難しい。しかしこういったことを通して初めて本当の人間関係が形成される。自然との関係においても、自然への畏敬の念を持ち、自然の中にある自分の小ささに気付き、自然との共存や自然破壊の見直しが必要である。また自分を越えたものとの関係から自分自身のあり方、生き方を見つめなおすことも重要である。こういった関係性から自分自身を捉えることは、年齢や立場を問わず、すべての人に必要である。

この教育プログラムは、教える側がすべてを理解した上で知識を提供するものではなく、教師も生徒も親も、皆が共に悩み考えていくものである。だからこそ、そのプロセスで、皆それぞれが自分自身を問い直すこと - 価値観・死生観の見直し - が求められるのである。

（注）「命の大切さ」を実感させる教育プログラムの URL：<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/>

教育の核心として「命の大切さ」の実感を育む

武庫川女子大学大学院教授
上 地 安 昭

確固たる教育理念に基づいた命の教育

人間にとって命ほど大切なものは他にないことを多くの人は理解している。しかし、その命の大切さを実感し命を大事に守るように常に心がけているか、と問われると疑問である。空気や水と同じように生命は当然つづくものであり、生きていることがあたりまえのことに思い過ごしているのが普通であろう。過去に生命の危機に遭遇した経験がない限りにおいてである。とくに成長期の子どもたちにとって、生命が途絶える死は遠い未来のことであって、「命の大切さ」の実感が乏しいのは発達の観点から理解できないこともない。しかし、子どもたちの命にかかわる悲惨な事件や事故、災害が多発化する今日、「命の大切さ」の教育へのあらたな取組が切実に求められているとの認識が望まれる。

「命の大切さ」の教育は、学校教育の核心であると理解する。命があってこそ、つまり命を前提に教育をはじめ人間の生活のすべてが成り立っていることは言うまでもない。子どもたちが生きるための知恵を学ぶ学校における命の教育は、教師が担う重大な責務であると認識する。教育専門家としてその役割を果たすには、教師自らが命の問題への関心と「命の大切さ」の実感を深め、確かな教育理念に基づいた教育実践に徹することが期待される。

あらためて「命の大切さ」の教育の課題を問う

1 なぜ今、あらためて「命の大切さ」を実感する教育か

今も昔も命の問題は、全人類の最大の関心事であることに異論はない。人類の生存にかかわる問題は人間の究極の目標であり永遠のテーマである。ただし、高度な科学文明の進歩とは逆に人類滅亡への危機感が年々つのる今日、あらためて「命の大切さ」を実感し命と正面向き合う教育の必要性を痛感せざるを得ないのが現実である。

2 「命の大切さ」の教育は究極の教育目標であるとの認識

「命の大切さ」の教育は、人間にとって最も尊い心を育むことであり、あらゆる教育の究極の目標であるとの認識に徹することが望まれる。

3 「命の大切さ」は体験的実感を通して育まれる

「命の大切さ」は単に知識として教えて育まれるものではない。人と人、人と他の生物、人と自然との触れ合いの中で、視覚、聴覚、触覚等、人間の五感による体験的実感を通して育まれる。

4 「命の大切さ」の教育は、子どもの発達の初期の段階に重点的に行うことが肝心である

「命の大切さ」を実感する教育は、とくに乳幼児期の子育ての段階で体感的教育として重点的に行うことが望まれる。さらにその後の発達段階を通して育む必要がある。

- 5 命は人生そのものでありあらゆる生活場面で育まれる
「命の大切さ」は、家庭や学校をはじめ子どもの生活のありとあらゆる場面で育まれる。
- 6 まずは指導する立場にある大人自身が自己の「命の大切さ」を自ら実感することが、「命の大切さ」を実感する教育へ取り組む前提条件である
自らの「命の大切さ」についての実感の持てない人は、他人の「命の大切さ」を真に尊重し、「命の大切さ」の実感を他者へ伝えることが困難である。
- 7 周囲からの愛情と信頼に満ちたかわりだが、「命の大切さ」を実感する心を育む
愛情と信頼に満ちた乳幼児期の親子の家族関係を基盤に、周囲の力で大事に育てられた子どもは、生きる喜び、つまり「命の大切さ」を実感する人間へと成長することが期待される。
- 8 「命の教育」を徹底するには、揺るぎない確固たる信念と勇気が必要である
尊い命を護るためには、生命の危機へ繋がるあらゆる悪へ挑戦する真の人間性に目覚めた確固たる信念と勇気が必要である。
- 9 地球上の人類の安全と平和は、一人ひとりの命の尊厳の精神がなければ実現しない
個人の命を尊重する精神は、家庭、学校、地域社会、国家、地球上の安全と平和を実現するための前提条件である。人命の軽視は結果的に全人類（地球）の滅亡に繋がるとの認識が望まれる。
- 10 現代の子どもたちは、「命の大切さ」を実感する生活体験が乏しい
最近の子どもたちは、生きていることの喜びとともに「命の大切さ」を実感する生活環境に恵まれることが少なく、さらに人間の死への悲愴感と喪失感を実感する生活体験の乏しい子どもたちも決して少なくない。
- 11 現代の子どもたちは、現実と空想の世界の区別がつかない生活環境に浸っており、人間の生と死を現実的に捉えることが困難な状況におかれている
IT時代のメディア文化に親しんで育った現代の子どもたちは、「人の生と死」を身近な現実的出来事として受け止めることが困難な状況におかれている。つまり現代の子どもたちは、バーチャル（仮想）とアクチャル（現実）の世界の区別がつかず混乱した状態にあり、人間の死に対する現実感覚の喪失が大いに懸念される。

まとめにかえて

「命の大切さ」の教育は、人間教育の究極の目標であり実に遠大なテーマである。同時に人類の存亡にかかわるきわめて切迫感のある現実的問題でもある。とくに人類の危機の時代と言われる今日、われわれはこの命の教育の問題から目を逸らすわけにはいかない。とくにこれからの未来を生きる子どもたちの教育に携わっている教師は、この命の危機の現実を真摯に受け止め、尊い子どもたちの命を守り育む重大な責務を負っているとの使命感を、あらためて認識する必要があるのではなかろうか。

尊い命を守るために

兵庫教育大学大学院教授 心の教育総合センター所長
とみなが よしき
富永良喜

わが国は今岐路に立っている。

少年による強盗などの凶悪犯罪は、ここ10年増加している。一方で、殺人事件の件数は戦後減少傾向にありここ数年は横ばいである。また、わが国の自殺者は年間3万人を超えている。自殺の人口比率では、男子は世界第3位、女子は第2位である。児童虐待の数は、3万件を超え、15年前の30倍である。

このような現状に、楔をうつために、「尊い命を守るために」という教育プログラム案を提案した。

命を守るための知恵と態度を育成する

命はかけがえのないものであり奪われると決してよみがえることはない。しかし、子どもたちの身近にいじめ・暴力・犯罪・虐待・DV等の命をおびやかす行為が存在する。これらに対して、未然に防ぐ方法を考えたり、対策を講じる必要がある。また、地震や水害等の自然災害に対しても、その被害を最小限にいとめる知恵を学ばせる必要がある。

命をおびやかす行為に対しては、単にそれを避けるだけではなく、毅然と立ち向かい克服していかうとする態度を養い、そのことをとおして、子どもたちがかけがえのない命を実感し、自他の命を守っていかうとする態度を育てる必要がある。

(『命の大切さ』を実感させる教育への提言)(兵庫県教育委員会)6p.より)

この提案では、大きく二つの柱を立てた。一つは、「子どもを被害から守るために」、もう一つは「他者を傷つけない、自分を傷つけない力を育むために」である。前者の代表は、ヒヤリハットマップ作りなどの安全教育や防犯教育、そして防災教育である。後者は、いじめ防止教育、ストレスマネジメント教育、暴力防止教育、犯罪抑止教育、自殺防止教育などである。

人を傷つけない心を育む

(1) 愛されているという実感

加害行為とは、他者の人権を蹂躪する行為であり、それは、安心な生活を侵害するものである。いじめ防止教育や暴力防止教育を展開する場合、暴力やいじめなどの加害行為をする人の心理的背景を考える必要がある。家庭裁判所が少年による重大事件を分析した結果、非行少年には「愛されているという実感」が欠如していることがわかった。詰まるところ、日常の「愛されている」という実感こそ、いじめや暴力を抑止する力になる。そして、そのかわりができるのは、家族といった身近な人である。しかし、ここ10年の虐待の件数の増加をみると、家族の抑止力を期待する前に、社会的な施策の展開が必要なことがわかる。

そして、加害少年の過去をみると多くは、身近な人から、暴力（言葉による暴力も含む）や支配を受け、それが、「しつけ」や「教育」の名の下で行われている。不幸なことに、大人は、虐待をしているという認識がない。「大人は愛しているが、子どもは愛されているという実感がもてない」ということが、加害少年の背景であろう。では、どのようなことから始めるべきなのか？

（２） 知ることから始めたい

まず、知ることから始めたい。いじめ被害にあった子どもの声を聴く。学校単位で、「いじめ被害・加害調査」を実施することもあるであろう。被害にあった者の苦しみが伝わるようなアンケートを実施する。そして、「この学校で、いじめ被害にあつて苦しんでいる人がいます」と資料に基づいて伝える。また、伝えるだけでなく、いじめ加害や暴力ではない解決の方法があることを提案する。子どもにわかりやすい紙芝居や寸劇などを活用するのも一つの方法である。

また、小学校高学年から、「暴力とは何か」、「虐待とは何か」を年齢に応じた教材を用いて伝えたい。暴力には衝動的暴力と道具的暴力があること、前者はストレスマネジメント教育が有効であり、後者は、人の支配欲求を理解する心理教育が必要だろう。

高校生には、犯罪被害にあった人の声を聴く。犯罪でかけがえのない家族を奪われた人の声を聴くことも必要である。

このような暴力防止教育、ストレスマネジメント教育などを学んだ子どもたちが、大人になる。もちろん、子どもだけの取組ではなく、保護者や地域を巻き込んだ取組に展開する必要がある。

子どもを被害から守るために

（１） 防犯教育と防災教育

ヒヤリハットマップの作成や不審者から身を守る方法などの防犯教育と、災害の被害を最小限に抑える防災教育である。兵庫県では、阪神・淡路大震災の教訓から、生きた防災教育が展開されている。被災した地域を歩き、住民から聴き取り調査をすることで、災害を最小限に抑えた知恵を学ぶ教育実践が展開されている。

（２） 災害・事件と心のケア

また、不幸にして被災や被害にあったときに、回復する方法を事前に身に付ける心の予防教育も展開されつつある。トラウマや喪失から人はどのように立ち直っていくのか。悲惨な出来事から何を学び、人類は進歩してきたのか。どのようなかわりか、二次的被害を与えるのか。年齢に応じた教材が工夫開発されつつある。

地域のみならず展開しよう

「トライやる・ウィーク」は、地域の人たちを巻き込んだことが功を奏した。教師がすべて教材を開発するのではなく、地域の知恵を活用したい。スクールカウンセラーと協働で、ストレスマネジメント教育や暴力防止教育を展開してほしい。本年度は、様々な授業案や教育プログラムをインターネットなどで公開したい。また、心の教育総合センターに、良い教育実践を届けてほしい。

「人が傷つくということ」

兵庫県こころのケアセンター研究部長
加藤 寛

命の大切さ

先日、子どもの入学式に出席したら、校長先生の挨拶の中でこんな一節を聞いた。その校長先生は学校生活での注意点を挙げられた後、「でも、もっと大切なのは、ひとりひとりが命を大切に思う気持ちです。家族の、お友達のそして自分自身の命を大切にすることが何よりも大切です」という言葉で祝辞を締められたのだった。「こういうところに、あの委員会の活動は、貢献するのだな」と思い、少々妙な気分だった。というのも『命の大切さ』を実感させる教育プログラム構想委員会」の委員になって欲しいという依頼が来たときには、とても不思議な気分だったからである。まず「命の大切さ」を教育現場で取り上げることが必要なのかと思った。こういうことは家庭で教えるべきなのではないか、自分の子どもの頃にそういうことを習っただろうかと考えて、まず迷った。そして「実感させる」という言葉にも引っかかった。「子どもたちが実感する」というように主体が子ども側にあるのではなく、「実感させる」とはかなり押しつけがましいなど、正直なところ思った。何度も固辞しようとしたが、断り方が下手だったのか、結局引き受けてしまった。

その後、担当者や他の委員と話すうちに、教育関係の方たちはとても強い危機感を持っているのだということが伝わってきた。子どもたちが被害に遭い、そして被害を負わずような事態に社会は注目し、その対策を学校に求めているのである。そして、私のような教育の門外漢を、委員の一人にした理由もわかった。というのも、私はこの10年間日常的に、傷ついた人たちに接し治療をしてきたので、被害者の苦悩を知る者として、それを子どもたちに伝える方法を考えて欲しいという要請だった。

トラウマの本質

様々な犯罪、事故、災害、暴力などによって、人の心は傷つく。それを「トラウマ」と呼んでいるが、この言葉はいつの間にかとても有名になってしまった。最近では、子どもの漫画にも出てくるし、深夜のバラエティ番組でタレントさんが「それが私のトラウマや」とおもしろおかしく使っている。実際、トラウマをもたらす事象は社会には溢れていて、ある調査では男性の約50%、女性では約40%が何らかのトラウマ体験をしていることが報告されている。しかし、いくらこの言葉が有名になっても、トラウマ体験の本質は被害に遭った人にしかわからない。被害者が現場で感じた恐怖、無力感、残酷さは百万言を弄しても伝えられるものではない。講演でトラウマに

ついて話すときには、私はある写真を見せることにしている。それは、スマトラ沖津波の直後に撮影されたもので、浜辺にたくさんの瓦礫が打ち寄せられているように見える写真である。それをよく見ると、瓦礫と見えるものは、ほとんどが遺体で、腐敗して原型をとどめない夥しい数の遺体がそこに横たわっている。戦争や災害の本質はこうした死である。メディアで、こういう遺体の映像が登場することはないが、現場にいた被害者たちは、その情景を目の当たりにしているのである。ましてや、彼らの味わった恐怖感など、伝えられるはずもない。

私は毎日の診療で被害者と向き合っているが、いつも念頭に置いているのは、被害者が経験したことのほんの一部も、残念ながら私にはわからないということである。このことを忘れて共感を示したとしても、被害者には虚しく感じられるだけだろう。支援する者は、常にこの現実を意識しておく必要がある。

子どもたちに伝えられること

命は大切に尊いものである。こんな当たり前のことを、どのように子どもに伝えればいいのか、端的に答えられる人はいないだろう。逆に「なぜ人を殺してはいけないのか」と問われれば、ある人は宗教の教えを持ち出すかも知れないし、他の動物と比較して人間だけが同じ種の仲間を殺すのだという動物学の知識を持ち出す人もいるかも知れない。しかし、抽象的な考え方をいくら説いても、子どもには伝わらないだろう。

私は「命の大切さ」を言葉を尽くして説明しても、結局は何もわからないのではないかと思う。むしろ死によって何がもたらされるのか、遺族はどのくらい悲しみ、どのように人生が変わるのか、あるいは死に直面するような体験をした場合に、どのような苦しみを被害者は味わい続けるのかを、伝えていく以外には、方法がないのではないかと思う。

ベトナム戦争がテレビで茶の間に伝えられたことで、アメリカ社会は戦争の残酷さを知り、それが反戦運動に繋がった。そのような社会の反応を恐れて、最近の戦争では情報が厳格に管理されているのは有名な話である。残酷で凄惨なものには、社会全体が意識的に目をそらそうとするのである。しかし、犯罪や大事故の被害者が、勇気を持って声を上げてくれているお陰で、我々は彼らの苦しみの一端を垣間見ることができる。ある遺族がこういうことを言っていた。「私は事件後、自分のプライバシーを切り売りして遺族の現実を伝えてきました。そうしないと忘れ去られるだけだと思ったからです」。彼らの現実には、われわれは目をそらすことなく向き合わなければならない。こうした悲しく残酷な情報を子どもたちに伝えていいのか、大人は迷うかも知れない。しかし、いつ降りかかるかわからない災難に直面したときにそれを乗り越え、そして他人に被害を与えないような配慮ができるためには、人が傷つくということの現実を知らせるしかないと思う。

生きるってすばらしい - 今親と子と教師で「命の大切さ」を実感させる教育を推進しよう -

三木市教育長
井本 智 勇 子

はじめに

過日、『子ぎつねヘレン』を観て、その後映画の原作者竹田津実先生の講演を聴く機会を得た。障害のある動物や傷ついた動物の命を何としても助けたいと頑張るけなげな子どもたちの姿がそこにあった。

「子どもを大きくすることは簡単だが、大人にすることは難しい」

数多くの動物を育てた経験から語られる先生のこの言葉に、人間の子育ての有り様を思わずにはいられなかった。

「命の大切さ」を実感させる教育を家庭との連携を深めながら、学級の中で「親子学習」として年間プログラムに意図的、計画的に組みこもう。

家庭はあらゆる教育の原点と言われる。命を大切にする感性を育て、かけがえのない命に気づく場、「老病」「生死」に直接出会う機会や豊かな体験の場、世代を超えたふれあいの場など、家庭はまさに「体験の宝庫」である。命の教育を推進するにあたっては、家庭との連携はどうしても避けて通れない。

< 「親子学習」を推進する理由 >

少子化、都市化、情報化など急激な社会の変化に伴い人間関係が希薄になり、直接体験や自然とのふれあいの機会が極端に減少し、親も子も教師も命の重みを感じる感性が弱まってきている。

かつては年齢の違う子どもたちが群れて広場や土手をかけずり、自然を相手に終日遊び回っていた。今や、室内でゲームやテレビ、パソコンに興じ、とりつかれたように携帯電話でメールを打ち続ける子どもたち。連日のように報道される子どもにかかわる殺人事件。陰湿ないじめや体罰、虐待と、子どもたちを取り巻く環境はまさに極寒の様相を呈してきている。

「先生、子どもに『いただきます』『ごちそうさま』を言わせないでくださいね。うちは給食費はきちんと払っていますから、食べるのは当たり前でしょ」と訴える親。紙おむつをつけた5歳児が増えている。トイレトレーニングが面倒で、紙おむつの方が便利と、そのまま入園させてくる親。大人になりきらない親が増加しつつある。教師も然りである。教師自身が「命の大切さ」をどう捉え、どう生きているのか。

今、子どもたちを取り巻く大人の生き方そのものが問われている。人間は経済的、物質的に豊かになればなるほど批判の対象を外部に求めるという特性を強く持ち、過密社会になればなるほど人間関係が希薄になりやすい特性を持つと言われる。だからこそ、「命の大切さ」を実感させる教育を家庭との連携を密にし、「親子学習」として意図的、計画的に年間プログラムにとり込み、親も子も教師も共に体験し、同じ思いを分かち合い育ち合うことが必要ではないだろうか。

< 4月のPTA学級集会の中で計画しよう >

4月当初の学級集会は、教師の1年間の学級経営方針を発表し、親とともに「この方向で共に育て学び合う」という心合わせをする場である。この機会に「命の大切さ」を実感させる教育を進めるため、保護者とともに以下のことにぜひとも取り組んでほしい。

今なぜ、「命の大切さ」を実感させる教育が必要なのか。

学校教育だけでは限界があり、家庭との連携でより深められること。

年間カリキュラムづくりについて話し合い計画を立てる。

- ・学校（授業）で計画的に進める内容
- ・家庭で力点をおいて取り組んでいただく基本的な内容
- ・親子で共に学び「親子学習」として計画していく内容。「命の大切さ」を実感させる学級PTA行事など

<これだけは育てよう……親との心合わせに>

自尊感情を育む

第一歩は、親子の間に信頼を築くことである。その中で、自分への信頼、他者への信頼、命への信頼、人生への信頼が育つ。十分な愛情の中で子どもは「愛されている」「必要とされている」という自己有用感や「自分が好きだ」「自分も頑張れる」という自己肯定感が生まれる。また、「やった！」という達成感や成就感が味わえる多様な体験も大切である。

五感で感じる感動体験や自然体験の場を準備する。成功体験と同じくらいの小さな失敗の体験を積ませる。

命を大切にする感性は生まれながらに完全なものとして身につけているものではない。それは五感を通して自然や社会における様々な体験を通して身につけ肉化され、一人一人の感性として形成されていくものである。子どもはたくさんの失敗をする中で一つ一つ学んでいく。また、発達段階を見極め、子どもに任せ決定させていくことも重要である。子どもに選択させ失敗を乗り越えていく力（耐性）を身につけさせたい。

「親子学習」（授業）の取組

「命の大切さ」を実感させる教育への提言の中の実践編には、教育プログラムのテーマとして「誕生の喜びと感動」「成長の支援への感謝」「限りある命の尊さ」「理解し合う心に支えられた命」「尊い命を守るために」が挙げられている。子どもたちの発達段階に応じてこれらの中から、もっとも適切なテーマを設定し、「親子学習」を準備してほしい。

おわりに

親と教師が子どもたちとともに「命の大切さ」を実感させる教育を実践する中で「大人」としての成長があり、「生きるって、すばらしい」と感動する喜びがある。また、たくさんの命をいただいて生きていることへの感謝や遠い先祖から脈々と受け継がれてきた「つながりのある命」を感じ、「生かされている命」の重みを体感することが今求められている。

参考文献

- ・「生き方の道標 エリクソンとの散歩」佐々木正美著（子育て協会）
- ・「今からでもできる 人格の土台をつくる子育て」村本邦子・窪田容子共著（三学出版）

親友をなくした悲しさから

英知大学教授

高木 慶子

「Kさんの手紙を通して知る『命の大切さ』」

教育現場で、児童や生徒に「命の大切さ」をどのように実感させるかについては、多くの専門家によって研究され、また、アンケートなどを駆使しての実践事例なども提示されていますが、教育現場の先生方にとって問題なことは、どのような教材を使用するかということではないかと考えます。

そこで、ここではたいへん有意義な教材になると思われまます一通の手紙を紹介します。Kさんは大学一年生の時、親友を交通事故で亡くしました。Kさんの許可もいただいておりますので、ご自由にお使いください。

【手紙 その1】命は自分一人のものではない

今日は、僕の心に少しの変化がありましたので、手紙を書くことにしました。

A君が亡くなって5か月になり、夏休みも終わりました。大学生になって初めての夏休みというのに、ほとんど外に出ることもなく家にいました。あんなに海と山の好きな僕でしたが、自分でもわからない程、落ち込んでどうしようもありませんでした。

友人を亡くすことが、こんなに辛く悲しいこととは思っても、想像したこともなかったので、自分の中に起こる大嵐のような激しい怒りと悲しさで、心が一杯になり、僕は気が狂ってしまったかと、本気で心配になりました。

高木先生は、この間も、親しい友人を亡くした人の心の状態を説明してくれて、今の僕の感情は人間にとって自然な心の動き、健康な人の状態とか言ってくれましたが、しかし、今でも僕の胸には怒りと空しさが一杯で落ち込んでいます。

そして、事故を起こした加害者に対して、激しい怒りがありますが、でも時々自分も加害者になる可能性もあると気づき、事故だけは起こさないようにと、気を付けています。

3日前、Y君が家に来てくれました。僕が相変わらず落ち込んでいたので、「もう、5か月になるだろう、元気を出せよ」と言ったので、僕はたいへん腹が立ち「俺の気持ちなどわかってたまるか」と言い返したら、Y君は「しっかりしろよ」とどなりながら僕の頭をたたき、そして僕の肩を抱いてくれました。僕は声を出して男泣きに泣きました。Y君も一緒に泣いてくれました。Y君は、本当にいい奴だと思います。僕のことを本気になって心配してくれている友だちがいるのだから、僕も元気になりたいと思うようになりました。

A君の分まで生きなければならないと思うと、やはり頑張るしかありません。

高木先生、ご心配をおかけしましたが、少し元気になったような気分になりましたので、ご安心ください。両親は、今でも僕のことをたいへん心配しています。弟が今も僕の部屋を覗きに来ては、心配げに声をかけてくれますが、僕が「うるさい」と怒った声で言うので逃げて行きます。

先生、両親と弟に僕が少しは元気になっていると伝えてください。そうすると両親も弟も少し

は安心すると思いますから、お願いいたします。K・Sより

【手紙 その2】命のすばらしさは、赦し合うことにある

先日電話で話しましたが、A君の両親から頼まれて、加害者とその両親に会いに行きました。ともかくたいへん辛いことで、なかなか足が動いてくれないように感じました。

家の前に行った時、不思議と落ち着きましたが、加害者とその両親の顔を見た時、気持ちが動揺してどうなるかといへん心配でした。しかしすぐに落ち着くことができたように思います。それはA君の両親からのメッセージをすらすらと言えたからです。3人はその間、ずっと畳に頭を付けていました。僕もとても辛かったです。僕からの話が終わると、両親は泣きながら「赦してください」と何回も何回も云われました。彼も真っ青な顔で「済みませんでした。済みませんでした」と繰り返していました。

僕はどうしたらよいのか、本当に困りました。「A君の両親に伝えます」と、約束して帰ってきました。考えてみるとあの加害者となった彼は悪いことをしようとして事故を起こしたのでもないのに、非常にかわいそうだと思いました。でも事故で死んだA君のことを思えば、たいへんなことをした人であることには変わりないのであります。

ともかく、A君の両親は本当に偉大な人だと思います。もし僕が両親だったら決して赦さなかったと思います。自分の子どもを死なせた「加害者を赦す」と伝えて欲しいと友人の僕にメッセージを託した両親がいることに驚いています。僕も将来、親になった時にこのような人になりたいと思っています。

高木先生「人を赦す」ことは本当に難しいことですね。でもこのことがあったから僕も「赦すこと」の意味を考える機会が与えられたと思います。また加害者の彼とも会いたいと考えています。

いろいろ心配をかけましたが、今はまずまずの元気であることをお知らせいたします。K・Sより

まとめ

命は自分だけのものではないことを、友人を亡くしたKさんの悲しみ苦しみから感じ取ることができるのではないかと考えます。お友だちの死がそれ程に強い悲しみや苦しみをもたらすのでしたら、家族、特に両親の嘆き悲しみはどうでしょう。

また、子どもを亡くした深い悲嘆を感じていても、加害者を赦したAさんの両親の心にある勇気と寛容さこそ、今の世界にとって大事なメッセージではないかと思えます。現代社会では、人を赦すことができず、そのために戦争が絶えません。国と国との戦争をなくすためには、個人と個人の間における赦し合いがあってはじめて、平和が訪れるのではないのでしょうか。戦争こそ「命を尊ばない行為」です。人を赦す姿にこそ、生きていることのすばらしさを見るのではないのでしょうか。この両親の姿に、真の人間の親としての生き方を感じ取ります。加害者に自分の子どもの分まで生きていて欲しいとの希望を託される、その姿こそが、現代社会に最も必要な「命の大切さ」を見せてくださっている人のモデルではないのでしょうか。

「生きる」在りようから考える

京都大学大学院教育学研究科助教授

皆藤 章

人はみな、「可能性」を生きている。たとえ、生物学的にみて、長ずるにつれ衰え死に向かう存在であるとしても、人は機能のみにて生きるのではない。ここで可能性と言うとき、ライフサイクルのさまざまなステージでその内容は異なってくるという考えもあるだろう。すなわち、子ども時代は子どもなりの可能性があり、おとなになればそれなりの可能性があり、老いればまたそれなりの可能性があり、といった具合である。たしかに、80歳になれば子ども時代に可能であったたくさんのことは、もはや実行不可能である。100mを全力で走るなどできはしない。それでもわたしは、老いても100mを全力で走ることはできると考えている。実際にそれが可能かどうかという問題ではなく、100mを全力で走った体験そのものは老いの内に「実在する realize」と考えるのである。

このようにみると、老いの内なる可能性はすばらしい。老いはライフサイクルのほとんどのステージを生きていることに気づかされる。老いの可能性は体験の実在性にあるのである。老いの内には、人間の営みのほとんどが体験として実在している。そこには当然のこととして、命の大切さの体験も実在している。この可能性を活かすためには、それをいかに語れるかが重要である。そして、それをいかに実感をもって聴けるかが重要である。そのためのプログラムが必要になる。まずは、子どもが老いと出会う機会が必要ではないだろうか。たとえば、子どもたちと80歳を生きる人たちが、ひとときを共に過ごすことができるようなプログラムである。そのとき、そうしたプログラムはさりげなく進行し舞台を支えるものであってほしい。プログラムが前面に出ると、子どもから自発的、主体的に学ぶ機会を奪ってしまうことに繋がりがかねないからである。

それでは子どもの可能性とはどのようなものであろうか。事例をひとつ（『生命ある限り』E・キューブラー・ロス著、産業図書）。精神科医キューブラー・ロスは、第二次世界大戦下、若き医学研修生として戦地に赴いていた。彼女は思っていた。どうして世界は、この世を破滅に導こうとするヒトラーを生んだのであろうか、と。そして彼女は、ある戦場でひとりのユダヤの少女に出会った。その少女の家族は全員、ナチスによってガス室に送られていった。その少女だけが奇跡的に助かったのである。そして少女は、ドイツ軍の傷病兵の看護に献身的に生きていた。キューブラー・ロスはそのとき思ったという。戦争によって家族全員を殺されたこの少女はナチスを

憎んで当然なのに、どうしてこのように献身的に看護ができるのだろうか、と。

たとえばここで、その少女は家族を殺されたことから分かるように、命の大切さを知っていたからだ、などと説明したとしても、そのような説明は何の役にも立たない。さらにまた、これで命の大切さを教えたと思う教師がいるとしたら、ほんとうにどうかしている。命の大切さは、知的には理解できない。このようなことは、道德教育の形骸化を想ってみるとき、その感をいっそう強くする。命の大切さは子どもの実感からこそ生まれてくるものであって、知的に理解するようなことでは意味がない。「ひとりの人間の命は地球より重い」といった有名なことばがあるが、現代の子どもにこのことばで命の大切さを教えようとしても無駄であろう。子どもはこれをひとつの名言としてしか理解しないのではなからうか。このことばが実感をともなって体験されるような在りようは、教育のなかでいかにしてプログラムできるのだろうか。

さて、先の話に戻って、キューブラー・ロスはどこから何を学んだのであろうか。自身の疑問にどのような応えを得たのであろうか。彼女はこう語っている。人間のころには、世界を破滅に導くような潜在的なヒトラーも住んでいれば、貧困にあえぐ土地で死に逝こうとする人に生涯を捧げる献身的なマザーテレサも住んでいるのだ、と。わたしは、キューブラー・ロスのこの語りは彼女の実感をともなった体験であると思う。まさに生と死が隣り合わせに在る狭間でキューブラー・ロスがつかみ取ったひとつの人間知である。

ユング心理学の概念に「元型」というものがある。こころの深層において人間をある行動へと向かわせる様式を言う。この考えからみれば、キューブラー・ロスは人間の内には「ヒトラー元型」も在れば「マザーテレサ元型」も在ることを示唆したとも言える。

現代の教育においては、マザーテレサ元型が活性化するようなプログラムが必要ではないか。それが具体的にどのような内容になるのかは分からない。ただわたしは、教育に携わる者ひとりひとりが、子どもの内にはマザーテレサ元型が生きていることを、しっかりとこころに刻むことがまずもって大切であると思うのである。これは、ひとつの子どもの「可能性」と言える。わたしたちは、差別やいじめなどといった在りようでヒトラー元型がうごめく様相を日々痛恨の思いで体験している。この現代においてなお、マザーテレサ元型が生きる様相をいかに体験できるのか。世界一の長寿国であるこの国は、命の大切さを知る人たちの努力によって築き上げられたのだろうか。真の意味の命の大切さを知る営みはこれから始まるのではないだろうか。現代教育の至上の命題である。

いのちの大切さ

東京大学名誉教授
養老孟司

いのちの大切さ、と人々はいう。私はいのちという言葉を使わない。代わりに「生きもの」という。生きもののほうが具体的で、なにを指すか、はっきりしている。いのちという言葉はもっと広い意味を持っていて、いのちの源というように、生きている活力のようなものを含んでも使われる。文部科学省が「生きる力」といったのも、いのちと関係するのかもしれない。

私がこの言葉を使わないのは、この言葉が自分の議論に適切ではないと感じるからである。いのちは概念的な言葉で、概念を大切にするのは危険である。「生きものを大切に」といえば、具体的だからすぐに反論が出るであろう。そんなこといっても、人はウシを食べ、ニワトリを食べるじゃないか。反論が出るからこそ、生きものと表現したほうがいい。いのちと概念的に表現すると、そこをごまかすことになりやすい。でもいまはそこをごまかして済む時代ではない。生きものが大切だということを、子どもにきちんと教えられるようであれば、「いのちを大切に」などといえない。

われわれはウシを殺して食べ、ニワトリを殺して食べる。それどころではない。日本人は魚を好んで食べる。それが健康食だというので、いまや欧米人も魚を多く食べはじめている。日本の商社よりも、ノルウェーの会社のほうが、魚を高く買い付ける。そういう記事が新聞に出る。マグロは絶滅に瀕しているという。将来マグロの絶滅は日本人のせいになるであろう。

いのちを大切に、と呑気にいっている段階ではない。生きものを大切にしなければならないのである。ところがそうすると、昆虫採集は残酷だ、禁止だという。困ったものである。こういう目立たない生きものは、捕まえて調べていなければ、いなくなったのかどうかすら、わからないではないか。生きものを大切にするには、生きものについて、よく知らなければならないのである。ウシを飼い、ニワトリを飼い、魚について知らなければならない。沖合いで網を入れ、魚を取る。魚を食べている人たちが、魚ではないどれだけの生きものが、網にかかって殺されているか、ご存知であろうか。それでも人々は「いのちを大切に」という。それをいっておけば、あとは私のせいじゃない。そう思っているのではないか。そう疑う私は、意地が悪すぎるのであろうか。

見えないところに、どれだけの生きものがいるか。それをお考えになったことがあるだろうか。考えているはずがない。私はそう思う。見えない世界の生きものについて、考えたことがあるなら、日本中がこれだけコンクリート詰めになるはずがない。どれだけのミミズを殺し、モグラの

住居を奪い、セミやオケラの世界を潰しているか。そういう目に見える生き物がじつは問題なのではない。土中の細菌、カビ、菌類の世界について、われわれはほとんどなにも知らないといって過言ではなからう。その土に化学肥料をまき、除草剤をまき、殺虫剤をまき、拳句の果てにコンクリート詰めにする。それで「いのちを大切に」という。そりゃ聞こえませんが。

いのちを大切にしていないのは、子どもではなく、大人である。子どもはそれに影響されているだけである。その子どもが三十万円出すから、母親を殺してくれと頼む。頼むほうも頼むほうだが、引き受けるほうも引き受けるほうである。大人の鑑ですな。本気で考えると、背筋が寒くなる。国土の一分をゴルフ場にしようとしたのはだれか。ホリエモンを生み出したのはだれか。金さえあれば、できないことはない。そう思わせたのは、だれか。少なくとも子どもに責任がないことは明らかであろう。

いのちの大切さ、と聞くたびに、じつは腹が立つ。自分がやってもいけないことを、標語にするんじゃない。この問題を解決するには、どうすればいいか。モノに即して具体的にいうなら、答えは簡単である。世界が石油切れになればいいのである。石油が切れれば、物流が不自由になる。物流が不自由になれば、自給自足しかない。地産地消をしようと思ったとたんに、生きもの大切さがわかるであろう。工場による分業は、運搬の費用が安くつくから可能なのである。物流が高価になれば、安くて重いものは運べなくなる。相対的に値上がりしがひどいからである。食料はその典型であろう。それなら人は食料のあるほうに移動するしかない。食料とはなにか。植物を含めた「生きもの」ではないか。その生きものが栄えている土地こそ、食料が豊かな土地である。

都会の人が生きものを大切にしなくなるのは、一種の必然である。頭で考えることしかしないからである。頭で考えること、つまり意識には、どれだけの歴史があるか。人類が現在のような意識を持ってから、たかだか五万年であろう。それに対して、生きもの歴史は、多細胞の生物が生じてから五億年以上になるはずである。それなら意識なんて、とんでもない新参者である。新参者に偉そうなことが可能なのは、石油エネルギーがタダ同然の値段で使えるあいだに過ぎない。

個人的には、まず田舎に行くことであろう。いまは田舎が田舎ではない。それなら頭のなかに田舎を取り戻すことである。そんな説教をしなくたって、じつはだれでもわかっていることであろう。身体を使って自然のなかで働けば、外からのエネルギーなしに、人にはどの程度のことか可能か、それがわかるはずである。それを体験すれば、人々はいまよりはるかに謙虚になるであろう。それをしないのは、怠けているだけのことである。怠けることを続けるなら、石油切れを待つしかない。

いのちの大切さ

聖路加国際病院 理事長
白 野 原 重 明

2006年は、いじめや子どもや大人の自殺、他殺が続き、この年の後半からは新聞やテレビには悲惨なニュースが重ね重ね報道され、一方、また米国の対イラクへの対応で、平和の夢が完全に崩れた中に年を閉じました。

何とか、この2007年という新しい年こそは平和への扉が開く年としたいと考えています。

さて、いのちを大切にすることは人間の歴史が始まってからの大切な命題でしたが、物質文明が高速度で展開され、文明生活の中で人間の心がないがしろにされるようになったのです。

人間の生命は有限で、いくら医学が進歩しても、死は必ず来ます。死をどうよく迎えるか、最後に自分が生まれてきたこと、皆さんと一緒に生活できたことは感謝ですと、一言でも「ありがとう」の言葉で別れの手を差し出すことができれば、それは死んで行くその人だけでなく、遺される人がそれから力を得ることができ、別れの悲嘆から早く解放されることができるのです。

シェクスピアのいう「終わりよければすべてよし」となるのです。

ところで、いのちの大切さについては、去年は方々で語られ、いのちの重要性が説かれました。しかし、いのちとは何かの説明がなく、目に見えないいのちの取り扱い方が誰にも分からなくなってしまっているのです。

私は物心のついた小学校の四年生、10歳の子どもに「いのちとは何か」をこう説明しています。

いのちは見えないもの。それは風のように、その影としての梢のゆらぎや、雲の流れていることの本体は頭では分かるが、その本体を心で感じることは難しいものです。

しかし、いのちは君たちがいつも持っている、今も持っていて、そしてそれを自分のために使っているのではないかと。

心臓はいのちを保つために、脳に酸素と栄養を血液によって送って人間が考えることができるようにさせ、同じく手足に血液を送って動かせるようにしています。いのちを支えるのに心臓はポンプの働きをしています。しかし、心臓がいのちではありません。

いのちは自分でどうにでも使える自分が持っている時間なのです。そう10歳の子どもへ語り、今日は朝から何をしてきたかを尋ねます。彼らの言うことを聞くと、それは全て自分のために使った時間で、自分のために勉強し、自分のために遊び、自分のために食べ、眠っているのではないかと話すのです。

自分の持っている時間が、君たちのいのち、それをどう自分以外のために使うかを考えて作文を書いて私に送って下さいと言います。

10歳の子どもたちには時間としてのいのちが実感され、そうかと同意してくれ、そのいのち、

草木のいのち、動物のいのち、人のいのちを大切に生きていくように私は勤めるのです。

私はいのちの大切さを多くの人々に知ってもらおうとともに、自分に与えられたいのちという時間を、どのように自分でプランをして実行するかということの重要性を、日本だけでなく外国でも説いてきました。

私は老人にも若い人にも、いのちの重要さとその使い方を話してきましたが、老人は、その長い人生の中で、いくつもの失敗をしてきているので、その反省を、若い人に伝えて、同じ過ちを若い人にさせないようにする使命があると思うのです。

人のいのちを大切にするとはいくつもなく反対に、日本は第二次世界大戦には、ドイツ、イタリアと組んで、英米、オーストラリアなどに対して戦争を始めたのです。

日本は昭和12年に盧溝橋事件をきっかけに中国で戦線を拡大したり、また、昭和16年にはハワイの真珠湾に停泊中のアメリカの軍艦を抜き打ち的に爆破したりして太平洋戦争を始めたのです。

日本軍は、戦線を東南アジアやオーストラリア近くにまで拡大し、遂には米軍により、日本国内各地に大空襲を受け、最後には、広島や長崎への原子爆弾の投下を受けて、日本は完全に敗退して終戦となったのです。この戦争を体験した老人、つまり75歳以上の高齢者は、戦争についての正しい知識の全くない子どもや孫に戦争の悪について正しく伝える義務があるのだと思います。

第二次世界大戦を最後に、21世紀は平和の世紀となることが世界中の人々により望まれていたのに、21世紀になっても世界各国で戦争やテロが引き続き行われ、数え切れぬほどの人々が死んでいます。

日本やその他の国が冒した罪をもっと悔い改め、人間のいのちの大切さをよく理解した上で、このような戦争やテロが行われない世界を作ることが、これからの子どもや孫の時代に期待されるのです。

そのようなわけで、戦争を経験した日本の老人は、もっともっと子どもや孫に接近して、戦争を避け、平和をもたらす精神を伝えるべきです。

いのちの大切さとその使い方を次の世代の人々に伝えるために、私は、5年前に「新老人の会」を計画し、今日本中だけでなく、米国、オーストラリア、さらにはメキシコ、韓国などにこの運動を広めようとしています。

いのちを愛する精神は、人間の生命だけでなく、地球上の自然を愛する、つまり草木を愛する、そして動物を愛する心が、人を愛する心と共に、めいめいの心に養われなくてはなりません。

このいのちを愛する運動が広がれば、いじめもなくなり、戦争もなくなることが期待されるのです。

私は愛の運動をますます世界に広げるために95歳を過ぎてからも許されるいのちを精一杯に使って前進したいと思います。

バーチャル映像より現実体験を

ノンフィクション作家

やなぎ だくに お
柳 田 邦 男

最近、赤ちゃんの出産についての本の出版記念会があり、ちょっとした縁があって参加した。

会場は東京郊外の JR 国分寺駅につながったビル内にあるホールで、集まったのは、幼い子どもや生まれて間もない赤ちゃんを連れた親たちが大半を占めていた。妊婦もいた。というのも、出版された本が、国分寺市で開業助産婦を営む矢島床子さんの活動と自宅で出産することの意味を語った『フィーリング・バース 心と体で感じるお産』(矢島床子・三井ひろみ著、バジリコ刊)だからだ。

親たちも子どもたちも、質素なパイキングの料理を紙皿に乗せて、元気でにこやかにおしゃべりに熱中。みんなそれぞれに自宅か矢島さん宅でお産をしたという熱い感動を共通に体験したうえに、妊娠中にはお産についての学びのためのクラスで一緒だったので、母親たちの間にはクラスメートのような親密感が漂っていた。

そしてもう一つ、会場の雰囲気をもっと熱くしたのは、会場の三方の壁に展示されたお産の瞬間や生まれた赤ちゃんを抱いた母親の喜びの表情など数々の写真だった。私が最も感動した写真は、懸命に出産中の妻の両手を若い夫が握り、三歳と五歳くらいの二人のお兄ちゃんたちも母親の手を握って、助産婦とともに励まし安心させているシーンだった。一つの生命の誕生を囲む家族の心のつながりが、目に焼きつくほど鮮明な形になって現われた瞬間と言おうか。そういう出産だから、子どもたちののびやかで明かるいこと！

矢島さんは、産院や助産院での勤務を経験してから独立して開業。それからの二十年間に三千人以上の赤ちゃんの誕生を支えてきたという。何とすばらしい仕事をしてきたことか。

今の日本社会は、子どもたちに「命の大切さ」を理解させるのが難かしいと、先生たちは悩んでいるという。

一体、なぜ「命の大切さ」を教えるのが難かしくなっているのか。私は1936年生まれで、戦前・戦中・戦後の混乱期に子ども時代を過ごした。親や先生に「命の大切さ」をあらためて教えられた記憶はない。だが、「命の大切さ」については、子どもの頃から体にしみついた形でわかっていたと思う。その理由は、私なりに整理してみると、次のようなものだった。

- (1) 兄弟姉妹も近所の友達も多く、群れをなして遊ぶ中で、たとえ喧嘩をしても、急所は蹴ってはいけないとか卑怯なことはしてはいけないということを、子ども同士の中で教えられた。
- (2) テレビもゲームもなく、暴力や殺戮の過激な映像が、社会の中でも家庭の中でも、日常的に提供されることはなかった。
- (3) 出産も闘病も老衰も死も、日常の家庭の中にあり、幼少期から生老病死を自然な人間の営みとして、身近に見ていた。戦死や空襲死は恐ろしい別次元のものだった。
- (4) 親子三代、同居または近くに住むことが多く、子どもの数も多かったので、「人の道」として生き方ややってはいけないことや生活の知恵が、いわば家族の文化として、日常生活の中で伝承されていた。

(5) 日本全体として貧しい家が多かったことから、子どもでも自分で自分の生活に責任を持ち、早く自立しなければならないという自律心と自立心を、十代半ば頃には持つのが一般的だった。

これに対し、今の時代はどうなっているかを比較してみる。

- (1) 兄弟姉妹が少なく、近所の子どもも少ないので、屋外で群れて遊ぶことはほとんどない。このため、家の中にしろ外にしろ、遊びの中で、社会性を身につける機会が少ない。
- (2) テレビやゲームで過激な情景に日常的に接するようになったうえに、子どもの心の中では、バーチャルな映像が現実的体験よりも優位になってしまうため、残虐行為に対する抵抗感が稀薄になって、より強い刺激を求める傾向が生じている。
- (3) 生老病死が病院や施設内でのことになってしまったため、命を愛おしむ心が育ちにくくなっている。戦争を映像でしか知らないので、殺戮をゲーム感覚でしかとらえられない。
- (4) 核家族化により、生きる知恵ややってはいけないことの心得などが伝承されにくく、大事な家族文化が断絶している。
- (5) 経済的に豊かになったことが、子どもの自律心・自立心の形成を遅らせているうえに、モノに対する欲望を膨張させ、カネ欲しさに走らせる要因になっている。

このような状況から考えると、子どもたちに自分や他者の命というものを実感的に理解させ命を大事にする心を育てるには、家庭や地域や保育園・幼稚園や学校や自治体・国などあらゆる次元で多様な取り組みをしなければならないことがわかる。

そうした取り組みの核心は、子どもたちにバーチャル映像情報に接する時間を極力少なくして、生身の人間同士の接触や自然環境の中での遊びやじっくりと本を読むといった現実体験を多くすることだと、私は考えている。それは、子どもたちに感情のきめ細かな分化発達や考える力と言語力の発達をもたらすものでもある。

幼い時期に母親や父親が毎日絵本を読み聞かせることは、IT 支配の時代には新たな重要性をもっている。絵本は言葉（文）、絵、親が感情をこめて読む肉声、絵をじっと見たり頁を戻ったりするなど子どもが自分でコントロールするのびやかな時間、それら四つの要素がそろうことで、すばらしい現実体験になるのだ。

朝の登校前はテレビをつけないで、親と一緒に食事をすることや、テレビは選択した番組だけ見ること、子ども部屋にはテレビやパソコンを置かないことなどを実践するだけでも、子どもの心の成長にプラスになる。学校でも、各教科ごとに知識のつめこみでなく、子どもたちの心に感動をもたらすような農作業、山野での自然観察、動物飼育など、実体験的な授業の進め方の工夫が求められる。

本稿の冒頭に夫や幼い子も一緒になって出産する母親を支える情景を紹介したのは、生老病死の様々な段階の現場に、子どもを含めて家族全員でかかわることが、子どもたちに命や家族の絆というものを実感レベルで理解させる原点だからだ。そんなすばらしい自宅での出産が今でも可能なのだという事実は、いのちを愛しく思う心を稀薄にしてしまう IT 革命やネット社会の中で取り戻すべきものを象徴的に示していると言えよう。

第 部 資料編

兵庫県教育委員会 命に関する教育のこれまでの取組

自然学校(小学校 S63~)

防災教育検討委員会(H7)

阪神・淡路大震災(H7)

ひょうごっ子悩み相談センター(H7~)

子どもたちに生きる力を育む教育懇話会(H8)

命を大切にし、生きる力を育む
教育の展開について

須磨区連続児童殺傷事件(H9)

感動体験プログラム構想委員会(H9)

体験的手法を用いて子どもたちに「生きる力」を育む

心の教育緊急会議(H9)

生と死を考え、生命の大切さを
学ぶ教育を充実させる

人権教育の在り方懇話会(H9)

人権教育基本方針(H10~)

人権教育指導プログラム(H16~)

ボルネオ・ジャングル体験スクール(H10~)

クリエイティブ21(H12~H16)

地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」

推進事業(中学校 H10~)

心の教育総合センター(H10~)

心の教育の授業に関する
実践的研究(H10~)

生き方を学ぶ性教育検討委員会(H9)

生と死を考える教育(H10~)

YU・らいふ・サポート事業

(盲・聾・養護学校 H12~)

生と死を考える教職員研修(H10~H13)

高校生地域貢献事業

トライやる・ワーク

高校生就業体験事業

インターンシップ推進プラン

(高等学校 H17~)

児童生徒の心に響く道徳教育推進事業(H14~)

道徳教育推進アクションプラン(H16・H17)

「命の大切さ」を実感させる教育プログラムの策定(H17)

兵庫県教育委員会 命に関する教育のこれまでの取組（委員会等の報告から抜粋）

番号	委員会名等	内容等	具体的取組								
1	防災教育検討委員会 (平成7年10月) <委員長 河合隼雄>	<p>【内容】</p> <p>2 学校における防災教育の充実</p> <p>(2)「新たな防災教育」の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒に命の大切さを教えていくことは教育の原点である。 ・人間教育を原点に据えた防災教育を推進する。 <p>(3)震災体験を生かした教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震災体験を通じて学んだ「助け合いの心」「思いやりの心」を社会に根付かせる教育を推進する。 ・自然学校等の事業をとおして豊かな感受性、自然への畏敬の念を育てる。 <p>(4)ボランティア教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室では学べないものを学ぶ。 ・ボランティア活動等に主体的に参加できるような場や機会の充実を図る。 <p>3 心の健康管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震災により生じた困難な現実を乗り越え、生きがいをもって心豊かに生きていくための支援体制の整備 	<p>1 防災教育関連の会議の継続</p> <p>2 副読本・指導書、実践事例による防災教育の推進</p> <p>3 災害対応マニュアル等の学校防災体制の整備</p> <p>4 震災・学校支援チーム（EARTH）の設立、被災地への派遣</p> <p>5 防災教育、防災訓練をとおした地域との連携</p>								
2	子どもたちに生きる力を育む教育懇話会 (平成8年8月) <座長 河合隼雄>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>現 状</th> <th>課題・提言等</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <p>(1)子どもたちが死を実感としてとらえにくくなっている。</p> <p>(2)子どもたちに感動体験が少なくなっている。</p> <p>(3)震災をとおして、今生きていることの喜び、人間の価値とその存在の尊さを改めて確認した。</p> </td> <td> <p>生きることへの積極的構えを培う</p> <p>(1)生きること、命の大切さをいかに感得させるか。</p> <p>(2)スポーツや芸術文化における感動体験をどのように人間形成に生かすか。</p> <p>(3)子どもたちにどのように感動と夢を与えるか。</p> <p>(4)震災から学んだ教訓を生かして「生きる力」をいかに育むか。</p> </td> </tr> </tbody> </table>	現 状	課題・提言等	<p>(1)子どもたちが死を実感としてとらえにくくなっている。</p> <p>(2)子どもたちに感動体験が少なくなっている。</p> <p>(3)震災をとおして、今生きていることの喜び、人間の価値とその存在の尊さを改めて確認した。</p>	<p>生きることへの積極的構えを培う</p> <p>(1)生きること、命の大切さをいかに感得させるか。</p> <p>(2)スポーツや芸術文化における感動体験をどのように人間形成に生かすか。</p> <p>(3)子どもたちにどのように感動と夢を与えるか。</p> <p>(4)震災から学んだ教訓を生かして「生きる力」をいかに育むか。</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>今後の教育の方向性</th> <th>具体的取組</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <p>(1)命の大切さを感得させ、よりよく生きることを考えさせる。</p> <p>(2)感動や夢を与え、生きる目標を持たせる。</p> <p>(3)自ら命を絶つことは決してあってはならないことを理解させる。</p> <p>(4)震災の教訓を、たくましく「生きる力」の育成に生かす。</p> </td> <td> <p>感動や夢を与える事業の展開 感動体験プログラム構想委員会(H9)</p> <p>性教育の在り方の検討 生き方を学ぶ性教育検討委員会(H9)</p> <p>生と死を考える教育・宗教的情操を培う教育の実施 生と死を考える教職員研修(H10~13)</p> <p>人間教育の視点に立った「新たな防災教育」(H7~16)の推進 学校防災マニュアル・地震対応マニュアル・防災教育実践講座</p> </td> </tr> </tbody> </table>	今後の教育の方向性	具体的取組	<p>(1)命の大切さを感得させ、よりよく生きることを考えさせる。</p> <p>(2)感動や夢を与え、生きる目標を持たせる。</p> <p>(3)自ら命を絶つことは決してあってはならないことを理解させる。</p> <p>(4)震災の教訓を、たくましく「生きる力」の育成に生かす。</p>	<p>感動や夢を与える事業の展開 感動体験プログラム構想委員会(H9)</p> <p>性教育の在り方の検討 生き方を学ぶ性教育検討委員会(H9)</p> <p>生と死を考える教育・宗教的情操を培う教育の実施 生と死を考える教職員研修(H10~13)</p> <p>人間教育の視点に立った「新たな防災教育」(H7~16)の推進 学校防災マニュアル・地震対応マニュアル・防災教育実践講座</p>
現 状	課題・提言等										
<p>(1)子どもたちが死を実感としてとらえにくくなっている。</p> <p>(2)子どもたちに感動体験が少なくなっている。</p> <p>(3)震災をとおして、今生きていることの喜び、人間の価値とその存在の尊さを改めて確認した。</p>	<p>生きることへの積極的構えを培う</p> <p>(1)生きること、命の大切さをいかに感得させるか。</p> <p>(2)スポーツや芸術文化における感動体験をどのように人間形成に生かすか。</p> <p>(3)子どもたちにどのように感動と夢を与えるか。</p> <p>(4)震災から学んだ教訓を生かして「生きる力」をいかに育むか。</p>										
今後の教育の方向性	具体的取組										
<p>(1)命の大切さを感得させ、よりよく生きることを考えさせる。</p> <p>(2)感動や夢を与え、生きる目標を持たせる。</p> <p>(3)自ら命を絶つことは決してあってはならないことを理解させる。</p> <p>(4)震災の教訓を、たくましく「生きる力」の育成に生かす。</p>	<p>感動や夢を与える事業の展開 感動体験プログラム構想委員会(H9)</p> <p>性教育の在り方の検討 生き方を学ぶ性教育検討委員会(H9)</p> <p>生と死を考える教育・宗教的情操を培う教育の実施 生と死を考える教職員研修(H10~13)</p> <p>人間教育の視点に立った「新たな防災教育」(H7~16)の推進 学校防災マニュアル・地震対応マニュアル・防災教育実践講座</p>										
		<table border="1"> <thead> <tr> <th>契機・内容</th> <th>課題・提言等</th> <th>今後の教育の方向性</th> <th>具体的取組</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <p>神戸市須磨区の小学生連続殺傷事件は、「現在の子どもたちが置かれている状況をどのようにとらえるか」「子どもたちの心の成長をどのように図っていくか」などを鋭く問いかけた。県教育委員会は、事件に関わる情報の収集や当面の対応策と今後の教育課題等を検討するため、「緊急プロジェクトチーム」を</p> </td> <td> <p>1 生と死を考え、生命の大切さを学ぶ教育の充実について</p> </td> <td> <p>生命に対する畏敬の念を豊かに醸成する。</p> <p>「生と死を考える教育」を推進する。</p> <p>自然体験、生活体験などの機会の充実を図る。</p> </td> <td> <p>子どもたちの内面に自己肯定感・成就感、規範意識等を育むことをねらいとして、</p> <p>小学校 「自然学校」</p> <p>中学校 「トライやる・ウィーク」</p> <p>高等学校 「ふれあい育児体験」「インターンシップ」、体験的な学習活動を内容とした「クリエイティブ21」を実施した。</p> </td> </tr> </tbody> </table>	契機・内容	課題・提言等	今後の教育の方向性	具体的取組	<p>神戸市須磨区の小学生連続殺傷事件は、「現在の子どもたちが置かれている状況をどのようにとらえるか」「子どもたちの心の成長をどのように図っていくか」などを鋭く問いかけた。県教育委員会は、事件に関わる情報の収集や当面の対応策と今後の教育課題等を検討するため、「緊急プロジェクトチーム」を</p>	<p>1 生と死を考え、生命の大切さを学ぶ教育の充実について</p>	<p>生命に対する畏敬の念を豊かに醸成する。</p> <p>「生と死を考える教育」を推進する。</p> <p>自然体験、生活体験などの機会の充実を図る。</p>	<p>子どもたちの内面に自己肯定感・成就感、規範意識等を育むことをねらいとして、</p> <p>小学校 「自然学校」</p> <p>中学校 「トライやる・ウィーク」</p> <p>高等学校 「ふれあい育児体験」「インターンシップ」、体験的な学習活動を内容とした「クリエイティブ21」を実施した。</p>	
契機・内容	課題・提言等	今後の教育の方向性	具体的取組								
<p>神戸市須磨区の小学生連続殺傷事件は、「現在の子どもたちが置かれている状況をどのようにとらえるか」「子どもたちの心の成長をどのように図っていくか」などを鋭く問いかけた。県教育委員会は、事件に関わる情報の収集や当面の対応策と今後の教育課題等を検討するため、「緊急プロジェクトチーム」を</p>	<p>1 生と死を考え、生命の大切さを学ぶ教育の充実について</p>	<p>生命に対する畏敬の念を豊かに醸成する。</p> <p>「生と死を考える教育」を推進する。</p> <p>自然体験、生活体験などの機会の充実を図る。</p>	<p>子どもたちの内面に自己肯定感・成就感、規範意識等を育むことをねらいとして、</p> <p>小学校 「自然学校」</p> <p>中学校 「トライやる・ウィーク」</p> <p>高等学校 「ふれあい育児体験」「インターンシップ」、体験的な学習活動を内容とした「クリエイティブ21」を実施した。</p>								

3	心の教育緊急会議 (平成9年10月) <座長 河合隼雄>	<p>発足させた。また、今後の教育課題については、大所高所から新たな方向性を得るために有識者等からなる「心の教育緊急会議」を設置した。</p> <p>【協議のまとめ】</p> <p><現在の子どもたちをより深く理解する視点></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 子どもは固有の内的世界をもっている 2 子どもたちは成長しつつある存在である 3 思春期は自己を根底から再構築する時期である 4 子どもたちの生き方の根底には人間関係がある 5 子どもたちは自分の感性や価値観に合った生き方を身につけていく 	2 家庭における基本的な生活習慣や倫理観などの育成の充実について	<p>子どもが社会人として生きていくために必要な規範意識の育成は、本来的に家庭が担うべきものであり、その機能を高めるため、親の意識変革を促す。</p> <p>子どもに真の自立を促し、得意な分野を伸ばし、積極的な生き方を身につけさせる家庭教育を進める。</p> <p>子どもたちの自尊感情など豊かな心を育むには、地域全体で子どもを育てるという気運を高め、家族そろって地域活動などに参画することが大切である。</p>	<p>「心の教育に関する学校・家庭・地域連絡会議」の設置(H10)</p> <p>(小・中学校)「いきいき学校」応援事業(H14~)</p> <p>子育て学習活動推進事業(H9~11)</p> <p>PTCA活動(H13~)</p>
			3 情報化社会の光と影に対応した心の教育の在り方について	<p>幼児期から生活体験や自然体験などの直接的な体験を積みませ、みずみずしい感性や豊かな人間関係を育てる。</p> <p>テレビの多チャンネル化等、多種多様なメディアを活用することにより、子どもたちの心を豊かにさせ、多面的・多角的なものの見方を身につけさせる。</p> <p>子どもたちの健全な心の成長を促すための情報リテラシーの育成に努め、情報化社会の持つ影の部分についても指導の充実を図る。</p>	<p>情報倫理に関する実践的研究の推進 兵庫県インターネット利用推進協力者会議(H10)・インターネット活用の手引き刊行・配布(H11.3)</p> <p>高度情報化社会に対応した教員研修 県立教育研修所における情報教育研修講座の実施</p> <p>教育情報ネットワーク(インターネット版)の拡充</p>
			4 心の教育の充実に向けた教育システムの在り方について	<p>子どもたち一人一人を大切にし、個性を伸ばす教育の充実に向けて、学校全体の弾力的な指導体制や指導方法の改善を図る。</p> <p>子どもたち一人一人の様々な生き方に対応するために、学校以外の教育機関等を積極的に活用する。</p> <p>子どもの内的世界を多面的・総合的に理解するために、学校外から、カウンセラーなどの専門家を招聘する。</p>	<p>中学校における長期体験学習の導入 地域に学ぶトライやる・ウィーク推進事業(H10~)</p> <p>多様な問題に対応する心の教育相談センターの設置 心の教育総合センターの設置(H10.4)</p>

4	感動体験プログラム 構想委員会 (平成9年12月) <委員長 横山利弘>	現状・契機	課題・提言等	今後の教育の方向性	具体的取組
		・平成8年の「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」の提言を受けて設置。 (現状) 直接的な体験の減少・コンピューター等の画像などによる疑似体験や間接体験の増加 孤立化する子どもたち・薄れる自然への畏敬の念・希薄な人間関係	今なぜ感動体験か 2 感動は「生きる力」の源	体験活動で得た感動は、問題解決のきっかけになることもあり、また感動そのものが直接的に生きていく自信につながる場合もある。	ジャングル感動体験事業(H10～) (高等学校)クリエイティブ21(H12～16) 高等学校におけるその他の科目「体験活動」の設定
		直接的な体験の減少・コンピューター等の画像などによる疑似体験や間接体験の増加 孤立化する子どもたち・薄れる自然への畏敬の念・希薄な人間関係	感動はどこから生まれるか 1 行動する 2 人生を探索する 3 本物と出会う 4 異質なものと出会う 5 辛さを乗り越える	人は、異質なものや意外なものとの出会いによって、驚き、感動を覚え、探求へと導かれていく。	
		感動する心をどう育てるか 3 生と死を考えさせる	子どもたちの発達段階に即して、生と死について自ら考えさせ、生命の有限性や今ここに生きていることの素晴らしさや自他の命を尊重することの大切さを教える必要がある。		
5	生き方を学ぶ性教育 検討委員会 (平成10年1月) <委員長 梶田叡一>	現状・契機	課題・提言等	今後の教育の方向性	具体的取組
		(子どもたちの現状) 1 ゆとりのない生活 2 社会性の不足と倫理観の欠如 3 自立の遅れ 4 健康・安全の問題 等	生き方を学ぶ性教育のポイント	生き方を学ぶ性教育は、生命の誕生の学習を通して生きることや生命の大切さを学習するとともに、生きとしいけるものは必ず死を迎えることから、死がもたらす悲しみやつらさ等の喪失体験を学習するなど、生と死を表裏一体でとらえる性教育を推進しなければならない。	○「生き方を学ぶ性教育」教師用指導資料(小学校低学年用、高学年用、中学校用、性非行に関する問題を防ぐための指導の手引き)作成・配布(H10.1)
			生命の大切さを実感すること	生命の誕生から死に至るまでの過程を理解し、生命のかけがえのなさを自覚させることが重要である。人間の誕生の喜びや死の重さ、生きることの尊さを知り、自他の生命を尊重して強く生き抜こうとする心を育てること。	
		人間としての生き方の根源	生きていることのすばらしさや喜びを味わわせる。 生きがいを持たせる。 生命や自然に対する畏敬の念を培う。 自他の生命の尊重や、動植物をいつくしむ心。		

6	人権教育の在り方懇話会 (平成9年11月) <座長 浦部法穂>	契機・内容	課題・提言等	今後の教育の方向性	具体的取組
		<ul style="list-style-type: none"> 平成8年の「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」の提言を受け設置。 人権教育基本方針を平成10年3月策定。 	(1)自尊感情の形成	(1)子どもに、自己教育力の基盤があるとされる自尊感情を形成することが必要。達成感や成就感が味わえる多様な体験を積ませることが大切。	○「人権教育指導プログラム」配布(H16) 人権教育基本方針に掲げた「4つの内容」を具現化するために「生命と環境」はじめ、人権課題を7分類し、子どもに培いたい人権に関わる知識・技能・態度に対応したねらいを明確にした指導プログラム。
			(2)生命の尊厳	(2)生命の尊厳についての認識 自然と人間、生命と人権の関わりなどについての学習を重ねることが必要。また心の教育との関連を図りながら、感動体験などの機会の充実を図るなど生命を身近に感じさせることも重要。	
(3)思いやりの心の育成	(3)人と人とが共生していくには、さまざまな個性や生活背景を持つ人々との出会いや交流を重ねて人間関係を活性化させていくことが必要。				
7	生と死を考える教職員研修プログラム開発委員会 (平成10年5月)	契機・内容	概要		具体的取組
		<ul style="list-style-type: none"> 「心の教育緊急会議」において「生と死を考える教育」の推進が提唱され、その結果設置された。 教職員に生と死を考える教育を推進するための実践的指導力を培う研修プログラムを先導的に研究・開発した。 	教職員研修資料 「生と死を考える教育」の概要 1 「生と死を考える教育」の基本的な考え方の提示 「生と死を考える教育」は、子どもたち一人一人が「生命の尊さを実感する教育」としてこれからの「心の教育」の重要な教育的課題である。 2 教職員研修モデルプログラム 小学校・中学校・高等学校・県立教育研修所などにおける研修のモデルプログラムの提示 3 アプローチの手法 話し合いをより有効にすすめるための手法の紹介 4 「生と死を考える教育」関連図書・関連ビデオ内容紹介		○県立教育研修所において「生と死を考える」研修講座の実施(H10～13)

兵庫県教育委員会 命に関する教育のこれまでの取組（事業等）

番号	事業名等	内容等	具体的成果
1	自然学校推進事業 (昭和63年～)	「知識偏重」の教育を見直し、子どもたちに自然とのふれあいや体験活動を大切にすることを求めた「こころ豊かな人づくり」県民運動を背景に昭和63年度からスタートした。平成3年度から県内の全公立小学校5年生を対象に実施してきた自然学校は、学習の場を教室から豊かな自然の中へ移し、5泊6日のゆとりある日程の中で、学校では得がたいさまざまな体験により右のような成果をあげてきた。	<p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> 自然に対する興味関心を抱くとともに、豊かな感性や知的好奇心、探究心をはぐくんでいる。 5泊6日の集団生活の中で、協調性や社会性をはぐくみ自分自身や他者の長所や能力を発見している。 活動を最後までやり遂げた経験により、忍耐力や問題解決能力を育て、達成感、達成感を実感し自立心をはぐくんでいる。 自然を大切にしようと思ったり、人間としての在り方、生き方を考えさせる場となっている。 規則正しい生活をとおして基本的な生活習慣を大切にしている意識を培っている。 人とのふれあいや友だちと協力することの大切さを実感させる場となっている。
2	「ひょうごっ子悩み相談センター」の設置 (平成7年4月)	平成7年度、県立教育研修所に「ひょうごっ子悩み相談センター」を開設した。同センターは、いじめ、不登校、友人関係などで悩んでいる児童生徒や保護者などの相談に応じ、県下の児童生徒等の心の悩みの解消を図ることを目的とした。	<p>「ひょうごっ子悩み相談センター」は県の教育相談事業「ひょうごっ子悩み相談」のセンターの機能を有しており、市郡町教育委員会及び各相談機関と連携を密にし、本部・地区運営委員会等を通じて、教育相談体制の充実を図っている。</p>
3	地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」推進事業 (平成10年～)	<p>内容等</p> <p>(背景)</p> <p>「心の教育緊急会議」において、これからの「心の教育」には、従来のように結論を教え込むのではなく、活動や体験を通して、子どもたち一人一人が自分なりの生き方を見つけられるよう支援していく教育にシフトしていくことの重要性が指摘された。それとともに、提言の具現化に向けた取組の一つとして中学生の長期体験学習の導入が提唱された。</p> <p>(趣旨)</p> <p>地域に学び、共に生きる心や感謝の心を育み、自律性を高めるなど、「生きる力」の育成を図っていくことが肝要である。さらに、この体験活動の推進にあたっては、保護者・地域社会・関係機関等の十分な理解を得るとともに、校区推進委員会のより一層の充実を図り、新たな教育の創造へとつなげていくことが大切である。</p> <p>(体験活動の内容例)</p> <ul style="list-style-type: none"> 勤労生産活動：農業、酪農、漁業、林業等の活動 職場体験活動：地域のいろいろな職場での体験活動 文化・芸術創作活動：絵画や音楽等の活動、地域・郷土芸能活動 ボランティア・福祉体験活動：福祉施設等での活動 その他：外国人との交流、情報・科学技術・環境等に関する活動、発掘調査活動等 <p>(「トライやる・ウィーク 青春への助走 指導の手引き」H17)</p>	<p>成果</p> <ol style="list-style-type: none"> 生徒の自己認識の深まり <ul style="list-style-type: none"> 「トライやる・ウィーク」を体験することによって、充実感や達成感などが得られ、自己有用感・自尊感情を生み出すことにつながり、そのことが、生きることへの積極的な姿勢、自己の確立、生き方の探求などの基盤をつくることに寄与している。 学校を離れ、大人の世界に加わりながら、指導ボランティアや同級生と共に自分の役割や責任を担う体験をすることにより、不登校生徒も、自己の存在感を実感し精神的に安定できる場所 - 心の居場所 - を見つけている。さらに学校と家庭等が連携して子どもにアプローチすることで、彼らの活動への意欲が高まっている。 教師の生徒理解の深まり <ul style="list-style-type: none"> 教育の場を地域に移した体験活動では、教師が学校とは違った子どもの一面を発見できるなど、生徒を多面的に見ることができるとともに、また学校では見られない生徒の良さや可能性に気づくことにより、これからの教育活動を考える契機となっている。 親子関係の変化 <ul style="list-style-type: none"> 家庭を必要としつつも、以前のように甘えることが難しくなり、家族とのコミュニケーションが活発でなくなることの多い中学生が、親と話題を共有でき、話し合いが促進され、コミュニケーションが図られている。 <p>トライやる・ウィーク評価検証委員会の提言（H15）</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒一人一人が、自己をよりよく生かせるような生き方を探れるように、学校の取組の一層の充実を図る。 体験の成果が深まるような事後指導の研究 教職員が生徒一人一人の願いや夢を深く理解し、生徒が自らの個性をより発揮できる取組の推進 <ul style="list-style-type: none"> 家族相互のコミュニケーションを深め、家庭を子どもの心を育む土壌とする。 生き方や保護者の仕事等についての日常的な会話の充実 家族と子どもが共に参加できる体験活動や、中学生が家族の代表として地域の様々な活動へ参加することの推進

4	ジャングル感動 体験事業 (平成10年～)	目標		取組	
		ボルネオジャングル体験スクールの目的 1 日本の児童に世界で最も生物多様性の高いボルネオ島の熱帯雨林を体験する機会を提供し、自然や生命への関心や熱帯雨林保全など地球環境問題への理解を深める。 2 日本とマレーシアの児童の国際交流の場を提供し、両国の親善を深めると共に、熱帯雨林保全など地球環境問題への国際的な相互理解の育成をはかる。		(趣旨) 子どもたちに世界有数の貴重な原生林が残っているボルネオ島の熱帯雨林を感動体験させる。すばらしい大自然の中で自然や生命への関心を高め、熱帯雨林の保全など地球環境問題の理解とともに、現地の人々と交流し友好関係を深め、人と自然を大切にしながらたくましく生きる子どもたちの育成を推進する。 (対象) 県内在住・在学の小学校6年生から高校3年生までの男女児童生徒	
5	心の教育に関する 実践的研究 (平成10年～)	目的		取組の結果	
		県立教育研修所心の教育総合センターにおいて、学校における児童生徒の心の教育の実践を目標に、具体的な心の教育の授業案を先導的に開発・研究するとともに、その授業実践の教育的意義について実証的に研究する。		学校における「心の教育」授業実践研究の取組を、小・中・高等学校の教員委員を中心に平成10年度より開始し、研究報告として冊子にまとめて県下公立学校に配布。 『心の教育授業実践研究』第1号～第6号より抜粋 ・第4号小学校中・高学年「ぼく、わたしのいいところ発見」「私の大切な仲間へ」 ・第5号中学校「認め合い・支えあう・信頼関係づくり」 ・第6号高等学校「生と死を見つめる授業」	
6	児童生徒の心に響く 道徳教育推進事業 (道徳教育推進協議会) (平成14年～)	現状・委員会	課題・提言等	今後の教育の方向性	具体的取組
		文部科学省の「平成14・15年度児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」実施校等に指定された推進校及び推進地域における事業推進を支援する助言及び提言を行う「兵庫県道徳教育推進協議会」<委員長 横山利弘>を設置し、兵庫の道徳教育の今後の充実に向けた提言を行った。	成熟社会に「生きる力」を道徳教育ではぐくもう。	豊かな人間性や社会性を基盤として、どのような時代にあっても自ら主体的に判断し、社会に参画する意識や態度を育む。自己肯定感を養い、未来を切り拓く夢や希望を子ども自らがはぐくめる力を身につけさせる。価値観の多様化する中であっても、思いやりや共生の心を大切に、人間としてよりよく生きる道を追究する資質・能力をはぐくむ。	文部科学省の「平成14・15年度児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」まとめ『心に響く道徳教育をめざして - 兵庫の道徳教育への提言 -』刊行(H16.3)
			豊かな体験を子どもに道徳性をはぐくむ取組に生かそう。	「自然学校」や「トライやる・ウィーク」など豊かな体験活動をさらに充実させ、本物にふれ心が揺れる機会を意図的・計画的に設定する。さまざまな体験活動を有機的に連携させ、学校教育全体で取り組む道徳教育の「全体計画」に反映させる。体験活動により培われた認識を、道徳的価値という窓口から見直す機会を用意する。	
	家庭・地域社会との緊密な連携により、子どもを育てる機運を醸成しよう。	具体的行動目標を設定する。子どもの育ちを確認し合い、共有できる場を用意する。地域人材・地域素材の活用 地域の文化や伝統に誇りと愛着を持つ取組にする。			
7	「道徳教育推進アクションプラン」 (平成16・17年)	趣旨		取組	
		自然学校やトライやる・ウィークなど体験活動は、子どもたちに自然への畏敬の念を培ったり、地域の人々との絆を深め豊かな人間関係を築いたり、自己の存在や有用性を実感し社会の一員であることを自覚させたり、思いやりや規範意識を育むなどの成果をあげている。このような取組のさらなる発展・深化を図るためには、道徳の時間と有機的に関連を図るとともに、共に子どもを育てるという観点に立ち、家庭、地域社会と緊密に連携するなど総合的に道徳教育を推進する。		(1)道徳教育推進協議会の設置 (2)各学校における地域教材開発のための指導資料の作成 (3)道徳の時間の指導の在り方に関する教員研修の実施 (4)道徳教育フォーラムの開催 (5)道徳教育実践研究校・地域の指定 (6)地域の人材の導入(「いきいき学校応援団」の活用)	

「命の大切さ」を実感させる教育プログラム策定委員会設置要項

1 目的

子どもたちを取り巻く社会環境の急激な変化の中にあって、自他の命を大切にすることは、時代を超えても変わらないものであることを理解させるため、小学校、中学校、高等学校の発達段階に応じた、命の大切さを実感させる教育プログラムを、研究・開発する。

2 組織

委員会は、次により組織し、事務局を県立教育研修所心の教育総合センターに置く。

- | | |
|----------------|-------|
| (1) プログラム構想委員 | 6名以内 |
| (2) 意見聴取委員 | 4名程度 |
| (3) プロジェクト・チーム | 20名以内 |

3 期間

平成17年4月1日から平成18年3月31日までとする。

4 任務

各委員は以下の任務を行う。

- (1) プログラム構想委員は、子どもたちに「命の大切さ」を実感させる教育の在り方について、聴取委員からの意見を受けて、提言をまとめる。
- (2) 意見聴取委員は、子どもたちに「命の大切さ」を実感させる教育の在り方について、各識者の立場から意見を述べる。
- (3) プロジェクト・チームは、プログラム構想委員会の提言をもとに、小・中・高等学校、各校種に応じた「生きる喜び」を実感させる教育プログラムを研究・開発する。また、そのまとめとして「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム」を作成する。
- (4) 事務局は、本委員会の事務を掌る。

5 経費等

予算の範囲内で経費等を支出する。

附則

(施行期日)

- 1 この要項は、平成17年4月1日から施行する。
(この要項の失効)
- 2 この要項は、平成18年3月31日を限りに、その効力を失う。

『命の大切さ』を実感させる教育プログラム構想委員名簿（50音順）

氏名	所属等	備考
井本 智勢子	三木市教育長	
上地 安昭	県立教育研修所心の教育総合センター所長 兵庫教育大学大学院教授	
梶田 叡一	兵庫教育大学長 文部科学省中央教育審議会委員	委員長
加藤 寛	兵庫県こころのケアセンター研究部長	
藤井 美和	関西学院大学社会学部助教授 死生学・スピリチュアリティ研究センター長	

プロジェクト・チーム名簿

氏名	所属等	備考
富永 良喜	県立教育研修所心の教育総合センター主任研究員 兵庫教育大学大学院教授	リーダー
山田 良一	姫路市立白浜小学校教諭	
藤井 良子	小野市立来住小学校教諭	
吉見 達也	篠山市立篠山中学校教諭	
田中 順子	三木市立三木東中学校教諭	
原 実男	県立加古川南高等学校教諭	
井上 勇	県立明石西高等学校教諭	
田近 敏之	県教育委員会事務局義務教育課指導主事	
谷本 公子	〃 高校教育課指導主事	
桑原 浩	〃 人権教育課主幹	
浅井 憲一	県立教育研修所義務教育研修課指導主事	
山田 潔	〃 高校教育研修課指導主事	
野口 博史	〃 情報教育研修課指導主事	

事務局名簿

氏名	所属等	備考
常陰 則之	県立教育研修所教務部長	事務局長
石井 稔	〃 主任指導主事兼企画調査課長	
上月 靖	〃 総務課主査	
住本 克彦	〃 心の教育総合センター主任指導主事	
市橋 真奈美	〃 心の教育総合センター指導主事	
福井 加寿子	〃 研修員	

「命の大切さ」を実感させる教育への提言〔改訂版〕

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/>

発行日 平成 19 年 3 月

事務局 兵庫県立教育研修所 心の教育総合センター
〒673-1421

加東市山国 2006-107

電話 0795-42-3100

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567

神戸市中央区下山手通 5-10-1



ひょうご
「命の大切さ」
を実感させる教育